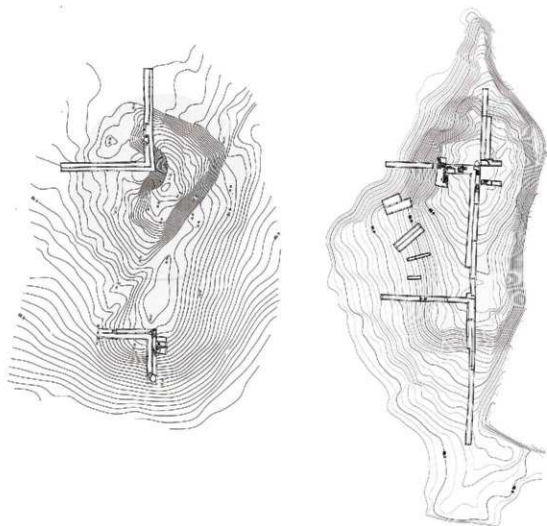


# 夕田墳墓群総括報告書 1 (発掘調査編)

杉洞 1号墳 ・ 蓮野 1・2号墳



2019

岐阜県加茂郡富加町教育委員会



## 序

富加町には、原始・古代の遺跡や神社・仏閣などの有形文化財が多く残され今も人々の暮らしの中に息づいています。

また奈良正倉院に現存する、最古の戸籍「大宝二年（702）御野国加毛郡半布里戸籍」の故地としても知られており、歴史と関わりが深い町です。

町の史跡を有効に活用するための基礎調査として、平成21年度から4ヶ年で実施した「夕田茶臼山古墳」の発掘調査では、当初の予想を遙かに上回る成果を得ることができました。具体的には、出土遺物や出土炭化物の年代から3世紀前半に築造された前方後円墳であることが明らかにすることができました。

岐阜県最古あるいは東海地方でも最古級とされ、平成27年3月には岐阜県史跡に指定されました。今回の調査は、夕田茶臼山古墳と同じく、当町の夕田地区に所在する「杉洞1号墳」「蓮野古墳」という2つの前方後円墳形とされる墳墓について、発掘調査を実施して墳墓群としての性格を明らかにしようとするものです。そして、なぜこの夕田地区に全国的にも希な古い墳墓が築かれたのか、その謎に迫ってみようという試みの調査であります。本書は第1分冊として発掘調査の成果をまとめ、次年度以降に分析調査と考察をまとめた第2分冊を刊行する予定です。

平成の最後、そして新たな元号の年を迎えた今、我々の故郷が辿ってきた道を知り、それを次代へ受け継いでいくことの重要性を深く感じています。さらに今回の夕田墳墓群の調査は「故郷を知り、受け継いでいく」という思いが、前提にあり、本書が刊行されることを喜ばしく思うとともに、本書が我々の「故郷」を知り、郷土を愛する心を育む一助となることを心から願っています。

最後になりましたが、調査に対して格別のご理解とご協力をいただきました地域の皆様方や、ご指導ご助言賜りました夕田古墳群調査検討委員会の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

富加町教育委員会

教育長 粥川 友和

## 例 言

1. 本書は富加町教育委員会が平成 28 (2016) 年度に実施した杉洞 1 号墳及び平成 29 (2017) 年度に実施した蓮野 1・2 号墳の確認調査の報告書である。
2. 本書は、平成 21～24 年度に実施した夕田茶臼山古墳（平成 25 年報告書刊行）を含めて「夕田墳墓群」と位置づけて検討を加えた総括報告書（発掘調査編）である。
3. 総括報告書は、「発掘調査編」と「分析・考察編」の 2 分冊で刊行する。本書は前者に該当する。
4. 当事業は、国庫補助金の交付を受けて実施した。
5. 当事業は、文化庁・岐阜県教育委員会及び夕田地区古墳群調査検討委員会の指導のもと、富加町教育委員会が実施した。
6. 調査の体制は以下の通りで実施した。

調査主体 富加町教育委員会

夕田地区古墳群調査検討委員会

委員長 広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）

早川 万年（岐阜大学教育学部教授）

赤塚 次郎（古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長）

吉川 真司（京都大学大学院教授）

村井 正覚（富加町文化財審議会委員）

高垣 浩規（富加町文化財審議会委員）

織部 博夫（富加町文化財審議会委員）平成 28 年度

柴田 典子（富加町文化財審議会委員）平成 29・30 年度

粥川 友和（富加町教育委員会教育長）

オブザーバー 松野 品信（岐阜県教育委員会社会教育文化課）平成 28 年度

小野木 学（岐阜県環境部文化伝承課）平成 29・30 年度

富加町教育委員会事務局

教育課長 河合 康広（平成 28 年度）

澤野 利博（平成 29・30 年度）

教育係長 日比野昌弘（平成 28・29 年度）

高田 崇正（平成 30 年度）

調査担当 高田 崇正（平成 28・29 年度は事務併任）

事務担当 山内 正明（平成 30 年度）

調査補助員 井上 晶子

7. 現地調査での調査支援業務として作業員・監理者派遣、労務管理、遺構測量及び園化作業等を（株）



イビソクに委託した。

8. 出土遺物の洗浄・注記・復元作業、実測図化作業、図版作成は島田崇正と井上晶子が行った。
9. 本書の執筆及び編集は島田崇正が担当した。
10. 土色注記の土色は『新版 標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編、日本色研事業株式会社、1993、東京）を用い、基準とした。
11. 本書に使用した地図は、富加町が平成16年に作成した25,000分の1都市計画図を、縮小して使用した。
12. 現地調査及び出土品整理作業並びに本書の作成に際して、次の方々からご意見ご指導を賜った。特に岐阜県教育委員会からは、現地指導に加えて現地検討会の開催など多大なるご協力をいただいた。皆様には厚く御礼申し上げる次第である。（敬称略）  
李 浩基・石井智大・小野木 学・恩田知美・川畑 純・近藤大典・白澤 崇・鈴木一有・高木 晃・田中弘志・趙 哲済・中井正幸・長江真和・中島和哉・長瀬治義・長屋幸二・櫛宮田佳男・林 正憲・日置 智・藤村 俊・三浦薫平・三宅唯美・森島一貴・渡辺博人
13. 出土品及び調査記録類は富加町郷土資料館にて保管している。
14. 夕田墳墓群の測量・理科学分析・考察をまとめた「分析・考察編」を次年度以降に刊行する予定である。

## 凡 例

1. 遺物の縮尺は、土器実測図を1/3とし、石器実測図を1/2とした。
2. 遺構実測図の縮尺は、それぞれに縮尺を表記した。
3. 遺物の編年観は次の文献を参考とした。  
赤塚次郎 1990「廻間式土器について」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター  
1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター  
早野浩二 2011「東海」『古墳時代の考古学1 古墳時代の枠組み』同成社  
藤田英博・高木宏和 2002「美濃」『弥生土器の様式と編年-東海編』木耳社  
恩田知美 2004「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初期の土器様相」『美濃の考古学』第7号  
渡辺博人 1984「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」各務原市教育委員会
4. 本書で報告する「杉洞1号墳」及び「蓮野古墳」は、昭和45年刊行の「富加村の古墳」や岐阜県遺跡地図においては前方後円墳と報告されている。しかし、今回の調査での主たる出土遺物はほぼ廻間Ⅰ式期（庄内式期）のものであり、前方後円墳と呼称するのが必ずしも適切ではないと判断し、埋葬施設を伴うであろう部分を「主丘部」、そこから一方へ伸びる部分を「突出部」と呼称した。
5. 弥生時代終末期から古墳時代にかけての東海編年と畿内編年の並行関係は、早野2011を参考としている。
6. 註は章ごとに振り分け、各章の文末に記した。

# 目 次

第1章 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
第2章 夕田墳墓群の既往の調査	
1 夕田茶白山古墳の調査の経過	9
2 夕田茶白山古墳の調査の成果	9
第3章 調査の目的と経過	
1 調査に至る経緯	15
2 調査体制	16
3 調査の方法と経過	16
4 日誌抄	19
第4章 杉洞1号墳の調査	
1 現況測量調査の成果	23
2 調査方法	26
3 基本層序	26
4 各トレンチの成果	
(1) 主丘部の調査	28
(2) 突出部の調査	34
(3) 出土遺物について	46
5 小結	51
第5章 蓮野1・2号墳の調査	
1 現況測量調査の成果	55
2 調査方法	57
3 基本層序	59
4 各トレンチの成果	
(1) 主丘部の調査	59
(2) 突出部の調査	68
5 小結	90
第6章 属性の整理と比較	95

## 図 版

図1	位置図	2
図2	周辺の地質図	3
図3	夕田墳墓群周辺地図	4
図4	夕田墳墓群の立地	5
図5	富加町遺跡分布図	6
図6	夕田茶白山古墳 トレンチ調査図 (1:3000)	10
図7	夕田茶白山古墳 墳丘横断面図及び後円部築造工程復元図	12
図8	夕田墳墓群 分布図	15
図9	杉洞1号墳現況測量図 (1:200)	24
図10	杉洞1号墳現況エレベーション図 (1:250)	25
図11	杉洞1号墳トレンチ配置図 (1:250)	27
図12	杉洞1号墳平面図・土層図 (1:50)	29
図13	杉洞1号墳遺物分布図及び上層写真 (1:50)	30
図14	杉洞1号墳2トレンチ平面図・土層図 (1:50)	32
図15	杉洞1号墳1・2トレンチ接合部土層検討図(墓壙の状況) (1:50)	33
図16	杉洞1号墳3トレンチ平面図・土層図 (1:50)	35
図17	杉洞1号墳3トレンチ調査写真	37
図18	杉洞1号墳3トレンチ土層写真	38
図19	杉洞1号墳4トレンチ平面図・土層図 (1:50)	40
図20	杉洞1号墳4トレンチ南北壁土層の対応関係について	41
図21	3トレンチ下層黒色土と4トレンチ黒色土の関係	42
図22	杉洞1号墳4トレンチ平面図・土層図 (1:50)	43
図23	杉洞1号墳4トレンチ SX02 高坏出土状況	44
図24	杉洞1号墳4トレンチ SK02 高坏出土状況写真	45
図25	杉洞1号墳出土土器① (1:3)	47
図26	杉洞1号墳出土土器② (1:3)	48
図27	杉洞1号墳 縦断面及び縦断面土層合成図 (1:150)	52
図28	杉洞1号墳築造前の旧地形の推定図	52
図29	杉洞1号墳復元図 (1:250)	53
図30	蓮野1・2号墳現況地形測量図 (1:300)	56
図31	蓮野1・2号墳トレンチ配置図 (1:400)	58
図32	蓮野1・2号墳1トレンチ北 実測図 (1:50)	60
図33	蓮野1・2号墳2トレンチ及び2号墳石室付近実測図 (1:50)	62
図34	蓮野1・2号墳2トレンチ及び石室付近土層図 (1:50)	63

図 35	石室実測図 (1:50) .....	64
図 36	蘇原 8 号墳 (1:200) .....	65
図 37	進野古墳 1 トレンチ中央部 (前方部墳頂) 平面図・土層図 (1:50) .....	66
図 38	主丘部と突出部の取付部分土層断面写真 .....	67
図 39	杉洞 1 号墳 1 トレンチ平面図・土層図 (1:50) .....	69
図 40	杉洞 1 号墳 3 トレンチ平面図・土層図 (1:40) .....	70
図 41	進野 1 号墳 1 トレンチ南 土塊土層図 (1:50) .....	72
図 42	進野 1 号墳 1 トレ南土層写真① .....	73
図 43	進野 1 号墳 1 トレ南土層写真② .....	74
図 44	杉洞 1 号墳 1 トレンチ南 遺物出土状況図 (1:50) .....	75
図 45	進野 1 号墳 1 トレ南下層出土土器写真 .....	75
図 46	進野 1 号墳 3 トレンチ土塊の向き (1:50) .....	77
図 47	進野 1 号墳 3 トレンチ実測図 (1:50) .....	78
図 48	進野 1 号墳 3 トレンチ遺物出土状況図 (1:50) .....	79
図 49	進野 1 号墳 3 トレンチ器台出土状況図 (1:10) .....	80
図 50	進野 1 号墳 4～7 トレンチ平面図 (1:50) .....	82
図 51	進野 1 号墳 4～7 トレンチ土層図 (1:50) .....	83
図 52	進野 1・2 号墳出土遺物① (土器 1:3、石器 1:2) .....	84
図 53	進野 1・2 号墳出土土器② .....	85
図 54	進野 1 号墳墳形想定図 (1:400) .....	90
図 55	進野 1 号墳 墳丘縦横断面図 .....	91
図 56	杉洞 1 号墳と進野 1 号墳の墳形比較 (1:400) .....	96
図 57	杉洞 1 号墳と進野 1 号墳の断面形比較 (1:150) .....	97

## 表

表 1	富加町遺跡一覧表 .....	7
表 2	夕田茶白山古墳の調査経過と主な成果 .....	9
表 3	杉洞 1 号墳出土土器台帳 .....	49
表 4	進野 1・2 号墳出土遺物台帳 .....	86

## 写真図版

1. 杉洞1号墳 墳丘東端付近土手状盛土 (1トレンチ)
2. 杉洞1号墳 墳丘東端付近 (1トレンチ)
3. 杉洞1号墳 墳丘中央付近 (1トレンチ)
4. 杉洞1号墳 墳丘中央付近 (1・2トレンチ)
5. 杉洞1号墳 墳丘中央付近 (2トレンチ) 東から
6. 杉洞1号墳 突出部側面 (3トレンチ) 北から
7. 杉洞1号墳 突出部土層 (3トレンチ東壁) 南西から
8. 杉洞1号墳 突出部中央付近堆積状況 (3トレンチ東壁) 西から
9. 杉洞1号墳 突出部墳裾付近堆積状況 (3トレンチ) 西から
10. 杉洞1号墳 突出部前面堆積状況 (4トレンチ) 北東から
11. 杉洞1号墳 突出部前面堆積状況 (4トレンチ南壁) 北から
12. 杉洞1号墳 突出部前面高坏出土状況 (4トレンチ南壁) 北から
13. 杉洞1号墳 突出部前面墳裾付近 (4トレンチ南) 北から
14. 杉洞1号墳 突出部前面堆積状況 (4トレンチ北壁) 南西から
15. 杉洞1号墳突出部 基底部高坏・壺出土状況 (4トレンチ) 北から
16. 杉洞1号墳突出部 基底部高坏・壺出土状況 (4トレンチ) 南から
17. 杉洞1号墳突出部 基底部高坏・壺出土状況 (4トレンチ) 北東から
18. 杉洞1号墳突出部 基底部高坏・壺出土状況 (4トレンチ) 西から
19. 杉洞1号墳突出部 基底部高坏・壺出土状況 (4トレンチ) 南東から
20. 杉洞1号墳突出部 SX02完掘状況 (4トレンチ) 南西から
21. 蓮野1号墳主丘部墳裾 (1トレンチ北) 北から
22. 蓮野1号墳主丘部堆積状況 (1トレンチ北) 北東から
23. 蓮野1号墳主丘部墳裾墳裾 (1トレンチ北) 東から
24. 蓮野1号墳主丘部地山検出状況 (2トレンチ) 西から
25. 蓮野1号墳主丘部盛土基底部堆積状況 (2トレンチ) 西から
26. 蓮野1号墳主丘部堆積状況 (2・5トレンチ) 西から
27. 蓮野1号墳突出部土塊堆積状況 (1トレンチ南) 南から
28. 蓮野1号墳突出部土塊検出状況 (1トレンチ南) 北から
29. 蓮野1号墳突出部堆積状況 (1トレンチ南) 西から
30. 蓮野1号墳突出部 地山上面炭化物・焦土検出状況① (1トレンチ南) 南から
31. 蓮野1号墳突出部 地山上面炭化物・焦土検出状況② (1トレンチ南) 南から
32. 蓮野1号墳突出部側面墳裾堆積状況 (3トレンチ) 南から
33. 蓮野1号墳突出部側面堆積状況 (3トレンチ) 南から
34. 蓮野1号墳突出部側面～墳頂部堆積状況 (3トレンチ) 南から

35. 蓮野1号墳突出部 墳裾堆積状況(3トレンチ)南から
36. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況①(3トレンチ)東から
37. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況②(3トレンチ)西から
38. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況③(3トレンチ)
39. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況④(3トレンチ)東から
40. 蓮野2号墳石室側壁及び閉塞石(2トレンチ)北から
41. 蓮野2号墳石室側壁及び閉塞石(2トレンチ)南から
42. 杉洞1号墳出土高坏
43. 杉洞1号墳出土高坏駒部
44. 杉洞1号墳出土土器①
45. 杉洞1号墳出土土器②
46. 杉洞1号墳出土土器③
47. 杉洞1号墳出土土器④
48. 蓮野1号墳出土器台
49. 蓮野1号墳出土器台
50. 蓮野1・2号墳出土遺物
51. 蓮野1号墳SX01出土須恵器坏身

## 第1章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

**地勢と立地** 富加町は濃尾平野の北東端に位置する。岐阜県の中南部に位置し、東部から南部にかけて美濃加茂市と、西北部を関市と接している。東、西、北を丘陵に囲まれた盆地状の地形であり、町の北東部に控える山地の間を津保川が西南へ流れ、東部の丘陵地より流れ出た川浦川と町の西端で合流し、関市南部を通過して岐阜市北東部で長良川へそそぐ。三和の山塊地（美濃加茂市）を出た川浦川は、町内を2分するように東西へ流れ、加治田沖で丘陵地から平野部に抜ける。ここで川幅を広げ、右岸側に後背湿地、左岸側に扇状地を形成する。左岸扇状地には、川に沿って、東西に舌状の微高地が発達し、その南側がやや低い後背湿地状となる。

夕田墳墓群は富加町の夕田地区に立地する。夕田地区は町の南東部に位置し、大きな谷状の地形となっている。谷状地形の奥部は2つの谷に分岐し、北側を北洞、南側を南洞と呼ぶ。2つの谷に挟まれた中央の丘陵北側には夕田茶臼山古墳が立地し、谷状地形の前面に迫り出した低丘陵上に杉洞1号墳と遠野古墳が立地している。

**現在の状況** 夕田地区の現在の集落は山沿いに広がり、谷の平坦部は水田に利用されている。夕田茶臼山古墳が立地する北洞の最奥部には溜め池があり、江戸時代には谷の水田に供給する水源として利用されていたことが記録されている。谷の入り口付近には「寺坪」「大沼」といった条里地名が残っており、土地改良以前は条里地割りを良好に残していた。八賀晋氏の研究によると、この条里地割りが平行四辺形を呈しており比較的古い地割りであると考察されている（註1）。

川浦川左岸の微高地上に集落や畑地が広がり、南の後背湿地が水田地帯となっており、微高地のおよそ北半部が、滝田、南半部と後背地が羽生という字名に分かれている。微高地上に集落が営まれ、その南に耕地（水田）が広がるという土地利用が基本的な景観と考えられる。

**周辺の地質** 夕田地区の地質は中新世の蜂屋累層で、流紋岩質溶結凝灰岩で構成される。杉洞1号墳と遠野古墳は、この蜂屋累層の西端に立地する。周辺には凝灰岩露呈がいくつもあり、墳墓群の築かれる地山も凝灰岩である。

### 2 歴史的環境

町内に分布する遺跡や周辺の遺跡を時代ごとに概観する。

まず岐阜県の旧石器研究の先駆けとなった恵日山遺跡がある。昭和28年に県立関高校社会研究部による踏査で、細石刃文化期を主体とする石器群であることがわかった。その他にも、恵日山山麓の北野遺跡、川浦川右岸の大山北野遺跡でもナイフ形石器・槍先形尖頭器などが採集されている。

縄文時代の遺跡としては、車塚遺跡、恵日山遺跡で前期の北白川下層式土器が、本郷遺跡では中期の加曾利E式土器の散布が確認されているが、いずれも未調査であり実態は判明していない。河岸段丘上の山裾に分布する傾向がある。

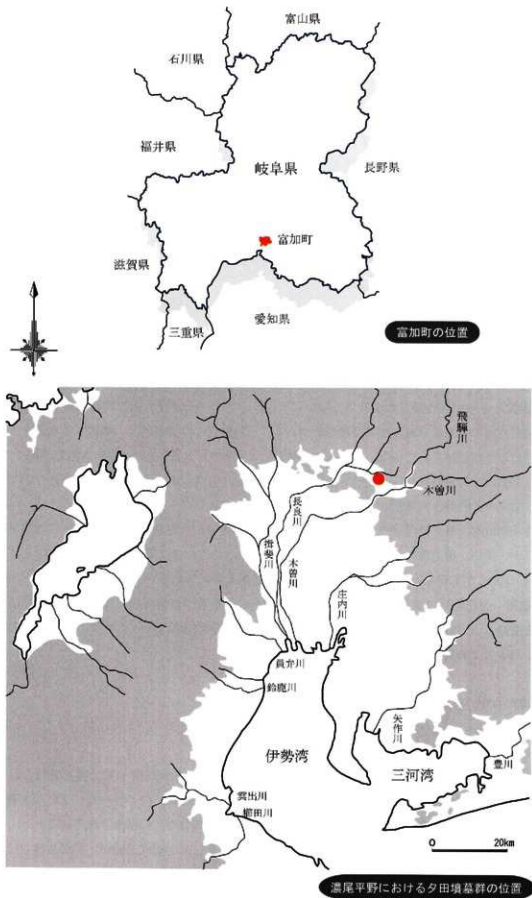
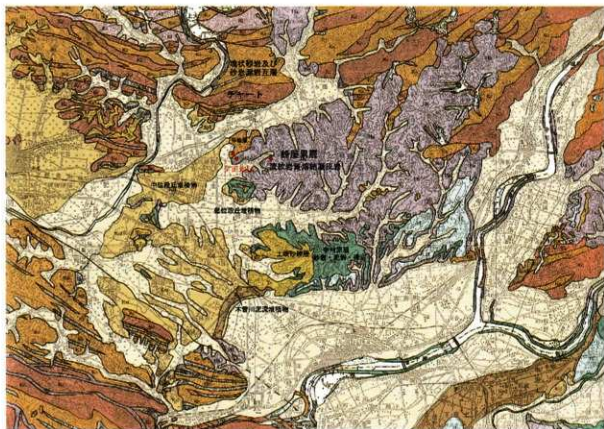


図1 位置図



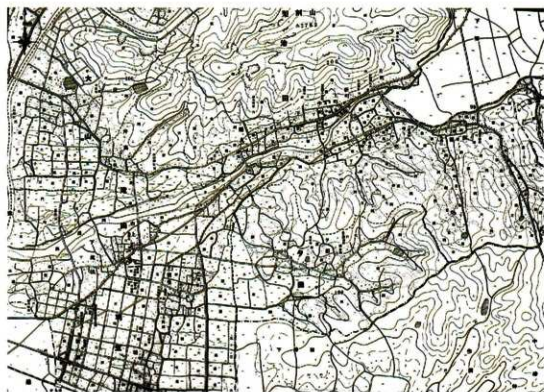


第2図 周辺の地質図（「美濃加茂地域の地質図」美濃加茂市民ミュージアム 2003 を一部改変）

弥生時代では、昭和53年から実施された県教委による半布里遺跡範囲確認調査では、中期の貝田町式に属する堅穴住居跡2棟が確認されている。また東山浦遺跡D地点発掘調査（平成9年）では信州の弥生中期土器である百瀬・栗林式の土器が出土すると共に、後期の凹線文土器も一定量出土している。発掘調査や表採資料の中に、現在までのところ、弥生前期の資料の確認はなく、川浦川左岸の平地部に中期貝田町式が多く分布する傾向から、左岸微高地に当該期集落が展開した可能性は高い。その他、津保川左岸段丘上の大山地区でも当期の土器が採集されており、川沿いの段丘上に集落が点在する可能性がある。

弥生時代後期から終末期の遺跡としては、大平質の後半遺跡において山中式期から廻間I式期の集落跡が確認されている。山間地の丘陵斜面に営まれた集落で、関市の砂行遺跡や深橋前遺跡など中濃地域の山間部において特徴的にみられる集落形態として認識されている（註2）。平野部において半布里（東山浦）遺跡や榎丸堀畑遺跡において、山中式期から廻間I式期の遺構や遺物が確認されている。高畑地区の稲荷遺跡では廻間式期の堅穴住居跡が確認されている。当該期において集落動態が活発になることが遺跡の分布から読み取れる。

次に古墳時代を見ていくと、古墳の分布は、夕田丘陵地、津保川左岸丘陵地、津保川右岸丘陵地の3つのブロックに大きく分けられる。夕田地区は前方後円墳の密集地として以前より注目されており、大宝二年（702）御野国加毛郡半布里戸籍にみられる在地豪族「県主」の初現の勢力基盤に求められる場合もある（註3）。前方後円墳はその他に津保川左岸大山地区の大山池下古墳、高畑地区の丘陵上にある愛宕古墳などがある。

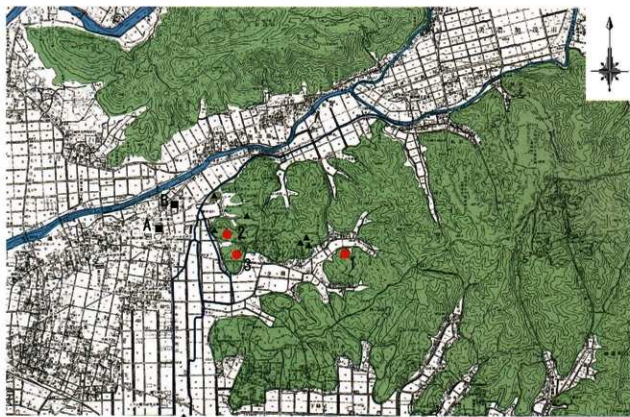


昭和32年 岐阜縣加茂郡富加村全圖（富加村発行）



昭和48年 富加村全圖（富加村発行）

図3 夕田墳墓群周辺地図



※羽生用水流路は近世以降の流路

- 1 夕田茶臼山古墳 2 杉洞1号墳 3 蓮野1号墳 ▲ 後期古墳  
 A 東山浦遺跡 弥生中期住居出土地点  
 B 東山浦遺跡 弥生時代終末期（廻間1式期）遺構出土地点



図4 夕田墳墓群の立地





№	遺跡名	種別	時代・特徴	№	遺跡名	種別	時代・特徴	№	遺跡名	種別	時代・特徴
1	後平古白古墳	古墳	5世紀	31	馬場遺跡	散布地	弥生～戦国期	81	香濱遺跡	散布地	古墳～戦国期
2	後平遺跡	泉源	弥生時代終末	32	納久能遺跡	散布地	弥生～戦国期	82	寺坪遺跡	散布地	古墳～戦国期
3	小竹原遺跡	古墳	縄文	33	中島遺跡	古墳	古墳	83	野田遺跡	散布地	古墳～戦国期
4	小竹原古墳	古墳	古墳	34	山崎遺跡	古墳	古墳	84	村東遺跡	散布地	古墳～戦国期
5	南坂古白古墳	古墳	7世紀の跡集塊	35	山崎3号古墳	古墳	古墳	85	野崎遺跡	散布地	古墳～戦国期
6	南坂古白古墳群	古墳	古墳	36	西田古墳群	古墳	古墳	86	高橋1号古墳	古墳	古墳
7	中屋敷北遺跡	散布地	古墳～中世	37	西田1号古墳	古墳	古墳	87	香江古墳	散布地	古墳
8	中屋敷南遺跡	散布地	古墳～戦国期	38	中陣子1号古墳	古墳	古墳	88	市場遺跡	散布地	弥生～戦国期
9	木崎遺跡	古窯	古墳～戦国期	39	中陣子2号古墳	古墳	古墳	89	於妻遺跡	古墳	古墳
10	坂木古窯	古窯	須恵器窯	40	北野緑塚	経塚	中世	90	高橋2号墳	古墳	古墳
11	大山古墳	古墳	古墳	41	北野古墳群	古墳	古墳	91	柳野遺跡	集落跡	弥生時代末期
12	大山北野遺跡	散布地	縄文	42	盛古墳	古墳	古墳	92	飯塚遺跡	散布地	古墳～中世
13	池下1号古墳	古墳	前方後円墳	43	海東(庫日)山遺跡	古墳	古墳	93	日原田古墳	古墳	古墳
14	池下2号古墳	古墳	古墳	44	北野遺跡	散布地	旧石器～中世	94	小万塚古墳	古墳	古墳
15	池下遺跡	散布地	弥生～中世	45	東山浦遺跡	集落跡	弥生～中世	95	後平1号古墳	古墳	古墳
16	寒畑遺跡	散布地	平安～戦国期	46	浮生遺跡	集落跡	弥生～中世	96	老松1号古墳	古墳	古墳
17	大山神社遺跡	散布地	古墳～戦国期	47	杉洞1号古墳	古墳	古墳	97	老松2号古墳	古墳	古墳
18	大山車塚古墳	古墳	古墳	48	杉洞2号古墳	古墳	古墳	98	打籠古墳	古墳	古墳
19	天神原遺跡	散布地	古墳	49	杉洞3号古墳	古墳	古墳	99	山崎1号古墳	古墳	古墳
20	天神野北古墳	古墳	旧石器～中世	50	杉洞4号古墳	古墳	古墳	100	山崎2号古墳	古墳	古墳
21	堂戸古墳群	古墳	古墳	51	蓮野遺跡	散布地	弥生				
22	白山神社遺跡	散布地	弥生・中世	52	蓮野古墳	古墳	前方後円墳				
23	井高1号古墳	古墳	古墳	53	北野1号古墳	古墳	古墳				
24	井高2号古墳	古墳	古墳	54	北野2号古墳	古墳	古墳				
25	井高3号古墳	古墳	古墳	55	北野3号古墳	古墳	古墳				
26	井高4号古墳	古墳	古墳	56	北野遺跡	散布地	古墳～戦国期				
27	加治田城跡	山城跡	戦国期	57	北野池野遺跡	散布地	弥生～戦国期				
28	片町古墳	古墳	古墳	58	釜淵城	山城跡	戦国期				
29	上之屋古遺跡	散布地	古墳～戦国期	59	夕陽茶臼山古墳	古墳	前方後円墳				
30	伝説裏見伊守屋遺跡	散布地	中世～戦国期	60	南道遺跡	古墳	古墳～戦国期				

表1 雷加町内遺跡一覧表

平成11年には東海環状自動車道の富加・関IC建設に伴う発掘調査にて後平茶臼古墳が調査された。竪穴系横口式石室をもつ5世紀末の造り出し付円墳であることが判明し、木心鉄板張輪鏝や尾張型埴輪などが出土している。

6世紀と推定される古墳では大平賀地区の岡田古墳があるが未調査である。6世紀後葉からは横穴式石室が顕著となり、津保川右岸の大平賀地区にある藤平神社周辺の祢宜屋古墳群や、夕田地区には通称稲荷山古墳(杉河4号墳)や山裾には群集墳が築かれる。7世紀初頭には川浦川右岸の井高地区において山裾に一辺20m以上の方墳である井高1号墳が築造されており、当該期の有力者の存在がうかがわれる。

4・5世紀の遺物や遺構が少なく集落の状況がみえない。大きな拠点集落は存在しないのかもしれない。6世紀後葉になると現在の役場周辺である滝田・羽生地区にまたがる東山浦遺跡において集落経営が始まる。同時期に古墳造営も活発になることから地域社会の大きな変化を読み取ることができる。用水開削に集落が営まれる拠点集落と考えられる。律令期には、当地が奈良正倉院に残る「大宝二年(702)御野国加毛郡半布里戸籍」の故知と考えられており、遺跡と戸籍の記録との関連が注目されている。半布里戸籍には54戸、1,119人の記録が残っており、当時の家族と集落を知る上で欠かせない一級資料である。また、里の中で優勢な県主などの氏姓集団については、前代の在地家族の系譜を引くと考えられており、これらと古墳との対比や関係性を考えることのできる列島でも数少ない地域である。他にも秦人姓などの渡来系氏族がかなりの割合で存在することから、用水開削との関わりや集落・古墳などとの対比も課題である。また、「和名類聚抄」では賀茂郡に埴生郷、武芸郡に大山郷、掛加郷の記載があり、それぞれ現在の羽生・大山地区、美濃加茂市の伊深に比定できることから、10世紀代には現在の川浦川が賀茂郡と武芸郡の境であったことが推測される。

中世に入ると鎌倉期の石組墓が半布里遺跡で検出されている。町内の寺院では大平賀に所在する東香寺は1315年の建立で、夢想国師ゆかりの寺とされ、庭園(通称心字池)は国師の作とされている。戦国期には、永禄8年(1565)織田信長の東美濃侵攻に深く関係する「加治田城」と「堂洞城」がある。特に加治田城は、その城下に飛騨へ抜ける街道が通っており、古い字名や城館伝承地、城主佐藤紀伊守の菩提寺「龍福寺」などが残り当時の景観を復元できる。

江戸期に入ると幕府領、旗本領、尾張藩領に分割される。水論・山論関係の文書資料が豊富で当時の様子を垣間見ることができ、特に代官であった加治田平井家に残る「平井家文書」には旗本とのやり取りを記した「御用状」などの貴重な資料が残っている。また近年、平井家代々当主が京都や江戸の町学者に和歌を送り「添削」を仰いでいる資料が、近世和歌史の視点から注目を集めている。その他、加治田には寛政7年(1795)に操業の造り酒屋「松井屋」(県指定文化財)があり、現在も酒造りをおこなっている。

## 註

- 1 八賀晋 1968「古代における水田開発」『日本史研究』96号
- 2 成瀬正勝 2000「砂行遺跡における住居形態と集落形態」『砂行遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 3 長瀬仁 1979「古代ミノ国カモ原主の初現的勢力基盤について」『岐阜史学』69

## 第2章 夕田墳墓群の既往の調査－夕田茶白山古墳の調査－

### 1 夕田茶白山古墳の調査の経過



貴重な史跡の内容を把握して正確な情報を提供するとともに、今後の保護や活用を図るための基礎資料を得るため、平成21年度に夕田茶白山古墳調査検討委員会を立ち上げて、同年よりトレンチによる確認調査を実施した。

調査経過と主な成果は以下の表のとおりである。

年次	調査区	経過と主な成果
1次調査 (21年度)	T1・2	前方部の上面は岩盤まで整地している。 前方部の盛り土は礫大の凝灰岩礫を混入している。屈折変化点などの部分には礫を多く盛り、大型の礫を混ぜて土留め効果を出している。 前方部前面の傾斜部にて溝を検出。
	前方部西面 前方部前面	
2次調査 (22年度)	T3・4・5	くびれ部の形状から前方後円形の可能性が高まる。 前方部コーナーを特定し、1次調査の溝は区画溝ではないと判明。 コーナー端部は明瞭に仕上げていない。 出土土器から3世紀代の古墳の可能性を推定する。
	くびれ部 前方部コーナー 後円部西面	
3次調査 (23年度)	T6・7・8	墳頂部の墓壇と主体部の構築方法が判明。 墳丘盛土の最終段階で平坦部を作り、その端に周境地に盛土をして巨大な墓壇を構築し木棺を設置していると推定。 石柩や粘土柩は無い。墓壇廻土には土器片が多数混入する状況が判明。 主体部は北東隅に盜掘坑が及んでいるものの保存状況は良好。 木棺は舟底形を呈し頭位は北北東を向いて埋葬したと推測。 全体形は古墳時代のものでありながら埋葬部については弥生時代の墳丘墓の要素を強くもっている。
	墳頂部 後円部北面 後円部南面	
4次調査 (24年度)	T9・10・11・ 12・13	築造前に地山を整地している。整地は岩盤まで及んでいる。墳頂部は岩盤まで整地した後に粘土質の赤土を敷き平坦部を作り出している。 粘土質の赤土の上面で炭や焼けた土粒の散布部を検出。 前方部、後円部ともに墳壇(裾部)の作り方が明瞭ではない。 前方部前面に溝状遺構を確認した。地形と古墳の区画を意図した溝と推定。
	後円部東面 前方部東面 前方部前面	
報告書作成・刊行(25年度)		

表2 夕田茶白山古墳の調査経過と主な成果

### 2 夕田茶白山古墳の調査の成果

**前方部の構築方法** 旧地形を活かしているが、墳頂は地山の岩盤層までほぼ平坦に削りだしてから盛り土をしている。凝灰岩の礫大礫を利用しながら、部分的に土留めのために土手状に盛土している。葺石や外護石などの外表施設は無い。前方部のコーナーは、盛土が少なく、基本的に地山を削りだして形

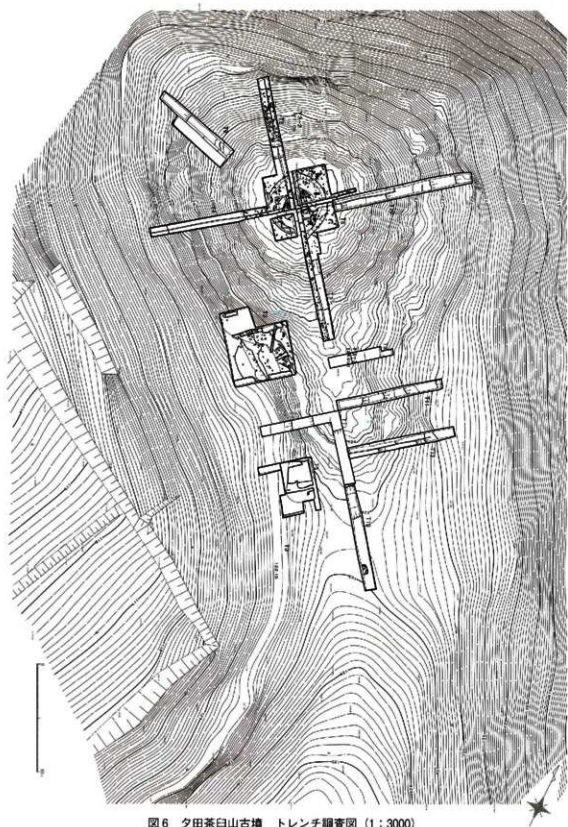


図6 夕田茶白山古墳 トレンチ調査図 (1:3000)





を作り出している。側面は、地山を削りだしているため墳丘との境界が明瞭であるが、コーナーから前面側にかけて自然地形との境界が不明瞭であった。特にコーナー隅部分は、そのままならかに丘陵地へと繋がっていく様で、古墳への登り口の可能性も想定される。コーナー外側にて壛底部などが出土している。

**前方部前面** 自然地形と古墳とを区分するように溝が掘削されていた。掘削は岩盤も掘り込んでいる。この溝は他のトレンチでは確認されていないので、前方部を巡るのではなく丘陵の稜線部のみを区画するためのものと考えられる。

**くびれ部の調査** 地山を削り整えてくびれ部のアウトラインを作出し、その上に地山由来の凝灰岩礫を多く含んだ土で盛土している。削り出しの掘削は岩盤まで及んでいる。アウトラインの作出の際に削った凝灰岩の岩盤を盛土に利用したと考えられる。

くびれ部付近にはテラス状の平坦部を設けている。テラス部分には炭化材の集中する箇所があり、土器も多く出土した。くびれ部の上段では砥石と高坏脚部が出土している。

**墳頂部の調査** 石椁や粘土椁は検出されておらず、埋葬主体部は木棺の直葬と推定される。墳頂部において室町期の経筒外容器などが出土し、中世墓が営まれたことが判明した。また、後世の盗掘坑も確認され、これらによる掘削土を除去しながら墓塚の検出を試みた結果、墓塚は長軸5.3～5.5mの非常に大きな墓塚を用意している事が分かった。また、丘陵頂部を削平した後に、その周縁部に土手状の盛土して周堤状に仕上げ、盛り残した中央部を墓塚としている構築墓塚であることが推測された。

**棺の位置と痕跡** 盗掘坑の断面精査で棺部分と思われる立ち上がりを確認、規模は長さ2.7m、幅は1.3m程度、棺主軸はN-22～23°-Eで墳丘主軸とは斜軸となる。痕跡は地表下約1.5mで検出した。盗掘坑が主体部を傷つけている事が懸念されたが、北東隅あたりをかすめる程度と推定される。非常に良好な保存状態を保っており位置の確認のみで埋め戻した。

**埋葬部土台の確認と墳丘東端の特定** 後円部は元の丘陵頂上部を削平して整地している。この削平は丘陵の岩盤まで及んでいる。また、やせ尾根状の丘陵であるため墳丘の

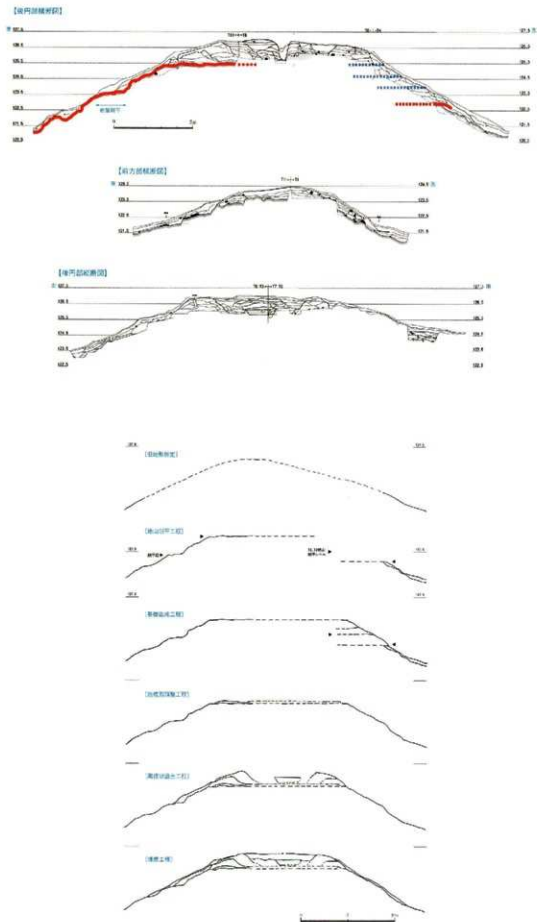


図7 夕田茶白山古墳 墳丘横断面図及び後内部築造工程復元図



北西から西にかけては「盛り足し」を行って平坦面を確保している。完成した後円部が丘陵の西側へ迫り出しているのはこの工程のためである。標高約125mのラインで埋葬するための水平な基盤を構築し、その上に粘土質の赤土を敷いている。この粘土上面が棺底の想定レベルと同レベルとなる。この粘土質赤土の上面には、炭化物和焦土が散布していた。古墳の基盤造成のために地山を削平した後の炭化物和推定され、なおかつ草本類と思われる炭化物もあったため AMS 年代測定分析を実施することで築造年代を知ることができた。樹種鑑定の結果はバラ属・クワ属で、

年代は3世紀前半の可能性が高いとの結果がでた。

### 墓壇と主体部の構築工程

後円部及び主体部の構築工程は以下のように復元した。

- ① 埋葬部の基盤造成。
- ② 土台の上に周堤状に盛り。基盤の周縁に拳大礫を混ぜた盛土をドーナツ状に周堤盛土。
- ③ 棺を据える 盛り残した中央に木棺を据える。頭位はほぼ北と推定。墳丘主軸とは斜軸になる。
- ④ 周堤内を埋める。周辺には礫があまり混じらない粘性のある土で埋める。
- ⑤ 墳頂部からは赤彩のある有孔短頸壺が出土。埋葬終了後に供献したと考えた。

**規模と年代** 墳丘の主軸は北西を向き全長39.5m、前方部長14.5m、後円部径25mである。墳形は古墳時代に特有の前方後円形でありながら、周堤状（土手状）盛土による墓壇の構築方法などは弥生時代の墳丘墓に近い様相がみられる。

墳頂部から出土した赤彩のある有孔短頸壺は、特に中濃地域において弥生時代の周溝墓に利用される土器であり、廻間Ⅱ式期前半以降は衰退する形式である。盛土からは多くの土器片が出土し、S字差B類と考えられる破片や高坏脚部片など廻間Ⅱ式期を想定していい遺物が多く見られる。以上の点から考えて、考古学的年代は、東海地方の土器編年という廻間Ⅱ式期の中での年代を考えた。

次に、基盤造成面から出土した炭化物は AMS 年代測定した結果、1σ 暦年代範囲が AD211～255 (47.1%)、2σ 暦年代範囲が AD137～258 (79.1%) であった。

考古学的に導き出された年代と AMS 年代測定の結果に齟齬は無く、これを古墳築造の年代として採用し、報文においては幅を持って3世紀前半を当てた。しかし、有孔短頸壺が型式学的にやや新しい要素である点も考えて、より絞り込むとすれば上記 AMS 年代の新しい方の年代である3世紀中頃の蓋然性が高いであろう。

夕田茶白山古墳は古墳時代に通有の前方後円形を採用しながらも、木棺直葬の主体部や土手状盛土で墓壇を形成する点、短頸壺の供献など、弥生時代と古墳時代の過渡的様相をよく表しており、時代性をよく表出しているといえる。

東海地方の弥生時代の墳墓については方形を基本とするものの、後期後半からは、象鼻山古墳群の3・8号墳（養老町）、東町田1号墳（大垣市）、上野桐野弥生墳丘墓（可児市）などの円形墓の築造がみられる。特に廻間Ⅰ式期には円形墳が増加するようである。中濃地域の当該期には集落においても砂行遺跡など

で急斜面集落が造営される時期であり、大きな社会変動が想定される。

中濃の弥生墳丘墓や当該期の古墳から出土した鏡・鉄剣などから、近江の湖北地域、そして北近畿との先進文物の流通ルートやネットワークが存在した能性を考えた(鳥田2014)。弥生時代終末期の円形墓は播磨などの東瀬戸内から丹後などの北近畿、そして近江の湖北地域に波及しているとの指摘がある(岸本2001、高野2006、野島2004など)。夕田茶白山古墳の被葬者も、こうした先進文物を介したネットワークや繋がりの中から、丘陵上立地や円形指向、そして前方後円形の選択に至った可能性を報告書において指摘した。

美濃地方の古墳誕生プロセスを考える上で、この上なく重要な遺跡と言える。

#### 参考文献

- 鳥田崇正 2014「第6章 総括」『夕田茶白山古墳範囲確認調査報告書』富加町教育委員会  
岸本一宏 2001「弥生時代の低地円墳について」兵庫県埋蔵文化財紀要1  
高野陽子 2006「出現期前方後円墳をめぐる二、三の問題-京都府黒田古墳の再評価」京都府埋蔵文化財論集第5集-創立二十五周年記念誌-、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
野島 永 2004「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐる」『河瀬正利先生退官記念論集』

## 第3章 調査の目的と経過

### 1 調査に至る経緯

平成21～24年度に実施した夕田茶臼山古墳（図8の1）の範囲確認調査（平成25年度報告書刊行）により当該古墳が廻間Ⅱ式期に築造された前方後円墳であると位置づけられた。暦年代では3世紀中頃が想定され、濃尾平野における古墳時代の始まりを考える上で欠かすことのできない資料であると評価された。

一方、東海地方における前方後円墳の誕生は前方後円墳集成3期、東海地方の土器編年でいえば松河戸式期以降の4世紀前～中葉頃とする従来の考えからすると、その成立が1世紀近く遡る事になり、夕田茶臼山古墳の起源や、古墳時代の前方後円墳に系譜がつながる墳墓として考えてよいのかという課題が生まれた。

そももう一つの大きな課題として、夕田茶臼山古墳には弥生墳墓との類似性が多く認められるが、当該地域の弥生墳丘墓の伝統や系譜の中から、同古墳のような前方後円形の墳墓の誕生が想定できるのかという大きな課題が残った。それに付随して、他地域からの影響についても検討する必要性が指摘された。

上記の問いに対する答えを用意する事は容易くないものの、注目された夕田地区には夕田茶臼山古墳以外にも、前方後円墳と想定される「杉洞1号墳（図8の2）」と「選野古墳（図8の3）」という2つの古墳が存在しており、この2つの古墳について築造時期、築造方法、墳形を明らかにすることで、夕田茶臼山古墳の成立に関する課題や、築造集団の連続性などについての情報を得ることができると考えられた。また、私たちの地域にとっても以前から知られた2基の前方後円墳を調査して夕田茶臼山古墳の成果と比較することで、より豊かな歴史像を描くことができ、地域の歴史遺産を保護し後世へ伝える土壌を醸成するものと考えた。

今回の調査から夕田茶臼山古墳、杉洞1号墳、選野古墳の3基をまとめて「夕田墳墓群」と呼称し、上記の課題と目的の設定の下に、発掘調査に着手した。

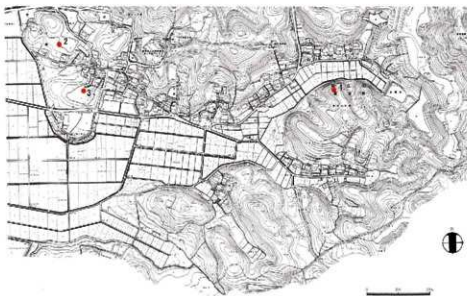


図8 夕田墳墓群 分布図

## 2 調査体制

調査の体制は以下のとおりで実施した。

### 夕田地区古墳群調査検討委員会

- 委員長 広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）  
 早川 万年（岐阜大学教育学部教授）  
 赤塚 次郎（古代遼波の里・文化遺産ネットワーク理事長）  
 吉川 真司（京都大学大学院教授）  
 村井 正覚（富加町文化財審議会委員）  
 高垣 浩規（富加町文化財審議会委員）  
 織部 博夫（富加町文化財審議会委員）平成28年度  
 柴田 典子（富加町文化財審議会委員）平成29・30年度  
 粥川 友和（富加町教育委員会教育長）

- オブザーバー 松野 晶信（岐阜県教育委員会社会教育文化課）平成28年度  
 小野木 学（岐阜県環境部文化伝承課）平成29・30年度

- 事務局 教育課長 河合 康広（平成28年度）  
 澤野 利博（平成29・30年度）  
 教育係長 日比野 昌弘（平成28・29年度）  
 高田 崇正（平成30年度）  
 調査担当 島田 崇正（平成28・29年度は事務兼任）  
 事務担当 山内 正明（平成30年度）  
 調査補助員 井上 晶子

## 3 調査の方法と経過



検討委員会

杉洞1号墳及び蓮野古墳の調査事業を進めるにあたり、文化庁および岐阜県教育委員会との協議を行ない、調査の目的や進め方について指導をいただいた。それと並行して平成27年度には地権者への事業説明を行った。地権者2名からは、事業協力についての内諾を得ることができ、平成28年度に地権者から発掘調査への承諾書の提示を受け、調査着手に取り掛かった。



検討委員会杉洞1号墳視察

調査全般への助言と、調査成果についての指導を目的とした組織として「夕田地区古墳群調査検討委員会」（以下、調査検討委員会）を平成28年11月1日発足した。調査初年度には発掘調査の事前に委員会を開催することが難しかったため、各委員へ個別に事業の説明をおこない、個別に現地を見ていただくなどして調査方法について指導した





杉洞1号墳



蓮野1・2号墳



杉洞1号墳調査風景



蓮野1号墳土塊検出状況



杉洞1号墳撮影風景



蓮野1号墳器台出土状況



杉洞1号墳現地説明会



蓮野1・2号墳現地説明会



杉洞1号墳高坏取り上げ



趙氏蓮野古墳堆積指導



文化庁視察



土層剥ぎ取り

だいた。それを集約してトレンチ配置や調査の方法を決定した。調査検討委員会は、発掘調査中に開催し、現地での検討や調査成果の評価を行っていただいた。また、次年度の調査予定箇所についても調査方法や課題について指導いただいた。

第1回 平成29年1月25日 午後2時～4時

- ・杉洞1号墳の現地調査および出土遺物について指導
- ・次年度調査予定箇所の視察および現地指導

第2回 平成30年2月14日 午後2時～4時

- ・蓮野古墳の現地調査および出土遺物について指導
- ・報告書の方針と今後の活用について

第3回 平成30年12月22日 午後2時～4時

- ・夕田墳墓群の評価と今後の事業の方針について指導

現場の発掘調査員は富加町教育委員会職員が担当し、現地作業及び測量図化業務並びに現場管理については株式会社イビソクに委託をした。

発掘調査はトレンチ調査とした。墳丘構築方法の確認と比較が重要な課題であるため、トレンチを部分的に断ち割って構築方法に関する情報を獲得することとした。

杉洞1号墳の調査は、現況地形測量を平成28年10月に実施し、発掘調査を平成28年12月5日から開始、平成29年2月16日に埋め戻しを完了した。平成29年2月10日には現地説明会を開催した。

蓮野古墳の調査は、現況地形測量を平成29年10月に実施し、平成29年11月15日から開始、平成30年3月12日に埋め戻しを行ったが、次年度に炭化物のサンプルを採取するため1トレンチと3トレンチの一部は埋め戻さず残した。平成29年2月10日に現地説明会を開催した。

平成29年2月4日と平成30年2月17日には研究者有志による現地検討会を実施している。平成30年3月10日には趙哲清氏（大阪文化財研究所）による堆積状況について指導を、平成30年5月15日に文化庁の現地視察、10月31日には土層の一部剥ぎ取りを実施し、11月12日に全ての埋め戻しを完了した。

蓮野古墳の調査中に、墳頂部にて天井石を失った横穴式石室が検出され、羨道部で7世紀代の須恵器片が出土した。当該石室の掘方が墳丘の旧表土を切り、盛土も墳丘旧表土に被ることを確認したため、すでにある墳丘のマウンドを二次利用して石室を構築したと考え、前者を蓮野1号墳、石室部分を蓮野2号墳とした。平成30年4月4日に発見の届出と名称の変更を行った。



## 4 日誌抄

杉洞1号墳確認調査 平成 28 (2016) 年度

3月

広瀬和雄氏が現地視察。調査協力を依頼。

11月

吉川真司氏(京都大学)に調査協力を依頼。

10月

赤塚次郎氏(古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク)

早川万年氏(岐阜大学)に調査協力を依頼。

10月17～19日

基準点設置、古墳地形測量。

11月3日

今津勝紀氏(岡山大学)歴史講演会の事前に現場見学。

11月29日

(株)イビソク監理技士の近藤氏と調査方法等について打ち合わせ。現場にてトレンチの位置決め杭打ち。

12月5日

(株)イビソクによる安全祈願祭。道具の搬入を行い、1・2トレンチの表土除去。2トレンチの表土除去後の写真撮影。

12月6日

1トレンチ表土除去後の写真撮影。1トレンチ盛土の掘削。土器片3点出土。

12月7日

1・2トレンチの盛土掘削。1トレンチの西側では下層(黒色土)まで至る。2トレンチでは焼土や炭が褐色土に混じる

12月8日

1・2トレンチの盛土掘削。

12月9日

2トレンチで地山とみられる褐色土を確認。盛上下層からは多くの土器が出土。

12月12日

1トレンチでも地山を確認。地山上、盛土の最下層に黒色土が堆積。築造前の旧表土の可能性を検討。

12月14日

1トレンチ束脛を掘り下げ。遺物はあまり出土しない。1・2トレンチ地山まで掘削完了。

12月15日

3・4トレンチの表土掘削。1・2トレンチの分層。

12月16日

1トレンチの土層断面実測。3・4トレンチ盛土上面まで掘削。

12月19日

1トレンチ土層断面実測完了。3・4トレンチの盛土半載掘削。

12月20日

2トレンチ土層断面実測、完了。3・4トレンチ盛土半載掘削。恩田知美氏(本巣市教育委員会)が現場視

察。

12月21日

3・4トレンチの盛土半載掘削。3トレンチを北へ約2m延長。4トレンチ盛土の下層で暗褐色土層を確認。旧表土の可能性も含めて検討する。

12月26日

4トレンチで確認した暗褐色土は盛土の可能性があると考え、掘り下げると完形に近い高杯の坏部と脚部が出土した。年末年始休業に入るののでしっかりと養生。



高杯出土

1月6日

3・4トレンチ最下層の掘削。盛土下で壑穴状遺構を検出。赤塚次郎氏(にわ里ネット)現地視察。周辺の遺構や堆積状況を知るためのトレンチ設置をご指導いただく。5トレンチ設定を検討。

1月10日

壑穴状遺構の掘土掘削。非常にしまった土。靱い土器片が何点か出土。3・4トレンチの断面精査を並行して実施。

5トレンチの設定。目的は①各トレンチで検出した黒色土が旧表土であるかどうか、②周辺に周溝墓や、集落に関連する遺構があるかどうかの確認。

1月11日

3・4トレンチの土層断面写真の撮影。5トレンチでは20cm程度で地山に至り、遺構や旧表土の確認なし。近藤大典氏(岐阜県博物館)現場視察。

1月12日

5トレンチの掘削後、断面精査、完掘写真の撮影。

1月13日

3トレンチの分層。

4トレンチの北壁土層断面の写真撮影。

1月16日

3トレンチの土層断面実測。

4トレンチの断面分層。

1月17日

4トレンチの土層断面実測。

1月21日

中井正幸氏(大垣市教育委員会)現地視察。

1月24日

調査検討委員会開催に向けての精査や現場清掃。墳丘推定ラインの検討、石灰で視覚化する。

1月25日

調査検討委員会開催。高坏部分の拡張が決定。

1月26日

調査検討委員会の指摘を受け、4トレンチの高坏環部の全体を確認するために部分的拡張。

1月27日

1・2トレンチ完掘写真撮影。4トレンチ拡張部の掘削。盛土の過程で何度か掘り返しを行っていることと推定。それぞれSX02・03と認識し検出。高坏はSX03に坏部を伏せていると推測。



1月30日

長瀬治義氏、長江真和氏（可見市教育委員会）現場視察。

1月31日

4トレンチ拡張部を掘削。SX02・03の遺構検出。検出状況の写真撮影。

2月1日

4トレンチ拡張部SX02の掘削。高坏環部の全体を検出。坏部周辺に竇などの破片が出土。文化庁堀宣田佐男主任調査官に出土状況の画像を見ていただく。次年度の調査では調査官を招聘するように指示を受ける。

2月2日

SX02遺物出土状況の写真撮影。作業はすべて終了したが、現地説明会まで暫く日数があるので、しっかりと養生して撤収。

2月4日

岐阜県内の埋蔵文化財担当職員に呼びかけ、有志による現地検討会を開催。

2月9日

早川万年氏（岐阜大学）高坏の状況を確認。

2月10日

現地説明会の準備、各トレンチの清掃。

2月12日

午前は清掃やシート片付け。午後から現地説明会を開催。180名ほど来場。

2月13日

田中弘志氏（関市文化財保護センター）現地視察。

1・2・5トレンチを埋め戻し。

2月14日

高坏の3Dデータ作成。  
4トレンチ拡張部の高坏など遺物取り上げ。かなり脆いため土ごとコンテナに移し、町資料館へ搬出した。SX02、3・4トレンチの完掘写真撮影後に埋め戻し。

2月15日

1・2トレンチへ表土を戻す。

2月16日

3・4トレンチ埋め戻し後、表土を戻す。

2月16日

全ての機材を撤収。調査完了。

3月19日

林正憲氏（奈良文化財研究所）現地視察



埋め戻し作業

蓮野1・2号墳確認調査 平成29（2017）年度

10月3日

地形測量開始

10月31日

（株）イビソクと調査方法等について打ち合わせ。現場にてトレンチ位置を確認。

11月9日

（株）イビソクによる安全祈願祭。道具の搬入を行い、地権者立会のもと調査区域内の雑木の伐採。伐採と除草刈りは町シルバー人材センターに委託して14日まで実施。



安全祈願祭

11月15日

1トレンチ南部の表土除去。

- 11月16日  
1 トレンチ南部（墳丘南端の裾部傾斜部）の盛土掘削
- 11月17日  
1 トレンチ南部（墳丘南端の裾部傾斜部）盛土の半截。墳丘上のピットを半截、写真撮影。3 トレンチの表土掘削、写真撮影。
- 11月20日  
1 トレンチ南部の盛土掘削。2 トレンチの表土除去。  
3 トレンチの盛土掘削。
- 11月21日  
2 トレンチの表土除去後に写真撮影。3 トレンチ西側で地山を確認。墳丘上のピットを掘削。
- 11月22～24日  
1 トレンチ南部、3 トレンチにて盛土掘削。
- 11月27日  
2 トレンチ西部を掘削。後生の擾乱を受けていると思われる箇所であり、表土除去後に岩盤層（凝灰岩）を抽出した。
- 11月28日  
1 トレンチ南部、3 トレンチの盛土掘削。
- 11月29日  
1 トレンチ南部が深くなって掘削が困難なため、トレンチ幅を20cm拡張した。
- 11月30日  
1 トレンチ南部で盛土単位（後に上填の単位と判明）が長方形で重なり合う状況が見えたため、単位の抽出を行い、写真撮影。2・3 トレンチの掘削。
- 12月1日  
1 トレンチ南部、3 トレンチの掘削。2 トレンチ西部の断面・完掘状況の撮影。
- 12月2日  
1 トレンチ北部の掘削。腐葉土除去後の写真撮影。  
1 トレンチ南部、3 トレンチの掘削。
- 12月5日  
1 トレンチ北部・南部の掘削
- 12月6・7日  
1 トレンチ北部、3 トレンチの掘削
- 12月8日  
1 トレンチ南部の焦土遺構の抽出、写真撮影。
- 12月11・12日  
1 トレンチ南部の断面実測図作成。
- 12月13日  
1 トレンチ南部、3 トレンチの掘削。1 トレンチ南部にて地山確認用のサブトレンチを設定。
- 12月14日  
1 トレンチ南部の掘削及び断面図作成。  
3 トレンチにて最下層にて器台2点出土  
4 トレンチの設定。
- 12月15日  
1 トレンチ北部・中部、4 トレンチ掘削。1 トレンチ南部の断面実測図作成。4 トレンチの腐葉土除去後写真撮影。

- 12月18・19日  
1 トレンチ北部の完掘写真撮影。1 トレンチ中部、4 トレンチ掘削、3 トレンチの断面実測図作成。
- 12月20日  
1 トレンチ中部、4 トレンチ掘削。5 トレンチ設定、掘削、3 トレンチ断面実測図作成。
- 12月21日  
1 トレンチ中部の腐葉土除去後、南側の深掘予定箇所の掘削を開始する。(0.5×4m) 2 トレンチ東部の腐葉土除去後、北側の掘削を開始する。3 トレンチの断面実測を行う。5 トレンチを南側へ2m拡張した。
- 12月22日  
1 トレンチ南部の断面写真の撮影を行う。2 トレンチ東部にて礎を抽出する。3 トレンチの断面実測を行う。
- 12月25日  
1 トレンチ中部・5 トレンチの掘削を行う。3 トレンチ出土遺物の器台の出土状況写真の撮影を行う。4 トレンチの断面・完掘状況の撮影を行う。
- 12月26日  
岡市教育委員会田中弘志氏・森島一貴氏が現地視察。  
1 トレンチ・2 トレンチ東部・5 トレンチの掘削を行う。1 トレンチ中部の腐葉土除去状況の撮影を行う。5 トレンチの断面・完掘状況の撮影を行う。
- 12月27日  
1 トレンチ中部・2 トレンチ東部の掘削を行う。2・5 トレンチの断面写真の撮影を行う。3 トレンチ出土の器台の取り上げを行った。
- 1月9日  
1 トレンチ中部・2 トレンチ東部の掘削を行う。2 トレンチ西部の断面実測を行った。
- 1月10・11日  
1 トレンチ中部の掘削を行う。4・5 トレンチの断面実測を行った。



実測風景

- 1月12日  
1 トレンチ中部の掘削、深さ0.6～0.8mで明褐色土層を確認した。
- 1月15日  
1 トレンチ中部・2 トレンチ東部の掘削を行う。6・

- 7トレンチを設定後、掘削を行う。
- 1月16日  
1トレンチ中部・2トレンチ東部の掘削を行う。2トレンチ東部の隠検出箇所を拡張した(0.7×0.8m)。6・7トレンチの断面・完掘状況の撮影を行う。
- 1月18日  
1トレンチ中部・2トレンチ東部の掘削を行う。
- 1月19日  
1トレンチ南部・3トレンチの清掃を行った。
- 1月22日  
1トレンチ南部・3トレンチの完掘・断面状況の撮影を行う。1トレンチ中部・2トレンチ東部・4トレンチの掘削を行う。午後は雨天のため作業を中止した。
- 1月26日  
除雪及び清掃を行った。  
文化庁福宜田佳男主任調査官が現地指導。
- 1月29日  
長瀬治義氏・長江真和氏(可見市教育委員会)が現地視察。
- 1月30日  
8トレンチを設定後、掘削を開始する(0.5×2m)。高さ約0.5mで墓壙を確認した。
- 1月31日  
大田市教育委員会の中井正幸氏が現地視察。  
1トレンチ中部の断面実測を行う。8トレンチの断面・完掘状況の撮影を行った。
- 2月1日  
2トレンチ東部・8トレンチの断面実測を行った。
- 2月13日  
全体清掃を行った。1トレンチ中部・2トレンチ東部の断面・完掘状況の撮影を行った。
- 2月14日  
古墳群調査検討委員会。検討委員会終了後、シート養生を行った。
- 2月17日  
有志による運野古墳現地検討会を開催。9名参加。
- 2月22日  
石室確認のため2トレンチを拡張設定後、掘削を行う。(1×2m)高さ0.4～0.6mで奥門を確認し、掘削を終了した。



石室精査

- 2月25日  
現地説明会を開催。約100名が来場。
- 3月10日  
超哲清氏(大阪文化財研究所)現地指導
- 3月12日  
埋め戻し。1トレンチ南部・3トレンチの深堀箇所、石室などは埋戻しを行わず、ブルーシートにて養生を行った。
- 5月15日  
(株)パレオラゴによる炭化物サンプルの採取。川畑文部科学技官が現地視察。
- 10月31日  
土層剥き取り作業
- 11月22日  
第3回古墳群調査検討委員会開催。



第2回古墳群調査検討委員会

- 11月12日  
すべての埋め戻しが完了。
- 11月13日  
文化庁にて調査成果および報告書内容について協議



現地説明会前の静けさ

## 第4章 杉洞1号墳の調査

### 1 現況測量調査の成果

発掘調査の実施と今後の活用や整備の基礎資料とするため、等高線間隔10cmの測量図(図9)を作成した。平成28年10月にトータルステーションによる現況測量を実施し、11月には作図の初校が上がっていた。この初校図面を元に検討し、調査検討委員の意見を集約・反映させながら、トレンチの設定を行った。

**古記録による墳形** 昭和45年に刊行された『富加村の古墳』によると杉洞1号墳は「前方部を南東に向けた前方後円墳である。(中略)昭和初期までは一見してわかる良好な墳丘をもっていたそうであるが、現在は桑畑となり、後円部の一部分と前方部封土がそれらしく見分けられる程度である。全長27m前後、巾15m前後であるが、周囲との高低差が2mとかなりの盛り上りをみせているところから、内部主体が存在するのかもしれない。(中略)通称「ひさご塚」と呼ばれている。」とある。昭和初期からマウンドが認知されており、昭和45年には前方後円墳との認識されているわけである。前方部を南東に向きとあるのはおそらく誤記であろう。現況測量図を見る限り、前方部と捉えていたであろう突出部は西でやや南へ傾いた方向を向いている。

**周辺の地形** 杉洞1号墳は丘陵の縁辺部に立地し、周囲には西側に谷が入り込んでいる。北東から南西へ緩やかに傾斜し、およそ標高88m 辺りから傾斜がきつくなる。丘陵上面は比較的平坦であり、主丘部はこの平坦な場所に築造され、突出部は西の傾斜面へ迫り出すように築造されている。

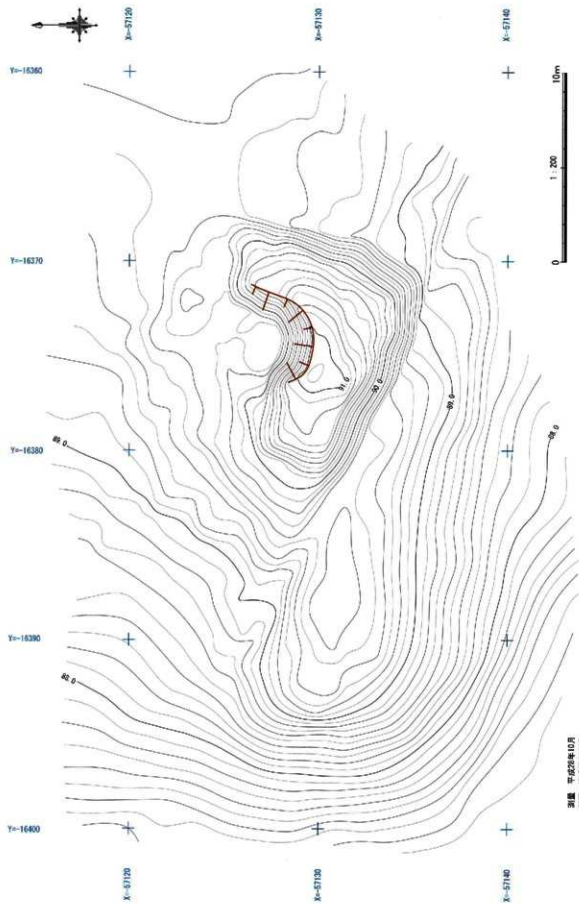
**墳丘の現況** 杉洞1号墳の西側には谷が南北に入り込んでおり、現況測量図からは主丘部が東の丘陵側に、突出部が西の谷側に迫り出す形を想定できそうである。主丘部北半は後世の土取り(地元の方によると苗床用の土を採取したと聞く)による削平を受けている。『富加村の古墳』にはこのような削平の状況は記録されていない事を考えると、昭和45年の時点では主丘部の墳丘が今よりも残存していたと考えられる。そのうえで前方後円形と認定している点は留意しておきたい。また、当時は桑畑であったが、その後ヒノキ苗が植林された。苗を植える際に墳丘が邪魔と考えたのだろうか、その時にも主丘部南西側と突出部にも一部掘削が及んだようである。

現況での主丘部墳頂の高さは91.2mであり、周囲の平坦面より2mほど高い。削平されている部分についても墳丘周縁部であろう箇所はやや盛り上がっている。特に主丘の北から北東部にかけては高まりがしっかりと残っており、これらは盛土基底部の残存と推測したが、今回の発掘調査によって盛土の残存である可能性が高い事が確認できた。

突出部は、前面が谷側へ迫り出している。周辺地形より0.6～1.6mほどの高まりが確認できる。主丘側から見るとそれほどマウンドがあるように見えないが、谷側から見ると傾斜に逆らうように盛り上げている状況がよく分かる。

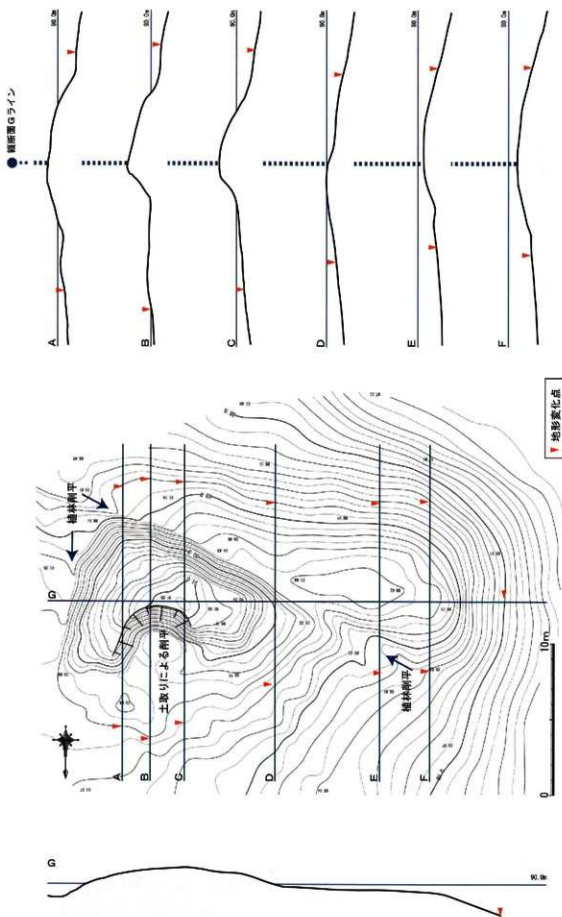
**残存墳丘の検討** 杉洞1号墳の縦横断エレベーション図を作成し、図10に示した。A～Fが横断面、Gが縦断面である。▼印は現況の地形変化点で墳裾の付近に当たるだろうと推定される場所である。

主丘部横断面A・B・Cをみると、北側に若干の盛り上がりが見られる。この部分が墳丘基底部付



第9図 杉洞1号埴現況測量図 (1:200)

測量 平成20年10月  
測量 平成20年11月



第10図 杉洞1号墳現況エレベーション図 (1:250)



近の盛土が残存している部分と推定される（基底部残存盛土）。この基底部残存盛土と自然地形の接点辺りが墳裾と想定できる。主丘部南側は植林削平のために平坦になっている。この削られた部分から上の傾斜で復元した場合に、自然地形と接すると想定される場所を▼で示している。この辺りが主丘部の墳裾と推定できる。

突出部の横断面がD・E・Fであるが、現地地形との境界は不明瞭である。北側についてはE・F断面において、南側についてはD断面において地形との若干の変化点が認められる。

縦断面をみると主丘部と突出部の高低差が明瞭であり、突出部前面において墳頂から傾斜面への変化点が明瞭であることを読み取ることができる。現況の主丘部東側端は植林時の削平で削られて、まるで菱形の形になっている。本来はもう少し東側へ伸びていて、緩やかに傾斜しながら墳裾に至ったと推測できる。

## 2 調査の方法

発掘調査はトレンチ調査により実施した。土取によって最も抉られている主丘部中央付近は、断面精査により墓塚に関する情報を得られる可能性があるため、削平部分に1トレンチと2トレンチを逆L字状に設定した。この1トレンチを西へ延長して突出部前面と側面に3トレンチと4トレンチを逆L字状に設定した。墳丘の南側については土地所有者関係が複雑であるのと、植林によって削平が進んでいるため、墳丘の北側の形を特定することで墳形や規模を検討する材料を得ようと判断した。

1～4トレンチの調査に入ると盛土内から土器片が多く出土し、それらが東海地方の土器編年という週間式期の古い段階と思われる時期のものであった。調査途中で調査検討委員の先生方に随時現地を見ていただき、周辺に当該期の土器包含層があるのかどうかや、周溝溝などの低墳丘墓などが周辺に分布しないかを確認する必要性を指摘され、東へやや離れた箇所に5トレンチを設定した。1・2トレンチが19.28㎡、3・4トレンチが14㎡、5トレンチが6.3㎡で、調査面積は計40.18㎡の発掘調査を実施した。

出土遺物は、層単位で取り上げたものとトータルステーションを用いて個別に出土地点の国土座標を測定記録したものとがある

調査地内の樹木については一部測量の障害になるものは伐採したが、基本的には伐採せず残した。

発掘調査は全て人力により実施した。葺石や外護列石などの外表施設の存在は想定されないうえ、墳丘盛土方法の検討を行うことと、墳端を特定するためにもトレンチは基本的に断ち割る方針とした。墳丘構築方法が判明している夕田茶臼山古墳との比較のためにも必要であると判断した。

発掘調査は平成28年12月5日に開始し、平成29年2月16日に終了した。

調査検討委員会は平成28年11月1日に発足し、第1回及び現地視察を平成29年1月25日に開催した。現地説明会は平成29年2月12日（土）に開催した。

## 3 基本層序

墳丘の現表土層（Ⅰ層）、墳丘から流出した土（Ⅱ層）、墳丘築造にともなう盛土（Ⅲ層）、築造時の基盤面となっている丘陵上堆積物（Ⅳ層）、凝灰岩の岩盤である地山層（Ⅴ層）となる。





① 調査前



③ 5トレンチ



② 調査前



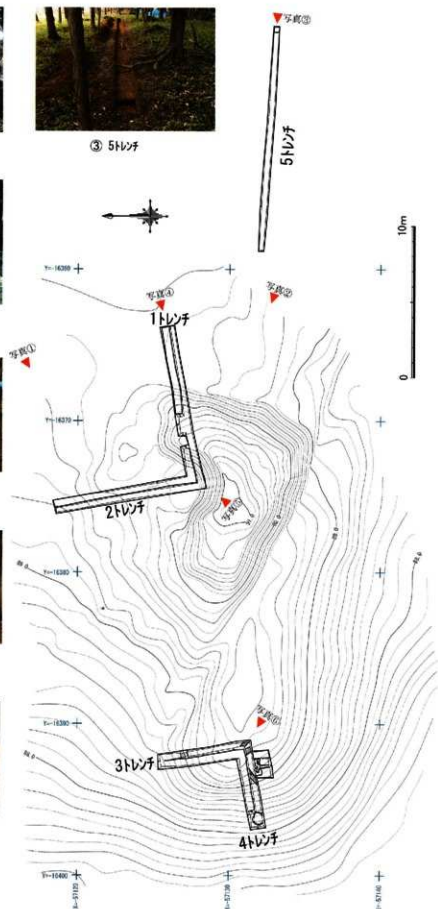
④ 1トレンチ



⑤ 1・2トレンチ



⑥ 3・4トレンチ



第11図 杉洞1号墳トレンチ配置図 (1:250)

盛土層(Ⅲ層)は、墳丘構築のための盛土(Ⅲ-1層)と基盤面が低い谷側のレベルを周囲の標高に揃えるために嵩上げた造成盛土(Ⅲ-2層)に分けられる。

主丘部と突出部においては盛土(Ⅲ層)の様相が異なる。主丘部は褐色あるいは暗褐色の砂質土系が主体、突出部は褐色系に赤褐色や黄褐色シルト系が混じる。

築造基盤層(Ⅳ層)は褐色砂質シルト土である。5トレンチの調査では約15～20cmの厚さで堆積している。凝灰岩である地山岩盤層(Ⅴ層)の風化土層と考えられる。これが主丘部の盛土において主体的に使われている土である。

## 4 各トレンチ調査の成果

### (1) 主丘部の調査

#### ① 1トレンチの調査(図12・13)

主軸に並行して土取りによる削平部分にトレンチの南側面がかかるように、幅1.0m、長さ10.0mのトレンチを設置した。土取りによる削平部分の断面精査も併せて行い、盛土構築方法や墓塚に関する情報も得ることを期待したトレンチである。

表土と流出土と思われる土を除去した後、南半を幅50cmで断ち割り、築造基盤層(Ⅳ層)まで掘り下げた。一部立木がある部分はそれを避けて掘削している。

葦石や埴輪列などの外表施設の確認は無い。

**土取の攪乱の影響** 図12断面図の赤点線ラインが土取による掘削の及んだ部分である。2・3・4層はしまりの無い暗褐色土であり、攪乱部分に二次的に堆積した流入土である。攪乱は基底部までは及んでいないものかなり深くまで削られている。

**盛土の土質と種類** 主丘部の盛土は基本的に褐色土系と黒色土系の2種類に大別できる。ベースは褐色土系であるが、間に黒色土系を挟んでいるようで、互層状と表現できる。墳丘の下層および中央部分に近くなるほど、黒色土系の割合が増える。墳丘の外表面には黒色土は使用せず、褐色土のみで構築している。ある程度の粘性をもった土を使用している。褐色土系は周囲の築造基盤層(Ⅳ層)と同質であり、それほど離れることなく、築造地の周辺で土を確保していることが想定できる。

**築造基盤層と盛土用土** 墳丘の外側となるトレンチ東端では表土を除去すると暗褐色砂質シルト土(78層)が検出された。同質の層が主丘部の下部へ続くことが確認できたため、78層を築造基盤層であると考えた。

墳丘東で築造基盤層78層の上に堆積する黒色土系の76層は、他の盛土と異なり水平に堆積しており旧表土に由来するものであると考える。76層は部分的にしか残存していない事を考えると、墳丘築造前に旧表土は除去している可能性があることから、76層自体も二次的に堆積していると捉え、盛土と考えている。そうすると墳丘盛土の間層に多く使用されている黒色土系の土は、当該地の周辺の旧表土を利用したものの可能性が高い。

盛土下部の築造基盤層78層は、墳丘外と同層よりも10cm程度であるが若干高い。周辺の傾斜は東から西であるので、自然傾斜と逆転している。このことから、おそらく墳丘築造箇所及びその周辺の地表を

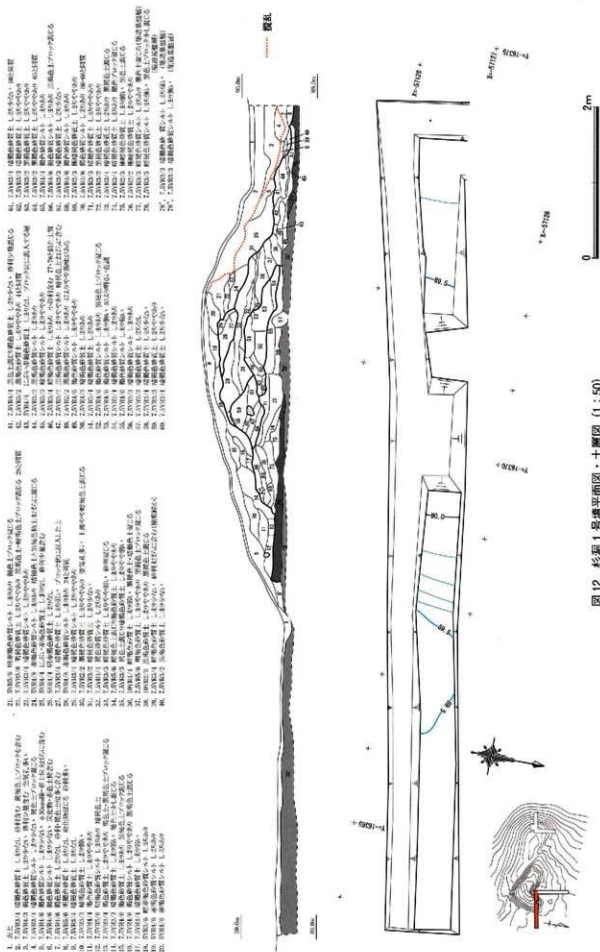


図 12 杉洞 1 号墳平面図・土層図 (1:50)



主丘部マウンド東半土層写真



主丘部マウンド西半土層写真

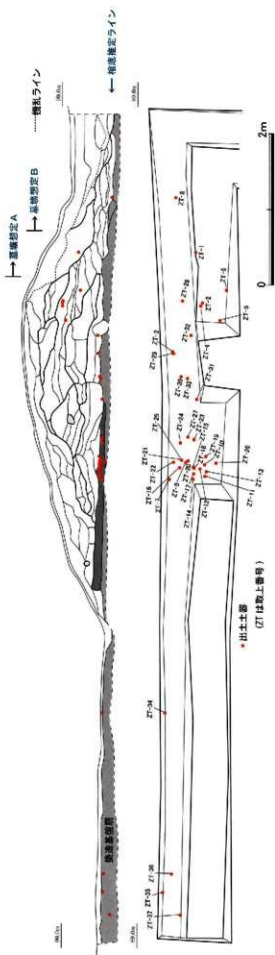


図13 杉洞1号墳遺物分布及び土層写真 (1:50)

削平して盛土として利用していた可能性が高いと考えられる。

**墳丘盛土の構築法** 主丘部の盛土構築は外表部と中央部の大きさは2つに区分できる。外表部は、前述したとおり褐色土系の単一の土を使用しており、中央部は黒色土系を多く使用し、褐色土系と黒色土系を互層状に盛土している。外表部が仕上げの盛土と考えられる。

中央部の盛土について、構築順序を考慮しながら大まかなまとまりをみていくと図13断面図の太線のように区分できる。これがおおよその構築順序を示している。築造基盤層(IV層)を整地し主丘部周縁付近に低い盛土を造る。その上に土を重ねながら土手状盛土に仕上げ上げていく。さらにその内側に盛り足しながら土手状盛土を広げる。中央部が後世の攪乱により削平されているため不明な部分もあるが、おそらくこのようにドーナツ状に土手状盛土しながら、最終的には中央部に土を充填して整形したと考えられる。外表部は、断面を観察する限り、原則的には墳頂部から順に盛りながら形成しているように推察できる。

**墓壙の推定** 攪乱の影響により明確な墓壙の推定は難しい。図12断面図25層は土手状盛土とも攪乱埋土とも違う単一で単位の大きな層である。土手状盛土の内部を補填した土と推測すれば、土手状盛土によって大きめの墓壙を用意したという想定(図13墓壙推定A)が考えられる。もう一つ墓壙推定Aよりもやや小さめになるような位置に斜めの立ち上がりが見られ、墓壙の立ち上がりの可能性を指摘しておく(図13墓壙推定B)。墓壙推定A・Bどちらが該当したとしても、棺は墳丘基底部の深い位置に据えられた事になり、棺底は築造基盤層(IV層)の上面辺りになる可能性が高い。以上の点を勘案すれば、墓壙は構築墓壙である可能性が高いのではないだろうか。

**遺物の出土状況** 遺物は旧表土の2次堆積層と推定した76層や築造基盤層付近での出土が多い。しかし、墳丘の外側では点々と出土するだけで、分布に粗密が認められる。また、主丘部の東に設けた5トレンチでは遺物が出土していない。これらを考慮すると、①築造初期段階に築造基盤面においての何らかの行為に付随して混入した土器片、②周辺の土に予め混じていた土器が剥ぎ取って盛土された土と伴に堆積したかのいずれかが考えられる。元々の土に混じていたという②の想定であれば、鉛直方向に分布しても良いはずであるが、基盤造成面あたりで集中している状況であり、①の想定も成り立つ状況である。

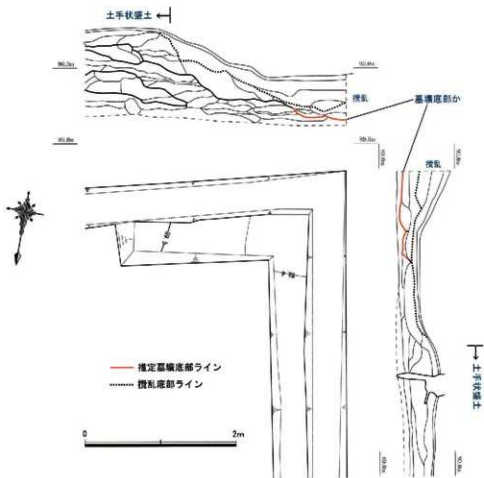
1 トレンチで確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・築造基盤面の高さ・・・標高 89.5～89.6m
- ・墳頂部の高さ・・・標高約 91.2m
- ・盛土の高さ・・・約 1.7m
- ・墳端部の高さ・・・標高約 89.5m

## ②2トレンチの調査(図14・15)

1 トレンチに直交し、測量図によって墳丘の周縁部と推定された盛り上がりの外側までを含めて、幅1.0m、長さ10.0mのトレンチを設置した。盛土はほとんど残っていない部分であったので、墓壙と墳丘裾部に関する情報を得ることを目的とした。また、現況の周縁部と思われる高まりが盛土の基底部あるいは墳裾とどのような関係があるのかも課題であった。この点に関する見通しが得られれば墳形の推定について有効であると考えトレンチを設定した。

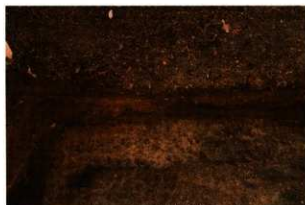




1 トレンチ墓壙側部付近土層写真



1 トレンチ墓壙底面付近土層写真



2 トレンチ墓壙底面付近土層写真



2 トレンチ墓壙側部付近土層写真

図15 杉洞1号墳1・2トレンチ接合部土層検討図(墓壙の状況)(1:50)



トレンチは、表土と流出土と思われる土を除去した後に西半を幅50cmで断ち割り、築造基盤層（IV層）まで掘り下げた。葺石や埴輪列などの外表施設の確認は無かった。

**墳丘裾部** 4～18層は1トレンチにて盛土用土として利用された土と同質であり、墳丘盛土の残存部分と考えると問題ない。この残存盛土がトレンチの北端から約2mあたりで取束する。地形測量図から墳丘周縁部と推定した高まり部分の位置とも合ってくるため、この地点辺りを墳裾と認定した。

**築造基盤層** 土層断面図14の19・20層は1トレンチの78層に相当する土層であり、築造基盤層（IV層）と考えた。周辺はほぼ平坦な地形であるが、築造基盤層はトレンチの中央でやや高まり、南と北へ傾斜する。旧表土も残っていない事を考えると、墳丘を構築する前に周辺を削平している可能性が高い。また、北側の墳丘裾部付近と推定した箇所から下がり、20～25cmほど低くなっている。これは1トレンチで推測したように、墳丘築造予定箇所の周辺の土を採取して盛土としたために、築造基盤層のレベルが墳丘外側で低くなっているのではないだろうか。

次に1トレンチと同じく、築造基盤層の上面に黒色土7・14層が堆積している。墳丘築造前の旧表土に由来する黒色土であると考えられるが、これは部分的にしか堆積しておらず、墳丘外にこの土は無い。1トレンチと同じく遺物は墳丘内側から多く出土する。周辺の土に土器がそれほど含まれない事を考えると、これらの遺物をすべて盛土の混入とは考えがたい。

**墓竈の推定** 擾乱の影響により明確な墓竈の特定は難しいが、図15に示すように、1トレンチと2トレンチの接合部分にて土手状盛土とは異なる堆積があり、この部分が墓竈の底になるのではないかとされる。また、2トレンチにおいても図14 11～15層部分は土手状盛土の基底部付近と考えられる。おそらく土手状盛土にて盛り残した中央部を、棺を設置する主体部として利用していると考えるのが妥当であろうか。非常に大きめの墓竈を用意していると思われる。

大規模な擾乱が及んでいるものの棺体は、それほど影響を受けていないのかもしれない。

2トレンチで確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・ 築造基盤面の高さ・・・標高89.4m
- ・ 墳端部の高さ・・・標高約89.2m

## (2) 突出部の調査

### ① 3トレンチの調査（図16・17・18）

植林擾乱の影響が比較的少ないと推測される突出部のコーナ付近に、主軸に直交するように幅1.0m、長さ6.0mのトレンチを設定し、突出部の側面（北側）の墳丘端部の特定と盛土構築方法に関する情報も抽出することを目的としたトレンチである。

表土と流出土と思われる土を除去した後に東半を幅50cmで断ち割り、築造基盤層（IV層）まで掘り下げた。築造基盤層には竪穴状の掘り込みが検出されたため、当該遺構の埋土の除去も行った。

葺石や埴輪列などの外表施設の確認は無い。

**築造基盤層と墳丘端部** 突出部の3トレンチ部分は構築当初の盛土を比較的よく残しており、保存状態は良好である。表土及び流出土の判別は容易であり、これを除去した形が築造当時の姿とそれほど大きく変わっていないのではないかとされる。築造基盤と考えられる土は褐色砂質シルト土（55層）

1. 黄土
2. 7.5VRS/6 暗褐色砂質土 しまりやや軟
3. 7.5VRS/6 暗褐色砂質土
4. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 しまりやや軟
5. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 暗褐色土ブロック状になる
6. 7.5VRS/6 明褐色砂質シルト
7. 4VRS/6 明褐色粘質土 しまり強い
8. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
9. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
10. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
11. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
12. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
13. 4VRS/6 明褐色粘質土 しまり強い
14. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
15. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
16. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
17. 7.5VRS/6 暗褐色砂質土 しまりやや軟
18. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
19. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
20. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
21. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
22. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
23. 4VRS/2 明褐色粘質土 しまり強い
24. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
25. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
26. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
27. 5VRS/6 明褐色粘質土 しまり強い

29. 7.5VRS/6 明褐色砂質シルト
30. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
31. 7.5VRS/6 明褐色砂質シルト
32. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
33. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
34. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
35. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
36. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト しまり強い、暗褐色土ブロック状になる
37. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
38. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
39. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
40. 7.5VRS/6 明褐色砂質シルト
41. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
42. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
43. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
44. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
45. 4VRS/2 明褐色粘質土 しまり強い
46. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
47. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
48. 7.5VRS/4 にぶい暗褐色砂質シルト
49. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
50. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
51. 7.5VRS/4 暗褐色砂質土 褐色土ブロック状になる
52. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
53. 7.5VRS/2 暗褐色砂質土
54. 7.5VRS/4 暗褐色シルト しまり強い
55. 7.5VRS/6 暗褐色砂質シルト(暗褐色粘質)

- 黄褐色粘土層
- 暗褐色土層
- 黒褐色層

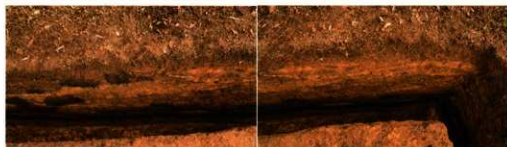
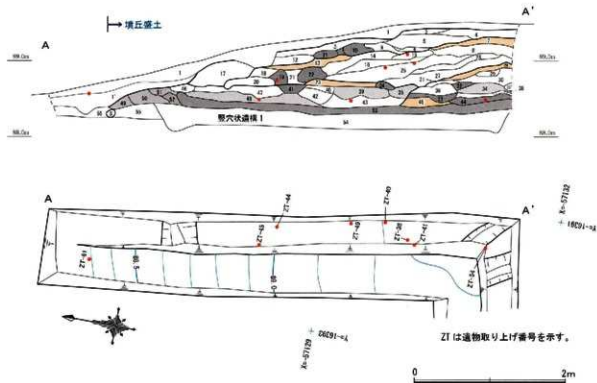


図16 杉洞1号墳3トレンチ平面図・土層図 (1:50)

であり、この築造基盤層と盛土が接する部分を墳丘端部と考えた。

主丘部と同様に築造基盤層の上には旧表土は残っていなかった。

**墳丘の傾斜と断面形** 墳丘の傾斜は緩やかである。墳頂部であるトレンチ南端から1.5mほどは平坦な面が続き、そこから緩やかに傾斜する。この部分は20%程度の傾斜度であるが、端部から1m程度の部分からは傾斜度が35%程度になり、僅かに傾斜がきつくなる。現況の地形を観察する限り、この状況はトレンチを設定しなかった南半も同様と考えられ、突出部の側面に関しては、明瞭な傾斜によって墳丘の内と外とを隔絶するような意図は感じられない。区画溝のような外構施設も確認されなかった。突出部の断面形は、基底と裾が広がった台形のような、頂部が狭い形態と考えられる。

**盛土用土について** 突出部の盛土は主丘部よりも粘性が強く、より締まっていた。粘りのある土のため、突出部掘削時には、掘削用のガリに土がくっついてきた。盛土用土は、①褐色土、②暗褐色土、③黒色土、④黄褐色系粘土の4つに大きく分けられる。①はおそらく築造基盤層(IV層)由来のもので、②③は旧表土由来と考えられる。主丘部では確認されなかったのが④の黄褐色系粘土である。非常に粘性が強く、盛土構築の大きな単位毎に表面に貼っているかのように薄く積まれる。④黄褐色系粘土は、杉洞1号墳が立地する当該丘陵上には確認されない。現況で同様の土は丘陵下に広がる水田域にて田圃床土で似た土を見かける。少なくとも谷下などのやや離れた場所から採取した土であることは間違いないだろう。

**盛土構築方法** 単位盛土ごとの傾斜をみると、基本的に墳丘と同じ方向(北側下がり)に傾斜している。また、盛土のまとまりを現場にて検討し、図16の土層断面図にて太線で示した。盛土はまず中央部分から構築して外側へ広げている事がわかる。盛土単位が北側下がり傾斜しているのもこの構築方法に起因していると考え。3トレンチの堆積からは、中央に50cm程の高まりを造り、そこから墳裾へほぼ水平に盛土を広げている工程を読み取ることができる。この部分が墳丘基底部となる訳であるが、この部分には③黒色土系と②暗褐色土系を多用している。さらにこの基底部の上に、中央部分に①褐色土による高まりを内から外に盛りながら構築する。そしてそれをさらに墳丘裾へ広げていく。この各工程の区切り毎の上面に④黄褐色粘土の薄い堆積が確認できる。

**基底部の黒褐色土層** 最下層の墳丘基底部に黒褐色土53層が水平に堆積している。当初は、旧表土の残存を考えたが、墳丘裾部において盛土と考えられる49～52層の暗褐色砂質土と、黒褐色土53層が繋がっている。土質で53層を分層できなかったが、単一の層ではなく、周辺の旧表土由来の土ではあるが削平や集約などの二次的な土の移動は想定しておいた方がよいかもしれない。

築造基盤層55層の高さが、墳丘外は10cm程度低い。主丘部と同じ傾向があり、築造予定箇所やその周辺の土を採取して盛土に利用している可能性が高い。

**築造基盤層を掘り込む竪穴状遺構** 基盤層にて竪穴状に掘り込んだ遺構を検出した。埋土は暗褐色シルト土でしまりが強い単一の土であり、長い時間をかけた埋没過程を経ているとは考え難い。

貼床と考えられる堆積は確認されなかったので住居跡とは特定できない。立ち上りの下部はやや窪んでおり削溝状となっている。平面形は不明であるが、3トレンチの北側と南側では並行しないので方形では無いと思われる。同様の竪穴状の掘り込みは4トレンチでも確認されており、埋土もほぼ同じである。狭小な調査区での検出であり、遺構の性格は特定できなかった。遺物は盛土内と同様の週間式期の土器片が出土している。



杉洞1号墳突出部墳頂  
羽生の水田をのぞむ (北東から)



3トレンチ (南から)



3トレンチ (北から)

図 17 杉洞1号墳3トレンチ調査写真



東壁北側土層



東壁中央土層



墳丘端部付近土層

図18 杉洞1号墳3トレンチ土層写真

**遺物の出土状況** 遺物は盛土内から出土している。分布に偏りは無く点々と土器片が出土するという状況である。

3 トレンチで確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・築造基盤面の高さ・・・標高 88.45m
- ・墳頂部の高さ・・・標高約 88.4m
- ・盛土の高さ・・・0.8～1.0m

## ② 4 トレンチの調査 (図 19～24)

墳丘の主軸と思われるラインに幅 1.0m、長さ 5.0m のトレンチを設定した。突出部の前面 (西側) の墳丘頂部の特定と盛土構築方法に関する情報を抽出することを目的としたトレンチである。4 トレンチは、主丘部の 1 トレンチの延長線上に位置し、3 トレンチとは L 字状に直交する。

表土と流出土と思われる土を除去した後、東半を幅 50cm で断り割り、築造基盤層 (IV 層) まで掘り下げた。築造基盤層には 3 トレンチと同様に堅穴状の掘り込みが検出されたため、当該遺構の埋土の除去も行った。築造基盤層 (IV 層) を掘り込み堅穴状遺構は、3 トレンチと区別するため堅穴状遺構 2 とする。

基底部付近で完形に近い高坏が伏せた状態で出土した (図 23)。坏部は調査区の南壁に半分が埋まった状態で出土したため全貌が分からないだけでなく、取り上げも困難であった。そのため調査検討委員会にて現地指導をいただき、高坏坏部の周辺を 1.0m × 1.8m の範囲で南へ拡張した。

葺石や埴輪列などの外表施設の確認は無い。

**築造基盤層と墳丘頂部** 3 トレンチと同様に構築当初の盛土を比較的良好に残しており、保存状態は良好と思われる。表土及び流出土を除去した形が築造当時の姿とそれほど大きく変わっていないだろう。築造基盤と考えられる土は暗褐色砂質シルト土 (39 層) であり、この築造基盤層と盛土が接する部分が墳丘頂部であると考えられるが、この部分は攪乱の影響を受けているのと、円形の掘り込み SX01 が掘削されているため明確には墳丘頂部を特定できなかった。SX01 の埋土はしまり無く、表土とほぼ同質であり新しい時期の掘削である。

**墳丘の傾斜度** 墳丘の側面 (3 トレンチ) と同様で、前面も傾斜は緩やかである。明瞭な傾斜の変化点は無く、墳頂部からの傾斜は傾斜度 18% 程度となだらかに墳丘頂部に至る。側面と同じく明瞭な傾斜によって墳丘の内と外とを隔絶するような意図は感じられない。傾斜面が長く伸びて傾斜が緩やかになるのが突出部前面の特徴のひとつである。区画溝のような外構施設も確認されなかった。

**盛土用土と盛土構築方法** 盛土用土は 3 トレンチと同じである。基本的には①褐色土、②暗褐色土、③黒色土、④黄褐色系粘土の 4 つに大きく分けられる。中央から周辺へと盛土を重ねていき、大きな単位毎に④の黄褐色系粘土を薄く敷いている。下層では暗褐色土と黒褐色土を多用する。特に黒褐色土は何層かを水平に互層に差し込んでいるようである。

**盛り足しによる嵩上げ** 突出部は西の谷側へ若干迫り出している。周辺の現地表から考えると、谷への傾斜面に突出部を構築していると考えられる。おそらく基盤層 39 層や下層の堅穴状遺構の埋土が西の谷側へ傾斜しており、この傾斜度がおそらく本来の丘陵の傾斜であろう。しかし墳丘盛土の堆積状況をみると比較的レベルに盛土されており、築造の初段階あるいは前段階において、谷側の低い部分に 37 層の褐色土を盛ることで若干の嵩上げをしているのではないかと考えている (図 20)。これによってほ



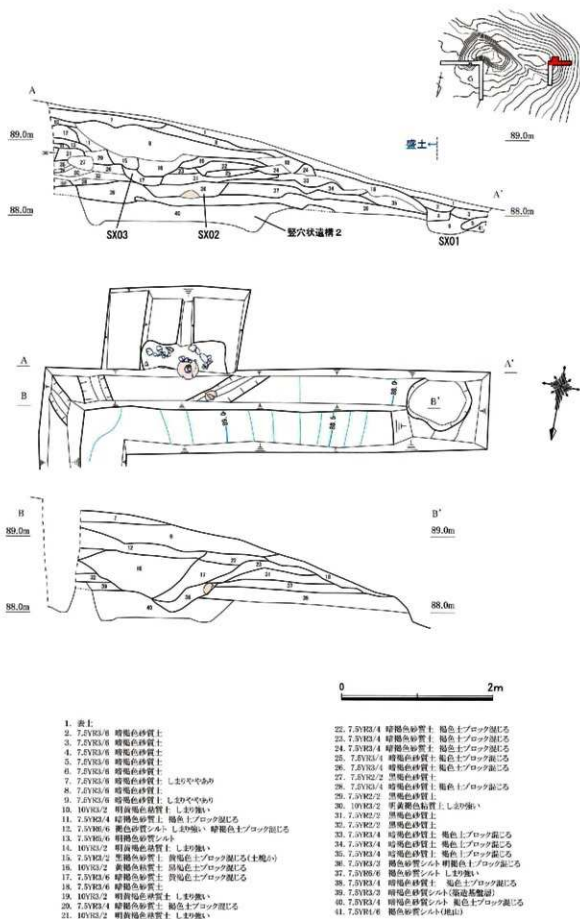
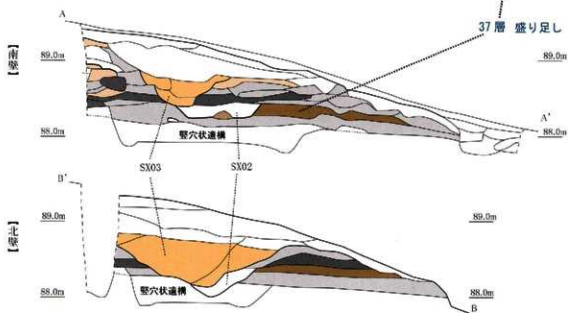


図 19 杉洞1号墳4トレンチ平面図・土層図 (1:50)





4トレンチ南壁土層 (北から)



4トレンチ北壁・南壁土層の土質類型 (1:50)



X02・03北壁土層 (画像反転)

- 黒褐色系 砂質土
- 暗褐色系 砂質土
- 黄褐色系 シルト
- 褐色系 シルト【盛り足し造成】
- 黒褐色土混じり黄褐色土系

0 1:50 2m

図20 杉洞1号墳4トレンチ南北壁土層の対応関係について

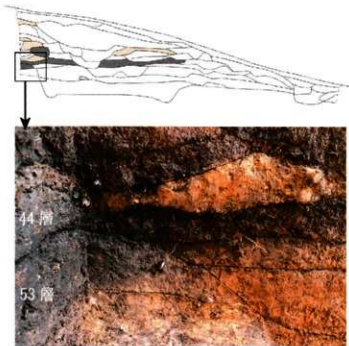


図21 3トレンチ下層黒色土と4トレンチ黒色土の関係

その内の2つが重なって出土し、接合した。出土した坏部と脚部はサイズや胎土など違和感なく、同一製体と考えて良い。坏部の周辺からは壺の破片が出土しているが、破片が縦位になることなく、ほぼ平坦な面を上にして出土している(図23・24)。これらは、ほぼ同様の土で埋め戻している。

**下層黒色土について** 4トレンチ下層には黒色土34層が水平に堆積している。レベルを詳細にみると、4トレンチ東端では標高88.52m、西端は88.61mであり、西へ向かって若干であるが傾斜が上がつている。丘陵の傾斜は西下がりであるので、それとは逆である。また3トレンチで確認した下層黒色土との関係も検討したが、最下層の53層ではなく、44層の黒色土盛土に繋がることが確認できた(図21)。以上の点から考えて、下層黒色土34層は自然の旧表土ではなく盛土と判断した。高坏出土部分の拡張部断面(図22)において、下層黒色土の上にもB土層図4層やC土層図12層などのように水平堆積する黒色土が認められる。突出部前面においては、黒色土と粘性の強い褐色・黄褐色土を互層状に盛土する意図が認められる。

**SX02・03について** 南壁の15～17層、北壁の16・17層は、黒褐色土と黄褐色土、褐色土など盛土用上となっている各土が、ブロック状に混じり合った堆積である。断面形も掘り込み状を呈していることから、墳丘構築途中で一度掘り返し、その土でまた埋め戻したと推定しSX03とした。SX03は、前述した基盤嵩上げ層を掘り込んだSX02と近い位置に設けられている点は注意したい。前方部前面において構築した盛土を掘削し、埋め戻しする事例は、夕田茶白山古墳においても認められる(註1)。土木的な意義や意味は見出しがたい。構築過程における土木工以外の何らかの行為を想起させるものである。トレンチ調査のため平面プランで確認ができなかった訳であるが、トレンチ幅よりも大きな掘り込みであると考えられる。

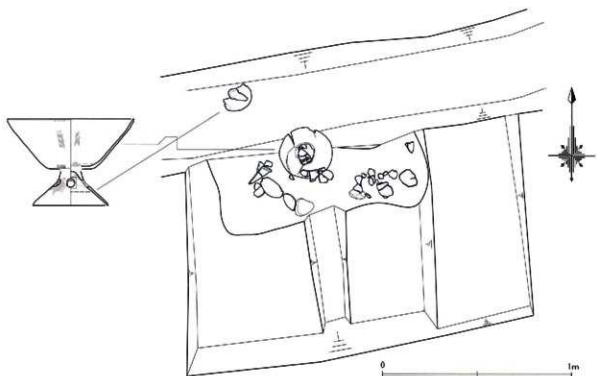
**下層の堅穴状遺構** 基盤層にて堅穴状に掘り込んだ遺構を検出した。3トレンチとは同類の別遺構と考えられるため堅穴状遺構2とした。堅穴状遺構1と同じく埋土は暗褐色シルト土でしまりが強い単

ぼフラットな基盤面が形成されたため、その上に積み重ねた盛土が水平を保つことができたのではないかと推測する。後述するが、出土した高坏はこの盛り足し造成土を掘り込んで設置されていた。

**高坏の出土状況** 盛土基底部から高坏の坏部(ZT-60)と同脚部(ZT-55)が出土した。南へ拡張し全体像を把握した結果、谷側への傾斜のレベル上げを目的とした37層の盛り足しの後、その面を僅かに掘り窪め高坏坏部を伏せた状態で掘えていると推測し(図22)、これをSX02とした。

坏部の底は割れて、坏内部へ陥没していたが、一部を確認できなかった。脚部は少し離れた位置から出土した。脚部もいくつかの大きな単位で割れているが、





SX02 平面実測図 (1:20 土器実測図は 1:8)



高坏出土オルソ写真



SX02 平面検出状況 (北から)



高坏出土状況 (南から)



高坏出土状況 (北東から)

図23 杉洞1号墳4トレンチ SX02 高坏出土状況



高环 环部出土状況写真 (南から)



高环出土状況写真 (西から)



高环环部出土状況写真 (東から)



高环环部及び周辺土器片出土状況写真 (上から)



高环环部及び周辺土器片出土状況写真 (西から)



高环环部と土器片の重なり状況写真



高环脚部及び环部の出土状況写真 (西から)



高环脚部の破片重なり状況写真 (南から)

図 24 杉洞 1 号墳 4 トレンチ SK02 高环出土状況写真

一の土であり、長い時間をかけた埋没過程を経ているとは考え難い。貼り床や柱穴は確認されていない。狭小なトレンチでの検出であり全体像は把握できないが、竪穴の壁面は北西と北東方向ではほぼ直交の可能性がある。壁面の立ち上がりは、東側では約45cmあるが、西側では25cm程度となっている。これは傾斜面に竪穴を掘ったために、低い谷側の壁面が低くなったと思われる。竪穴状遺構の上面から当時の斜面傾斜を想定することができる。

竪穴状遺構は比較短時間で埋没したと考えられるが、埋土からは土器片が出土している。週間I期のものと思われ、盛土基底部で出土した高坏と時的にそれほど変わらない遺物である。以上の点から、竪穴状遺構の掘削・埋没、墳丘築造が比較的短時間でなされたと考えられる。

4 トレンチで確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・築造基盤面の高さ・・・東側（丘陵側）標高88.4m  
西側（谷側）標高88.1m
- ・墳端部の高さ・・・・・・標高約88.1m
- ・盛土の高さ・・・・・・約1.0m

### (3) 出土遺物について

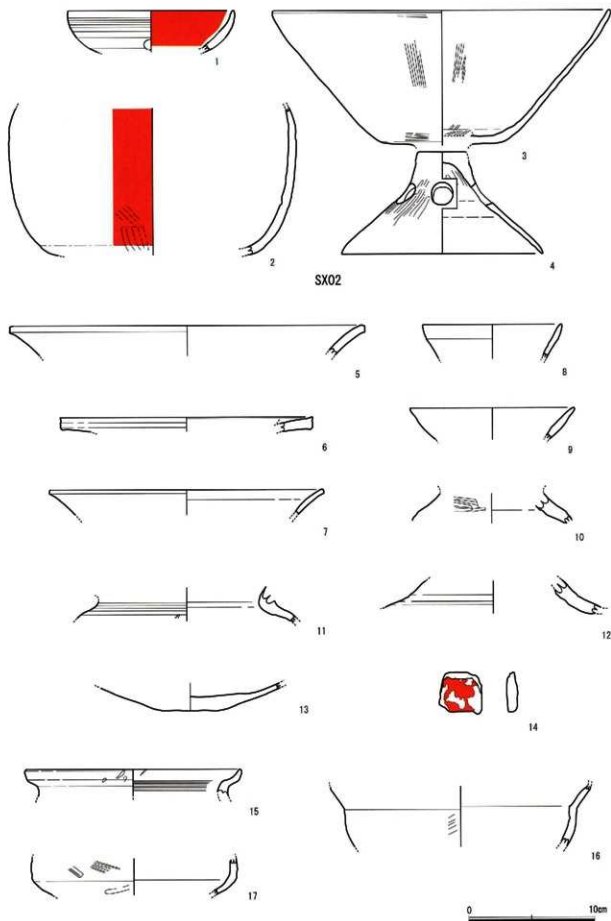
**SX02 出土の土器** 図25の1～4は4トレンチ（突出部前面）の墳丘基底部SX02より出土した。1・2は伏せて置かれた坏部の周りに出土した破片である。1は有孔の短頸壺である。口径は13.1cmで頸部が内湾し、内面に赤彩が施される。2は壺の胴部である。胴径は22.8cm程度で外面に赤色が施される。3は高坏の坏部である。口径26.6cm、器高10.65cmで、内外面にミガキを施している。4は高坏の脚部である。脚部の底径はおよそ16cm、脚高は7cmで、内面にミガキを施す。透かし孔は、4穴であるが2対で向かい合いの配置となっている。3の坏部と4の脚部は大きさや胎土から同一個体と考えられる。坏部が深く、脚部はやや低くわずかに外反した後に内湾する特徴から、東海地方の土器編年では週間I式4段階以降、早野編年の早3・4期の時期を想定する。赤彩のある有孔短頸壺は中濃地域において週間I式期の周津墓において出土する傾向がある。夕田茶白山古墳においても出土している。以上を勘案すれば下っても週間II式1・2段階であろう。

**各トレンチ出土の土器** 5～7は壺の口縁部である。5は広口壺で後円部端部が外反する。6は口縁端部に面をもち、外反する。おそらく加飾壺の口縁部であろう。

8・9は短頸壺である。いずれも薄手の小型の壺と思われる。10～12は壺の肩から頸部にかけての破片である。10は外面にミガキが施される。11は直線文が数段めぐる加飾壺であろうか。13は壺の底部である。底径が小さく境が明瞭で無い点から下ぶくれ形状の壺と推定される。14は壺破片で赤彩が施される。

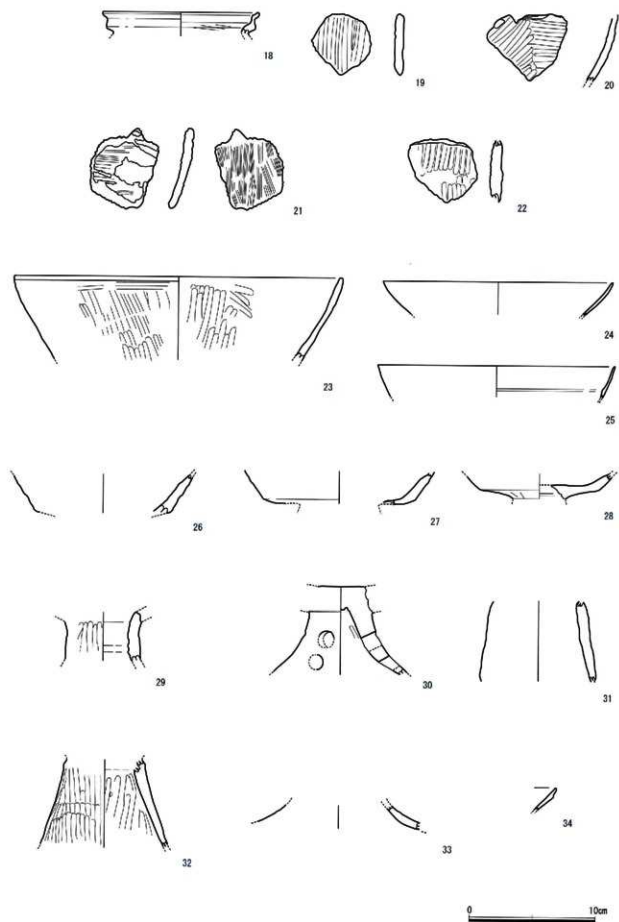
15～16は鉢類である。15は直立気味で強く内湾する口縁部を持ち、口縁外面に刺突が、内面にはヨコハケが施される。やや古い様相がみられる。16は口径が大きく開き気味の形態で、週間I式期後半の時期を想定する。

18～22は甕類である。18はS字状口縁甕である。口径は小さく、口縁の屈曲が強い。頸部内面にヨコハケが認められる。S字甕A類もしくはB類古段階と推定する。20は条痕甕の体部である。美濃



第25図 杉洞1号墳出土土器① (1:3)





第26図 杉洞1号墳出土土器② (1:3)

報告書 No.	器種	出土場所		層位・遺構	取上番号	取上年月日	標高値 (m)
1	短頸壺	Tr4	拡張部	SX2	ZT-75	2017/2/13	88.279
2	壺	Tr4	拡張部	SX2	ZT-70	2017/2/13	88.278
3	高坏坏部	Tr4	基底部	SX2	ZT-60	2016/12/26	88.322
4	高坏脚部	Tr4	基底部	SX2	ZT-55	2016/12/26	88.321
5	壺口縁	Tr4	拡張部	SX2	ZT-67	2017/2/1	88.310
6	壺口縁	Tr4	西側盛土	下層黄色土	ZT-47	2016/12/21	88.327
7	壺口縁	Tr1	盛土	下層黑色土	-	2016/12/12	
8	短頸壺	Tr4	西側盛土	下層黄色土	ZT-48	2016/12/21	88.392
9	短頸壺	Tr4	旧表土表面	暗褐色土	ZT-50	2016/12/26	88.285
10	壺頸部	Tr4	-	表土西側	-	2016/12/16	
11	壺頸部	Tr2	盛土	最下層	-	2016/12/14	
12	壺頸部	Tr3	北側盛土	直上	ZT-61	2017/1/10	88.608
13	壺底部	Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-33	2016/12/12	89.462
14	壺胴部	Tr2	盛土	最下層	-	2016/12/14	
15	鉢	Tr1	盛土	-	ZT-28	2016/12/9	89.994
16	鉢	Tr1	盛土	下層黑色土	-	2016/12/12	
17	鉢	Tr3	北側盛土	下層黑色土	-	2016/12/21	
18	S字甕	Tr2	盛土基底	黑色土	-	2016/12/14	
19	甕	Tr1	盛土	-	ZT-28	2016/12/9	89.994
20	条痕甕	Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-15	2016/12/9	89.506
21	甕	Tr4	拡張部	黄褐色上面	-	2017/1/31	
22	条痕甕	Tr2	盛土	最下層	-	2016/12/14	
23	高坏坏部	Tr4	拡張部	黄褐色土上面	ZT-62	2017/1/31	88.697
24	高坏坏部	Tr4	盛土	中層黑色土	-	2016/12/20	
25	高坏坏部	Tr3	北側盛土	下層黑色土	-	2016/12/21	
26	高坏坏部	Tr4	下層遺構	-	ZT-56	2017/1/6	88.128
27	高坏坏部	Tr4	下層遺構	-	ZT-58	2017/1/6	88.130
28	高坏坏部	Tr4	旧表土表面	暗褐色土	ZT-51	2016/12/26	88.284
29	器台	Tr3	南側盛土	下層黑色土	-	2016/12/21	
30	高坏脚部	Tr4	拡張部	黄褐色上面	ZT-62	2017/1/31	88.697
31	高坏脚部	Tr1	盛土	中層	ZT-02	2016/12/6	90.012
32	高坏脚部	Tr1	盛土西側	中層	ZT-04	2016/12/8	90.012
33	壺肩部	Tr1	盛土	-	ZT-28	2016/12/9	89.994
34	壺か	Tr3	北側盛土	下層黑色土	-	2016/12/21	
-		Tr1	盛土西側	-	ZT-01	2016/12/6	89.791
-		Tr1	盛土	中層	ZT-03	2016/12/7	
-		Tr1	盛土西側	下層	ZT-05	2016/12/8	89.912
-		Tr1	盛土西側	下層	ZT-06	2016/12/8	89.752
-		Tr1	盛土	下層	ZT-07	2016/12/9	89.461
-		Tr1	盛土	下層土坑	ZT-08	2016/12/9	89.308
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-09	2016/12/9	89.510
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-10	2016/12/9	89.528
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-11	2016/12/9	89.509
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-12	2016/12/9	89.517
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-13	2016/12/9	89.513
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-14	2016/12/9	89.477
-		Tr1	盛土	下層黑色土	ZT-16	2016/12/9	89.466

表3 杉洞1号墳出土土器台帳①

報告書 No.	器種	出土場所	層位・遺構	取上番号	取上年月日	標高値 (m)	
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-17	2016/12/9	89.483
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-18	2016/12/9	89.467
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-19	2016/12/9	89.511
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-20	2016/12/9	89.481
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-21	2016/12/9	89.479
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-22	2016/12/9	89.449
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-23	2016/12/9	89.486
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-24	2016/12/9	89.469
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-25	2016/12/9	89.475
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-26	2016/12/9	89.509
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-27	2016/12/9	89.463
-		Tr1	盛土	下層黄色土	ZT-29	2016/12/12	89.585
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-30	2016/12/12	89.503
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-31	2016/12/12	89.451
-		Tr1	盛土	下層黒色土	ZT-32	2016/12/12	89.546
-		Tr1	盛土	-	ZT-34	2016/12/12	89.394
-		Tr1	盛土	-	ZT-35	2016/12/12	89.430
-		Tr1	盛土	-	ZT-36	2016/12/14	89.394
-		Tr1	盛土	-	ZT-37	2016/12/14	89.307
-		Tr3	盛土	上層黄色土	ZT-38	2016/12/19	89.075
-		Tr4	盛土	上層黄色土	ZT-39	2016/12/19	88.963
-		Tr3	盛土	中層黒色土	ZT-40	2016/12/19	88.884
-		Tr3	盛土	中層黒色土	ZT-41	2016/12/19	88.918
-		Tr4	盛土	中層黒色土	ZT-42	2016/12/19	88.806
-		Tr4	盛土	中層黒色土	ZT-43	2016/12/19	88.691
-		Tr3	北側	下層黒色土	ZT-44	2016/12/20	88.715
-		Tr3	北側	下層黒色土	ZT-45	2016/12/20	88.501
-		Tr4	西側盛土	下層黄色土	ZT-46	2016/12/21	88.289
-		Tr4	旧表土表面	暗褐色土	ZT-52	2016/12/26	88.278
-		Tr4	旧表土表面	暗褐色土	ZT-53	2016/12/26	88.236
-		Tr4	東側盛土	下層黒色土	ZT-54	2016/12/26	88.455
-		Tr4	下層遺構	下層黒色土	ZT-57	2017/1/6	88.150
-		Tr4	下層遺構	下層黒色土	ZT-59	2017/1/6	88.133
-		Tr4	拡張部	黄褐色上面	ZT-63	2017/1/31	88.667
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-64	2017/2/1	88.326
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-65	2017/2/1	88.324
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-66	2017/2/1	88.323
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-68	2017/2/13	88.291
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-69	2017/2/13	88.284
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-71	2017/2/13	88.254
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-72	2017/2/13	88.272
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-73	2017/2/13	88.290
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-74	2017/2/13	88.280
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-76	2017/2/13	88.295
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-77	2017/2/13	88.305
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-78	2017/2/13	88.307
-		Tr4	拡張部	SX2	ZT-79	2017/2/13	88.334

表3 杉洞1号墳出土土器台帳②

山間部では条痕甕が廻間Ⅰ式期まで残存することが知られている。

23～28は高坏の坏部である。23は口径が大きく深みのある器形で、SX02出土の高坏と似たタイプであろう。24・25は小型の高坏である。26～28は高坏坏部の底面部分である。有段高坏であるが、坏部下半が無く、フラットな底部となっている。廻間Ⅰ式後半以降を推定する。

29は器台である。筒型で細身の胴部と推測される。30は高坏脚部である。縦方向に2穴の透かし孔がある。美濃山間部では廻間Ⅰ式から廻間Ⅱ式初め、恩田編年の美濃山間部Ⅶ-3の時期を想定する。32も高坏脚部と考えられるが、胎土が暗褐色でやや異質である。内面には縦方向のミガキが施される。33は外開きの脚部付け根あたりである。小型高坏あるいはワイングラス型高坏の脚部と推定する。

## 5 小結

**丘陵を利用した築造方法** 1トレンチと4トレンチの土層図を現況断面に合成し図27に示した。この図を基に墳丘の築造方法を考えてみる。杉洞1号墳の主丘部墳頂と突出部墳頂の高低差は1.1～1.5mであった。築造断面形は、主丘部が突出部より1.5m以上高い形を指向して作られたといえる。しかし、実際の盛土（マウンド）の高さを比較すると、主丘部は築造基底部から約1.5m、突出部は約1.0mであり、0.5m程の違いしか無い。

次に築造基盤の標高をみてみる。主丘部東半の1トレンチでは89.5m、突出部3トレンチでは88.45m、突出部前面の墳丘端では88.1mであった。主丘部と突出部では旧地形で1m以上の高低差があることが分かる。現地表と同様に、築造時の旧地形も主丘部と突出部の境あたりから傾斜がきつくなって傾斜していたと推測できる。また、主丘部の基底面レベルが突出部の墳頂とほぼ同レベルになっている事も今回の調査で分かった重要な事柄である。

以上の点から考えると、杉洞1号墳は丘陵の平坦な部分と傾斜部分の境あたりを選地し主丘部を平坦な部分に、突出部は緩やかに下る谷側へ迫り出すように設定して築かれたと分かる。谷側を盛土で嵩上げし、主丘部の底とほぼ同じレベルに揃えることで、主丘部がその盛土分（約1.5m）だけ突出部より高くなり、なおかつ断面形が一連の形になるのを確保したと考えられる。これが例えば平坦な場所で築造した場合、1.5mの高低差を維持しようとするならば、突出部の盛土高の分だけ主丘部の下層に盛土しなければならぬ。この分の盛土を「傾斜」をうまく使う事で補っているかのようである。

上記の特徴を整理することで、もう一つ重要な事を導き出せる。つまり主丘部「底」と突出部「頂」がほぼ同じ標高であることから、主丘部と突出部は別々に築造されている可能性も考えられる。少なくとも一連で築造した可能性は少ないだろう。主丘部と突出部は使用している土に僅かに違いがあった。具体的には突出部は黄褐色粘土を多用している点が挙げられる。これは谷側あるいは低地部から持ち込んだ粘土であろうと推測している。傾斜面に造る突出部においては、粘土質の用土を要所に使用し、強度を補強する必要があったのかもしれない。盛土強度を高めるために、盛り方と用土を変えている。

**主丘部と突出部の盛土方法の違い** 主丘部は黒色土を多用した「土手状盛土」で構築している。外周に堤状に土を盛り外から内へ盛り足しながら墳丘の形を整えていく工法である。土手状盛土は、美濃においては廻間Ⅰ式期の墳丘墓から多く認められる（註2）工法である。一方、突出部は中央部から外側へ拡張していく盛り方で、前述したように用土も粘性土を多用している。やはり主丘部と突出部をそ

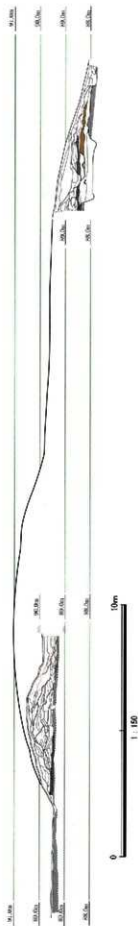
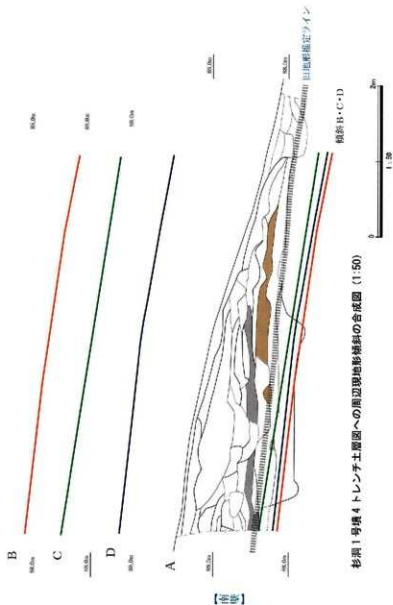


図27 杉洞1号墳 縦断面及び縦断土層合成図 (1:150)



杉洞1号墳4トレンチ土層図への周辺現地形の合成図 (1:50)

図28 杉洞1号墳築造前の旧地形の推定図

それぞれに分けて築造している可能性が高い。

**高坏の出土状況と築造年代** 突出部の基底部付近には黒色土の水平堆積層があり、高坏はこの層の下から出土した。この黒色土層が自然堆積（つまり旧表土）か盛土かによって高坏の評価は大きく変わるため、現場にてかなり検討を行った。まずトレンチの詳細説明（39頁）にて高坏上部の黒色土層は3トレンチ基底部の黒色土層と連続のものではない点、拡張部においてはさらに上部にも黒色土の水平堆積層が認められた点から、高坏上部に堆積する黒色土層は盛土と判断した。

さらに丘陵傾斜からも検討しておく（図28）。図のB・C・Dにおいて現況の丘陵傾斜を計測し、4トレンチ南壁土層図Aに合成した。この傾斜が当該丘陵地の基本的な傾斜度に近いと考えられる。この図から、高坏上部の黒色土層の傾斜と現況傾斜はあまりにも相違が大きく、これを旧地形あるいは旧地表とは考え難い。次に下層堅穴状遺構の肩部をつないだ傾斜、つまり地山層の傾斜（図面の点線）を比較すると、僅かに緩やかであるが現況傾斜に近い。肩部の高さが違う現象は傾斜面に掘削したと考えれば合理的である。この地山層の傾斜が築造当時の丘陵傾斜であると推定し、当該土層を築造基盤層と考えたい。現況傾斜が築造基盤の斜よりやや急になっているのは、古墳築造後の谷の開析作用によるものではないか。墳丘盛土に覆われる部分は開析を受けることがなかったために築造時の傾斜を維持したの

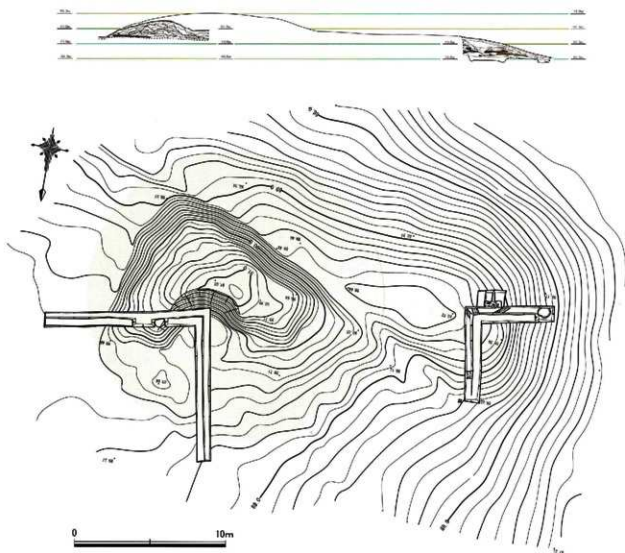


図29 杉洞1号墳丘復元図（1：250）



ではないだろうか。高坏坏部(図25の3)は、上記の傾斜する築造基盤層に盛り足しを行った褐色土層(37層)を僅かに掘り込みSX02の底に伏せるように置かれたと推定した。このことから、高坏は築造当初に据えられたと推定し、高坏の所属時期である廻間Ⅰ式4段階～廻間Ⅱ式初期初めを杉洞1号墳の築造年代と推定した。高坏坏部(図25の3)と脚部(図25の4)は別々に少し離れて出土しているが同一個体である。脚部はさらに割れたものを重ね合わせた状態で出土しており、埋没過程で坏部と脚部が割れたというよりは、事前に割れたものが置かれたと考える方が合理的な状況である。坏部の周りには有孔短頸壺の破片が散りばめられる。この短頸壺には赤彩があった。破片は坏部に重なるように出土するものもある。

これらの状況から、次のように遺棄過程を想定した。高坏の坏部と脚部を割り、逆さに少し離れて置く。短頸壺も破碎し、破片を坏部の周りに遺棄する。盛土を被せて墳丘を構築する。

**杉洞1号墳の墳形について** 後世の改変を激しく受けており築造当時の墳形を復元するのは容易ではないが、今回得られた情報から可能な限り仮説を示しておきたい。主丘部の北東部分(1トレンチと2トレンチの間)にある僅かな高まりは主丘部基底の残存である可能性が2トレンチの調査によって判明した。この高まりがカーブして弧を描いている点から考えて主丘部は方形よりも円形と考える方が妥当と考える。さらに改変以前には「ひさご塚」と呼称されていたことや、昭和45年当時には前方後円墳と記録されている点からも主丘部は円形であった可能性が高い。2トレンチと僅かな高まり部分から正円を推定すると図29の様な直径18m程度が最も違和感が無く、円の中心が残存の墳頂部になってくる。主丘南側の等高線の僅かな広がりにも重なってくる。ただし、正円であるかは不明である。また、直径18mという規模は、同時期の円形墓である象鼻山8号墳(養老町)、東町田墳墓群(大垣市)、上野桐野弥生墳丘墓(可児市)のサイズと同じである。突出部は、3・4トレンチで確認した墳頂の延長を結ぶあたりに隅角部分の残存と思われる箇所が等高線でも認められる。これで北側の側辺ラインを決めて南へ反転したのが図29である。以上の推察から、全長約30mの前方後円形に近い墳形と推定した。そして築造過程の検討から、主丘と突出部は別工程で築造され、一体となっている点を勘案すれば、当該期の首長墓に散在する円形の墳墓に方形墳丘が取り付くような形が想定される。

**埋葬主体部について** 土取りによる攪乱の影響で墓塚の確定は難しいが、土手状盛土による構築墓塚の可能性が高いと考えた。1トレンチと2トレンチの交点(逆L字の角)あたりで墓塚底部の可能性のある部分を明示したが、トレンチに僅かにかかるのみであった。墓塚の中心はおそらく南西へ数メートルのところであり、攪乱の影響は免れている可能性が高い。石材の露露がない点を考えると石柩は無く木棺直葬の可能性が高い。棺部分も残存している可能性が考えられる。これ以上の破壊が進まないよう定期的な巡回や周知の徹底を図る必要がある。

#### 註

- 1 夕田茶臼山古墳の前方部前面の傾斜部(T1)で検出したSD01は、墳丘構築過程で盛土の一部を掘削し短期間で埋め戻されたと推定している。富加町教育委員会2014『夕田茶臼山古墳範囲確認調査』14～17頁
- 2 特に中濃においては、上野桐野弥生墳丘墓や上野山神弥生墳丘墓、金ヶ崎遺跡SX01～03・05・09など当該期の墳丘墓の築造方法に取り入れられている。  
高田崇正2017『美濃における古墳出現期の様相』【東海地方における古墳出現期の様相2】第30回考古学研究会東海例会資料集  
高田崇正2018『美濃における古墳の築造技術について』【東海における古墳時代の土木技術】第32回考古学研究会東海例会資料集



## 第5章 蓮野1・2号墳の調査

### 1 現況測量調査の成果

調査の事前に基礎資料とするため等高線間隔10cmの測量図(図30)を作成した。平成29年10月にトータルステーションによる現況測量を実施し、作図初校があがった段階で昨年度の第1回調査検討委員会が出された意見を反映させながら、トレンチの設定を行った。

**古記録による墳形** 昭和45年に刊行された『富加村の古墳』によると蓮野古墳は「東方より広がる低い丘陵裾部に位置し、前方部を南南西に向けた前方後円墳である。(中略)比較的保存状態の良いものである。全長27.1m、後円部径11.45m、前方部北のくびれ部で巾10.20m、前方部南端で巾11.20m、後円部の高さ2.34m、前方部との高低差0.9mである。なお後円部東、西の両裾部が多少削り取られ、また東側面の周囲は畑地との境として溝が掘られているため、後円部は元来の径が15m前後のものであったように思われる。(中略)本村では夕田茶臼山古墳につづく良好なものである。なお出土遺物等については不明である。」と記されている。

**周辺の地形** 蓮野1号墳は、夕田地区の谷の入口部に南へ突出した丘陵の頂部に位置する。西へは緩やかに傾斜し、東側は平坦面が続く。東へしばらく行くと谷が入り込んでやや急な傾斜面を形成している。北側にも東西に谷が入り込んでおり、その谷の対面(北側)には、昨年度に調査した杉洞1号墳が立地している。杉洞1号墳と蓮野1号墳は谷を挟んで対面で立地している。

丘陵の頂上部は比較的平坦であるが、この平坦な部分の西南縁に墳墓が構築されている。西の谷からは見上げるような位置にあり、山の頂上部に墳墓が位置することがはっきりと見える立地である。主軸はほぼ南北軸である。

**墳丘の現況** 墳丘の東裾部は隣地との境界となっており、U字側溝が敷設されている。側溝敷設時におそらく墳裾を削っており、突出部東側面には一部地山岩盤が露呈する箇所もあった。主丘部については西から北の側面の土が大きく抉り取られて崖状になっている。かなり高低差もあるため、土取りだけではなく、切り通しのように人工的に開削した印象を受ける。昭和50年代頃までは古墳に隣接して数件の民家があったと聞く。昭和45年刊行の『富加村の古墳』では「多少削り取られ」程度とあるが、現状は多少の縮小を超えている。刊行後にも人為的に掘削されたと推定される。古墳の存在を周知するための分布調査と『富加村の古墳』の刊行であったが、調査成果の普及が浸透しなかった事は重ねて残念である。調査と普及活動は両輪の事業として展開することの重要性を思い知らされる。

墳丘の北北西側には標高90.2mの高まりがある。これは開削を免れた丘陵地の残りと考えられるため、本来は墳頂部94.0mから北北西の高まり(90.2m)までは緩やかに傾斜した地形であったことが推測できる。

現況地形測量図(図30)からも突出部の前面から西側面は比較的良好な状態で残っていることが想像できた。特に突出部のコーナー部分は測量図からも形状がはっきりと判読できる。

以上の点から西側面の調査に重点を置くことで墳丘のおおよその形や規模を推定できると考えてトレンチを設定した。

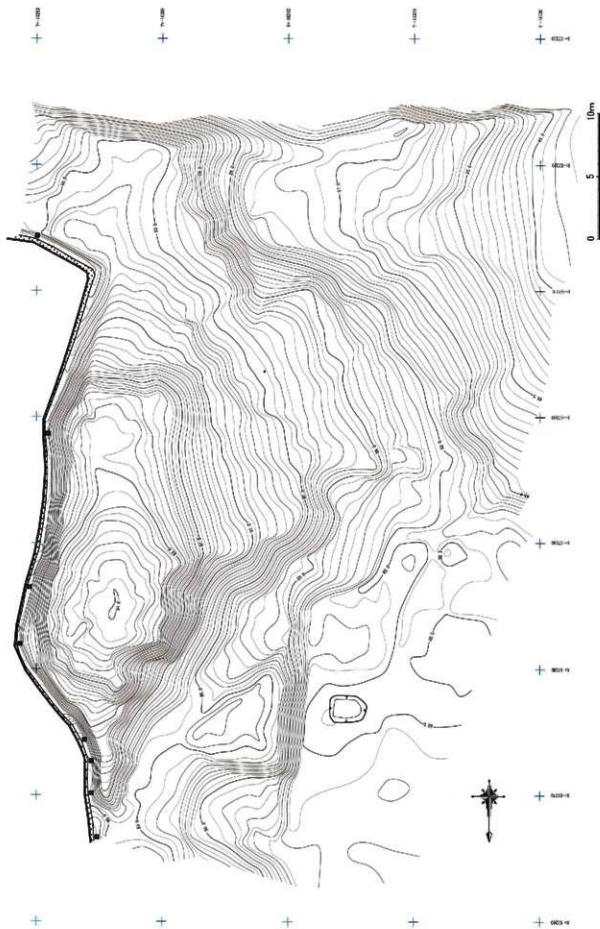


図30 通野1・2号墳現状地形測量図 (1:300)

墳形については、前述したとおり昭和45年の今よりも損壊が少ない時点において「前方後円墳」と認定されている点を考慮し、主丘部は円形の可能性を第一に考えて調査に当たった。

**墳丘の二次利用（蓮野1号墳と2号墳）** 蓮野古墳は、当初の墳丘築造から年月を経て墳頂部に横穴式石室が構築されていることが判明した。前者を1号墳、後者を2号墳として判別することとした。

## 2 調査の方法

発掘調査はトレンチ調査により実施した。基本的には墳丘端部が残存している可能性が高い主丘部北側、突出部南側、突出部西側にトレンチを配置することで規模についての情報を抽出することとした。前年度に実施した第1回検討委員会では、①部分的に断ち割って盛土の情報を抽出する事、②主丘部の墳頂部において墓壙の検出を試みる、③主丘部と突出部の関係が分かるように連続させたトレンチを設定すること、④くびれ部を面的あるいは数本のトレンチを入れて形状を確認すること、との指導を受けた。これを踏まえてトレンチを設定した。

墳丘南北を縦断するように1トレンチを設定し、これに直交するように主丘部に2トレンチ、突出部に3トレンチを設定した。1トレンチは延長が長いので、2トレンチとの交点までを1トレンチ北、そこから3トレンチとの交点までを1トレンチ中央、それより南を1トレンチ南と区分した。墳頂部に立木があるため、1トレンチ北は食い違いとしたが、断面図は連続するように設定した。

1トレンチは墓壙確認も期待しての設定であるため主丘部の現況墳頂平坦面の中心部を通るように設定した。しかし墳頂部において、二次利用である7世紀後半の横穴式石室を検出したため、本来の墓壙の特定が困難になった。

2トレンチは、後世の削平（擾乱）部分を含めてトレンチを設定した。1トレンチ北・南と3トレンチは盛土の情報と、構築方法についての情報を抽出するため一部を築造基盤層まで掘り下げている。

くびれ部から突出部西墳裾については、形状を捉えることを優先して5～7トレンチを設定した。

平成30年2月14日に開催した第2回検討委員会での調査中の現地視察における指導・指摘を受けて、8トレンチの新設と2トレンチの拡張を実施した。

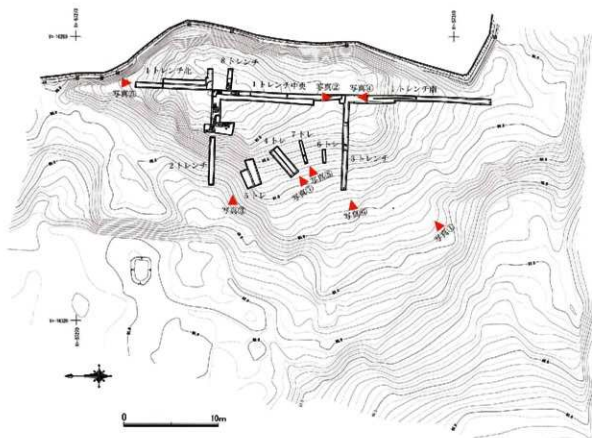
調査に入ると盛土内から土器片が出土し、それらが東海地方の土器編年という週間式期の古い段階と思われる時期のものであり、杉洞1号墳と同様の状況がみられた。また突出部の1トレンチ南と3トレンチにおいては土塊積みの良好な痕跡を確認した。これについては平成30年10月31日に土層の剥ぎ取りを実施した。剥ぎ取ったサンプルは現在富加町郷土資料館にて保管している。

調査面積は合計55.5m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

出土遺物は、トータルステーションを用いて出土地点の国土座標を測定記録した。

調査地内の樹木については一部測量の障害になるものは伐採したが、基本的には伐採せず残した。

発掘調査は全て人力により実施した。発掘調査は平成29年11月9日に開始し、平成30年3月12日に終了した。ただし3トレンチの器台出土箇所と1トレンチ南の土塊積みに関する部分は、若干の検討を要するため埋め戻さずに残した。最終的に全ての埋め戻しが完了したのは平成30年11月15日であった。現地説明会は平成30年2月25日（土）に開催した。



写真① 調査前風景



写真② 1トレンチ南



写真③ 2・5トレンチ



写真④ 1トレンチ中央



写真⑤ 1トレンチ北



写真⑥ 3トレンチ



写真⑦ 4トレンチ



写真⑧ 7トレンチ

図31 蓮野1・2号墳トレンチ配置図 (1:400)

### 3 基本層序

墳丘の現表土層（Ⅰ層）、墳丘から流出した土（Ⅱ層）、墳丘築造にともなう盛土（Ⅲ層）、築造時の基礎面となっている丘陵上堆積物（Ⅳ層）、凝灰岩の岩盤である地山層（Ⅴ層）となる。

盛土層（Ⅲ層）は、墳丘構築のための盛土（Ⅲ-1層）と基礎面が低い谷側のレベルを周囲の標高に揃えるために嵩上げた造成盛土（Ⅲ-2層）に分けられる。Ⅲ-1層は褐色粘質土が主体、Ⅲ-2層は黒色土が主体で土塊積みによる構築が見られる。

築造基礎層（Ⅳ層）は褐色砂質シルト土である。凝灰岩である地山岩盤層（Ⅴ層）の風化土層と考えられる。これが盛土においても用土として使われている。

### 4 各トレンチ調査の成果

#### (1) 主丘部の調査

##### ① 1トレンチ北の調査（図32）

現況測量図から仮に設定した主軸に沿って設けたトレンチの墳頂から北端までを1トレンチ北とし、幅10mのトレンチを設置した。墳頂部は墓壇を破壊しないように半分のみを深く掘り下げた。北の墳丘斜面部分については幅50cmとして墳丘盛土を断ち割った。盛土構築方法や墓壇に関する情報も得ることを期待したトレンチである。

葎石や埴輪列などの外表施設の確認は無い。

**墳丘北側裾部の様相** 盛土は黒色土と褐色土、暗褐色土が互層状になっている。図32土層断面図の最下層39層が地山であり、その上に堆積する黒褐色土の水平堆積38層が旧表土であり、築造基礎層と考えている。37層と38層はいずれも黒色土で非常に似通った土である。おそらく旧表土の表面の土を掻き寄せ最下層の盛土層に仕上げたため一見すると段状になったと推測する。さらにその上に褐色土と黒色土を重ねて基礎を造った後に、盛土33層を盛り付けて墳丘裾部を拡張して整形している。大きな単位の32層で全体を整形しているようである。

**1号墳旧表土と2号墳掘方及び盛土の関係** 遡野1号墳は、墳丘が築造された後に二次的に横穴式石室が築かれている。図32土層断面図の13層は暗褐色砂質土であるが、ほぼ水平に傾斜部まで続く堆積である。13層と接する11層は黒色土であり、14層と12層にも土質の違いがある。13層が遡野1号墳の墳頂表土層で、その表土層が断絶する部分13層から2号墳の石室掘方、そして13層の上部に堆積する10層が遡野2号墳の盛土である。遡野1号墳の墳頂表土13層と主丘部南斜面の図34D-D'の8層は同質であり、表土層として繋がるものと考えられる。この堆積の切り合い関係が、遡野2号墳を墳丘の二次利用とした重要な根拠である。図32の10層は、1号墳の盛土とほぼ同質であることから、横穴式石室の掘方を掘削した排土をそのまま利用していると思われる。

経過を整理すると①遡野1号墳が構築されて年月を経て墳丘表面が土壌化し表土が形成された後、②横穴式石室の掘方が掘削され石室が構築される（2号墳）。掘方掘削の排土（つまり1号墳の盛土）を2号

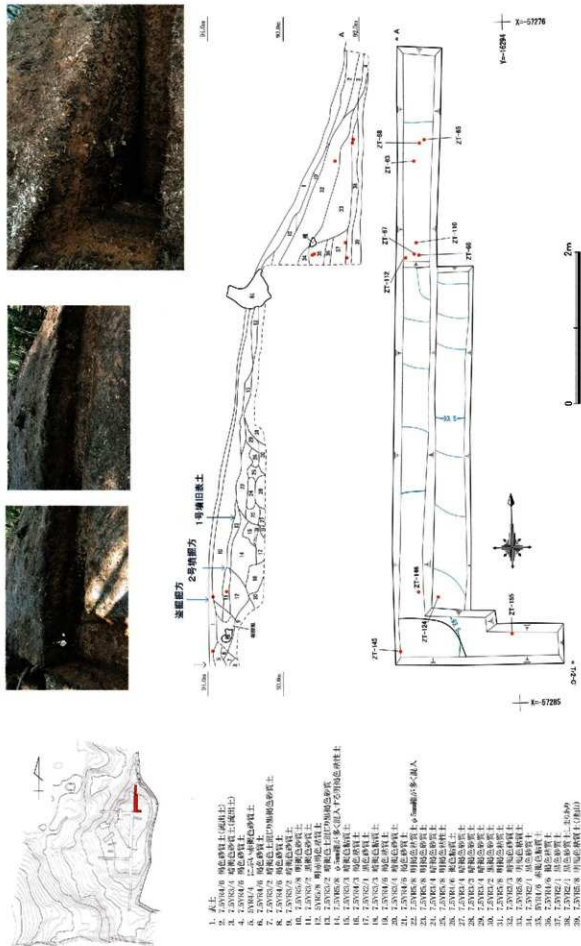


図 32 蓮野1・2号墳1トレンチ北側測図(1:50)

墳の墳丘盛土に利用する。この時に1号墳の表土が2号墳の盛土に埋没する。③横穴式石室を狙った盗掘坑が掘削される。

**築造基盤層と盛土用土** 墳丘基盤層は旧地表と考えた38層である。上述したとおり、37層は周辺の表土を整地して盛土最下層に旧地表由来の黒色土を水平に盛土している。下層ほど黒色土系を多用し、上層は褐色土が多くなる。用土の使い分けを行っているのだろう。

1トレンチ北で確認された諸属性については以下のとおりである。

- 【1号墳】 ・築造基盤面の高さ・・・標高92.2m  
 ・墳頂部の高さ・・・標高約93.8m  
 ・盛土の高さ・・・約1.4～1.6m  
 ・墳端部の高さ・・・標高約92.0m

## ②蓮野2号墳 横穴式石室について (図33・35)

前項にて述べた通り、蓮野1号墳の墳頂部には二次利用の横穴式石室が構築されていた。1トレンチ北から2トレンチ、1トレンチ中央にまたがって検出しているため、ここで触れておく。

**石室について** 開口部を西に向けた玄室に短い羨道が付く横穴式石室である。石材はチャート石である。2トレンチと1トレンチで石材が並んで検出され、石室掘方も確認できたため検討委員会へ指導を仰ぎ、羨道部の拡張と奥壁の確認トレンチ(8トレンチ)を追加した。8トレンチにて奥壁の並びを、羨道部の拡張で閉塞石と思われる石材の積み上げを認めたため横穴式石室と確定した。また、側壁の崩れが認められるのと、盗掘坑と考えられる掘り込みも確認されており、かなり損壊を受けた石室である。

玄室の両側壁が南方向に崩れている。盗掘時の天井石を外す際に、側壁がずれたのだろうか。天井石と思われる石材は周辺を含めて残存していない。側壁の石材は20～30cmの人頭大程度で、天井石を架構するには側壁の石が貧弱にも感じるが、木蓋の痕跡は確認していない。奥壁は側壁よりもやや大きな石材を使用している。

側壁の断面図(図35石室北側壁断面図)をみると、玄室の入口と奥側で高低差がある。玄室入り口の側壁は抜き取られた可能性もある。

羨道側壁は1段のみで、南側は確認できなかった。羨門で外へ広き、外護列石へ繋がっていく。

トレンチ調査であるので全体プランは推定であるが、玄室長は約4m、玄室幅は約1.4m、羨道長は約1mと推定する。羨道と玄室の接合部で、羨道側の石が内側へ入っており、これを評価すれば袖を持つ石室である。片袖か両袖かは調査の都合上、判明しなかった。

今回の調査では石室の検出と掘方の確認のみを実施し、石室内の埋土については掘削せずに埋め戻している。

**石室の掘方(墓塚)について** 1トレンチ北と中央において石室の掘方(墓塚)と思われる掘り込みを確認した(図32の12層)。1号墳の墳頂部旧表土と思われる堆積(図32の13層、図34の8層)を掘り込んでいる。石室掘方は、側壁あるいは奥壁から40～70cm程度離れており、構築する石室よりもやや大きな掘方を用意している。残存する側壁から考えてそれほど大きな天井石は架構できないであろうから、側壁と天井石のほとんどが掘方に内包されるような形であったと推定できる。マウンド用の盛土は少量であり、掘方(墓塚)を掘削した廃土で足りたと推定される。



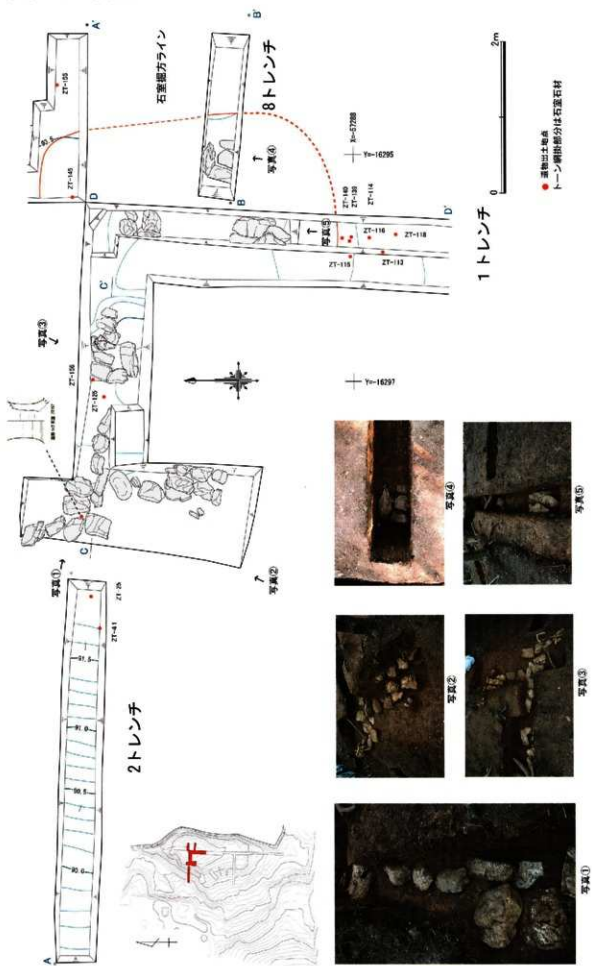


図33 瀬野1・2号墳2トレンチ及び2号墳石室付近実測図(1:50)



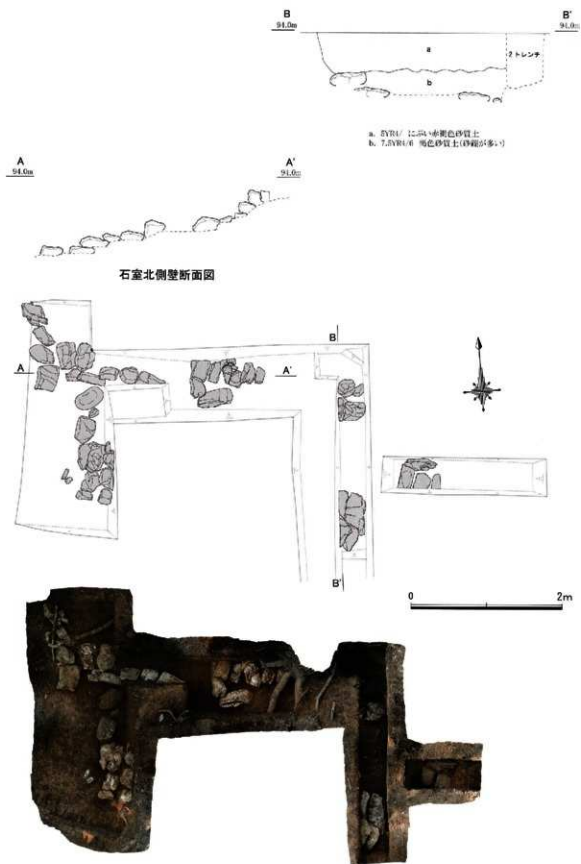


図35 石室実測図 (1:50)

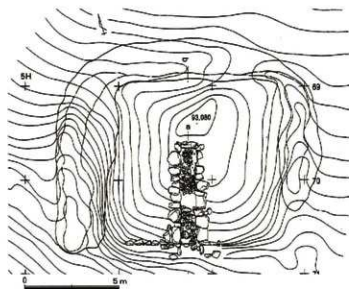


図36 蘇原8号墳 (1:200)

**出土遺物と築造時期** 羨道部側壁において美濃須衛斎の平瓶頸部(図52の12)が出土しており、石室の構築年代を推定する手懸かりである(註1)。美濃須衛斎の成立は古くてもTK209以降であり、石室もそれ以降の7世紀代を推定する。近隣での類例として蘇原東山8号墳(各務原市)を挙げておく(註2)。石室の規模や、丘陵地に単独で築かれる点、短い羨道から外護列石へ繋がる点など共通点が認められる。蘇原東山8号墳では美濃須衛斎後半の須恵器が石室内より出土しており、7世紀後葉の築造と推定されている。蓮野2号墳について

も推定される石室の形態や規模、出土須恵器などから考えて同様の7世紀後葉の築造と考えておきたい。

**床面と側壁高について** 残存の側壁及び奥壁の検出でおおよそ掘削を止めているので、床面の状況は不明であるが、羨道入口部分の標高から床面は標高92.8～93.0mあたりと推定できる。奥壁部分の石材の標高が約93.2mである事を考えると、これらが最下段の石の可能性が高い。側壁の段数は3～4段と推測され、玄室高は1m程度の非常に小規模な石室と考えられる。

蓮野2号墳の諸属性については以下のとおりである。

- 【2号墳】
- ・玄室長・・・・・・・・約4m
  - ・玄室幅・・・・・・・・約1.4m
  - ・羨道長・・・・・・・・約1m
  - ・床面の高さ・・・・・・推定92.8～93.0m

### ③1トレンチ中央の調査(図37・38)

1トレンチ中央は蓮野1号墳の主丘部から突出部への接合部分に位置し、蓮野1号墳の主軸に沿ったトレンチである。幅1.0mのトレンチであるが、東側半分は断ち割って盛土の状況を確認した。主丘部と突出部との関係を確認することという第1回検討委員会の指摘を受けて、一部分は深く断ち割って盛土の状況を確認した。

**1号墳頂部の旧表土と2号墳盛土流出土** 盛土中にみえる黒色土系の水平堆積である図37の8・9層については1号墳の旧表土の残存と理解している。9層の上には褐色土3層があるが、同質の土は1トレンチ北にもみられたものである。2号墳の石室構築時に1号墳を掘り込んだ際の廃土であり、構築後に盛土に利用した土が流出して堆積したものである。

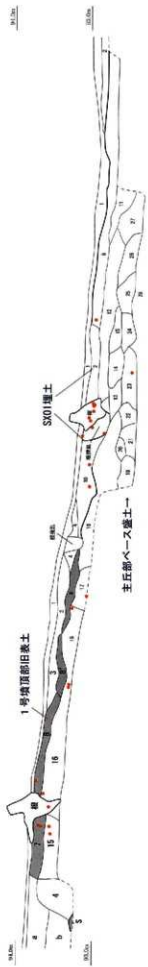
**主丘部盛土と突出盛土の前後関係** 標高92.4m付近で明褐色粘性土(28層)を面的に検出した。当該層と同質の土を1トレンチ南において検出しており、盛土工程の区切りの土層と考えた。この明褐色粘性土(28層)の上部に主丘部側から順に19～27層が規則的に積まれる。1トレンチ北で検出した基盤造成面の標高は92.2mであることから考えると、この盛土の列はおそらく主丘部のベースとして全



- 21. 7.5.2013.4 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 22. 7.5.2013.5 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 23. 7.5.2013.6 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 24. 8.13.17.5 所収伊勢瓦片(土層) 伊勢瓦片
- 25. 7.5.2013.7 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 26. 7.5.2013.8 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 27. 7.5.2013.9 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 28. 7.5.2013.10 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)

- 11. 7.5.2013.3 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 12. 7.5.2013.4 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 13. 7.5.2013.4 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 14. 7.5.2013.4 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 15. 7.5.2013.4 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 16. 7.5.2013.6 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 17. 7.5.2013.6 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 18. 7.5.2013.6 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 19. 7.5.2013.6 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)
- 20. 7.5.2013.4 埋蔵品(土) 黒褐色土(土層)

- 1. 表土
- 2. 赤褐色土
- 3. 赤褐色土
- 4. 赤褐色土
- 5. 赤褐色土
- 6. 赤褐色土
- 7. 赤褐色土
- 8. 赤褐色土
- 9. 赤褐色土
- 10. 赤褐色土



SX01 (8世紀後葉)



図 37 遊野古墳1トレンチ中央部(前方部埋積)平面図・土層図 (1:50)



図38 主丘部と突出部の取付部分土層断面写真

体に敷かれた盛土と考える。主丘部ベース盛土は、突出部まで連続して施工され、その上部に主丘部盛土（18層以上）が築かれている。12～15層は最終的な墳形を整えるための調整用の盛土であり、11層が仕上げの盛土と考えられる。

以上の点から推定すると、突出部の築造が先行したと考えられる。また、突出部の築造時に主丘部の土台築造のための盛土を連続して行っている可能性が高い。突出部から連続する土台の上に主丘部が築造されたと考えれば、土層の解釈と矛盾無く説明できる。こうした築造工程には元々の旧地形が関係している。旧地形はおそらく南へ傾斜しており、徐々に傾斜がきつくなっていたと推測できる。旧地形の低い方に突出部を造り出しているため、いわば嵩上げの様な状況となる。これで主丘部の基盤に近い高さまで嵩上げて土台を形成し、全体を整形した後に主丘部の築造に取り掛かるというのが基本的な工程だと考えられる。

**用土について** 突出部下層には黒色土の塊状の土層（13・15・19～23・27）が多い。これらは盛土用に運搬された単位を反映していると思われる。上層及び主丘部には、こうした塊状の盛土が少なく、明褐色や褐色の比較的大きな単位の盛土が多くなる。施工順に用土の選択を行っている状況を示していると思われる。突出部のトレンチ最下層で検出した明褐色の粘性土は非常にしまりが強く、広い面を覆っている。地山由来の凝灰岩の小礫も多く含むことから、地山の凝灰岩風化土層から取り出した用土であると考えられる。

**SX01**について 1トレンチ中央の真中あたりで須恵器片が集中する箇所があった。須恵器片は2層あるいは根の攪乱土に包含されている。また座標点取上遺物 ZT-127～135は接合し、須恵器の高台坏(図53の15)であった。明確な掘り込みは確認できないが、何らかの人為的な痕跡と理解してSX01とした。高台坏は美濃須恵器編年Ⅳ-3期、8世紀後葉の年代が与えられる。

1トレンチ中央で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・主丘部墳端部の高さ・・・標高92.5～92.8m
- ・突出部墳頂部の高さ・・・標高約92.7～92.9m

## (2) 突出部の調査

### ① 1トレンチ南の調査 (図39～45)

1トレンチ北・中央からの延長上に位置し、3トレンチとの交点から南側を1トレンチ南として調査を進めた。幅1.0mのトレンチを設定し、突出部の前面の墳丘端部の特定と盛土構築方法に関する情報を抽出することを目的としたトレンチである。また、墳墓周辺の堆積状況や遺物の分布状況を把握するために、1トレンチ南を南へ延長した。1トレンチ南の総延長は38mとなる。

表土と流出土と思われる土を除去した後に東半を幅50cmで断ち割り掘削し、1.1m程度下げたところで方形の遺構プランを面的に検出したため、西半も拡張して検出作業に移った。方形プランは列になって確認されたため、3トレンチも同様に下げて面的に迫った。これにより列に並ぶ事が確認でき、土塊の可能性が想定されたため、1トレンチの北側約2.5mはそのまま残して、そこから墳端部までは断ち割ることにした。これにより断面形で土塊の確認を行うこととした。

葦石や埴輪類などの外表施設の確認は無い。

**堆積と盛土の区分** 1トレンチ南の土層断面をみると、大きく3つに区分できる。

区分A：1～23層までで、盛土単位の傾きが南下がりとなっている。

区分B：24～68層までで、盛土の単位がウロコ状で北上がりに堆積している。

区分C：69層以下は基本的に水平に近い堆積である。

AとBの間には風化凝灰岩を含む明褐色の粘土(24層)が水平に堆積しており、ここで明確に工程を分けていることが分かる(図41)。Bの上面部分である24層上面での標高は約92.0～92.2mのラインであり、これは1トレンチ北で確認した築造基盤とほぼ同じレベルになる。そう考えると区分Bの盛土が完了した時点で、地形は北から南へほぼフラットになっている可能性が高い。区分Bはそれを意図しての盛土工程である可能性が考えられる。

区分Aは墳形を整える整形の盛土と考えて問題ないだろう。区分Cについては盛土であるか下層遺構であるかが若干の問題点である。

**土塊積みについて** 区分Bは基本的に「土塊」の表土積み換えを用いて盛土している。現地表面から1m程を掘り下げた所で、長方形の土塊が連続して並ぶ様子を平面検出した。切り合いから土塊は、北から南へ列になって並べている状況が観察できた。

土塊の平面的な大きさを計測すると平均値で概ね45cm×60cmであった。土塊列を断ち割ったB-B'断面で厚さを計測すると平均で12cmであった。土圧による圧縮を受けている事を考慮すれば、およそ





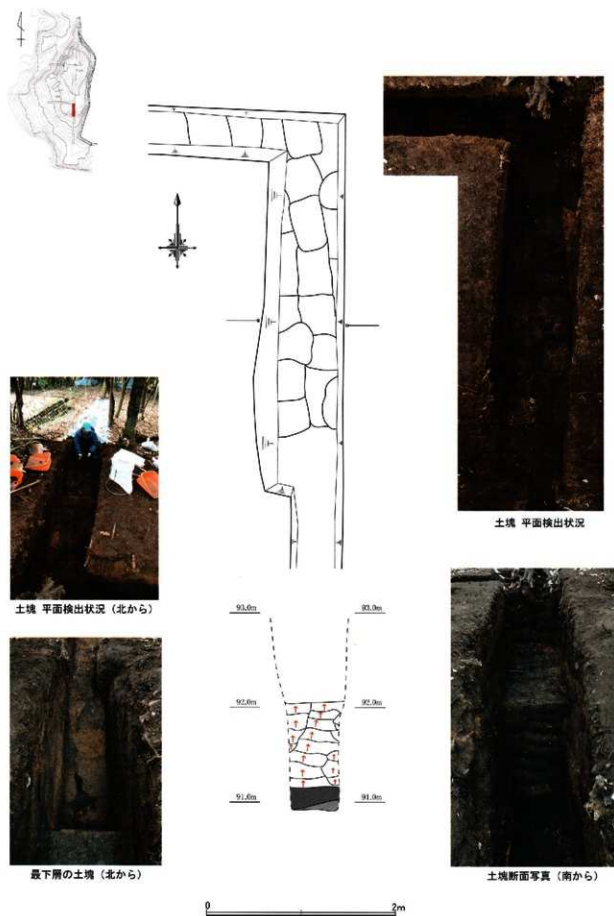


図40 杉洞1号墳3トレンチ平面図・土層図 (1:40)

40cm×55cm×15cmの扁平な土塊を切り出して利用している推測される。

B-B' 断面を観察すると、土塊の端部を少し重ねながらジグザグに交差して積んでいることが分かる。B-B' 断面から8～9段を積み上げて区分Bを形成していることが分かった。

土塊は上部が褐色土で下部が黒色土であり、層の境目がグラデーションする。平面形は概ね隅丸長方形で、土質は全体にしまりが弱く密着して積まれている状況から土壌とは想定し難い。この状況は、草の根が張った状態の旧表土部分を鋤状の農具で切り取るように掘削し、そのままブロック状で運搬して、表裏をひっくり返して利用したものと推測する。

土塊は、区分Bと区分Aで確認できる。区分Bではほとんどが表土をひっくり返す逆位積みである。区分Aでは、正位で積むのがみられる(図41)。土塊を2・3段積んで40cmほどになった段階で明褐色の粘土を敷いている。明褐色粘土は土塊に密着している。

土塊は基本的に北から南へ積み重ねているが、突出部前面の墳端には土手状に土塊を積み重ねている。土手状に積んだ土塊は59・60・65・66層であり、内側から外側へ土塊を概ね半分ほど重ねながら外へ土手状に盛り上げている。

以上の観察から、次の通り区分Bの工程を復元する。

- ①突出部の外周に土塊を用いて土手状に盛土する。
- ②次に横方向(主軸直交)へ数列ずつ土塊を重ねながら、これを縦方向(主軸並行)に広げる。
- ③これを何度も繰り返しながら墳丘を盛り上げてく。
- ④3段ほどを積み重ねた段階で、明褐色粘土を面的に敷く。
- ⑤さらに②と同様の方法で土塊を3段ほど積み重ねて、明褐色粘土を面的に敷く。この段階で、主丘部の基盤造成面とほぼ同じレベル(約922m)となったと考えられる。

区分Bの土塊は基本的に南が上がるように積まれている。これは盛土の初段階において周縁に施工した土手状盛土によって傾斜が規定されたと考えられる。意図的に最初に周縁部を盛り上げて傾斜を付けているのではないだろうか。これは、区分Bの最終的な仕上がり形において、周縁部がやや上がるような皿状になる事を意図的に行っている可能性がある。このような積み方とする場合、下層の堅穴状の遺構のような掘り込みが有効であるのかもしれない。

**盛土下部(区分C)の落ち込み「堅穴状遺構」について** 区分Cの堆積は水平堆積であるものの、落ち込み状の傾斜をもち、深さ30～40cmの掘り込み状になった部分に黒褐色土69・70層が堆積している。今回の調査においては便宜的に「堅穴状遺構」としたが、明確な掘り込みは確認できない。

75層は地山である風化岩盤層に似た明褐色土であり地山の可能性があるが、71～74層からも土器片が出土したことを考えると土手状の盛土の可能性もある。71層以下を当初は地山であると考えたが、断片割トレンチにおいて土器片(ZT83)が出土したため人工の堆積と判断した(図39)。

落ち込みの底面は地山の風化岩盤層に至るが、この面が被熱して炭化物や焦土が出土しており(図41写真3)、「火焚きの痕跡」と推定した。被熱面は底面だけで無く、72層にまで及ぶ。

区分CとBの堆積が一連のものであるかどうかは、本トレンチの堆積状況からは確認できなかった。しかし、土塊の「積み始め」(図39断面図太線)である土手状盛土の位置が堅穴状遺構の肩部にあたり、下層黒色土(69・70層)の収斂する位置に合致する点と、堅穴状遺構と区分Bの盛土の範囲がほぼ重なる点には留意したい。一連の造作の可能性は十分考えられる。

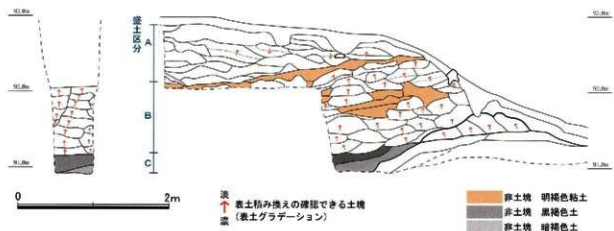


写真1 墳端部土層 (西から)



写真2 墳端部土層 (南西から)

写真3 最下層 火焚き痕 (南から)



写真4 下層土塊拡大 (南西から)

写真5 下層土塊拡大 (北西から)

図41 蓮野1号墳 1トレンチ南 土塊土層図 (1:50)

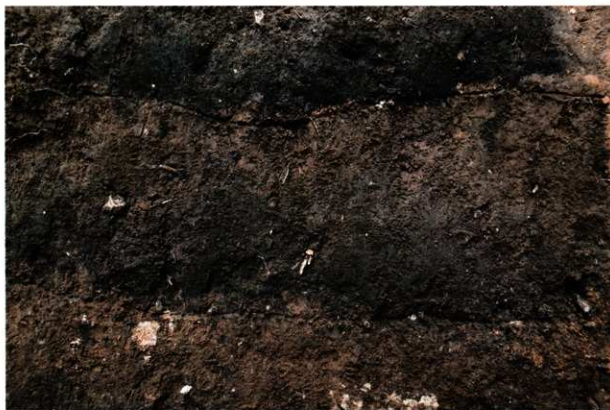


蓮野1号墳 1トレ南土層



蓮野1号墳 B-B' 断面 土壌グラデーション

図42 蓮野1号墳 1トレ南土層写真①



蓮野1号墳 B-B' 断面 土塊グラードション②



蓮野1号墳 B-B' 断面 土塊グラードション③

図43 蓮野1号墳 1トレ南土層写真②



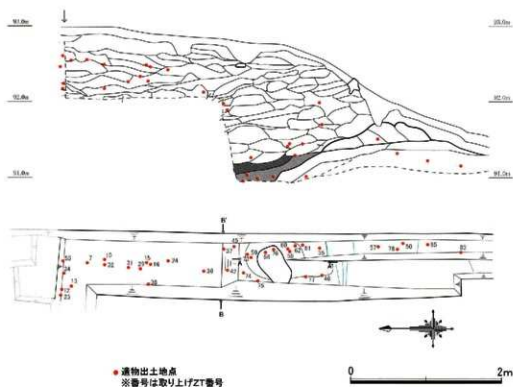


図44 杉洞1号墳1トレンチ南 遺物出土状況図 (1:50)

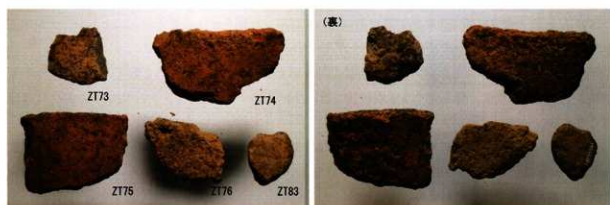


図45 蓮野1号墳 1トレンチ南下層出土土器写真

**遺物の出土状況 (図44)** 遺物は土器片とチャート剥片が出土している。チャート剥片は下層の74層で出土している。下層の壁穴状遺構埋土や74層からも土器片が出土しており(図45)、これらは盛土から出土する土器片とはほぼ同時期のものと考えられる。摩耗が激しく詳細な時期特定は難しいものの、3トレンチから出土した器台と同じ胎土とみられるもの(ZT174・175)があり、所属時期は廻間式期の土器と考えている。

出土の垂直分布を見てみると、区分Aからの出土が若干多い。区分Bにおいては土器の出土はそれほど多くない。土器は黒色土からの出土が多いが、明褐色粘土層からも出土している。



データとして示すことはできなかったが、掘削している感触としては、土塊の中ではなく境目あたりで出土するような印象があった。

出土遺物は小片が多く、接合する例も少ない。実測図化するのも難しいものが多かった。今回、遺物分布図には取り上げ番号(ZT)を付した。保管場所である富加町郷土資料館では取り上げ番号で出納処理しているの、実見をご希望の場合は本報告の取り上げ番号であるZT番号を照会願いたい。

1トレンチ南で確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・突出部墳頂の高さ・・・標高93.0m
- ・盛土区分Bの高さ・・・標高約92.1～92.35m
- ・盛土区分Cの高さ・・・標高約91.2m(下層黒色土の上面)
- ・堅穴状遺構の底部・・・標高約90.9m

## ②3トレンチの調査(図46～49)

1トレンチに直交し、突出部西側面の墳端及び墳丘構築方法を確認するために設定した。当初は幅50cmで掘削したが、トレンチが深くなったために10cm広げている。

**堆積と盛土の区分** 1トレンチ南の盛土構成と同じく、大きく3つに区分できる。

区分A:1～37層までで、盛土単位の傾きが水平か西下がりとなっている。

区分B:38～85層までで、盛土の単位がウロコ状で西上がりに堆積している。

区分C:86層以下は基本的に水平に近い堆積であり、堅穴状遺構の埋土となる。

最下層には堅穴状遺構があり埋土から器台が出土した。器台は週間I式前半の時期が考えられるものであり墳丘に伴うのか否かが課題であった。

区分AとBの境には明褐色粘土が部分的に認められる。明褐色粘土の敷き均しは1トレンチ南ほど面的では無い。区分Bの中間にも明褐色粘土が入っている点は同じである。

区分Bの仕上がり形は1トレンチ南と同じく西端が上がるように施工されており、周縁部がやや上がるような皿状になる。最も高くなる周縁部の標高は約92.3mであり、1トレンチ南の92.35mとほぼ同じである。

土塊の積み始めは、84・85層であり、やはり周縁部に盛土している。また、下層の堅穴状遺構の立ち上がり部分に、土塊の積み始めがくるという点も1トレンチ南との共通点であり、下層の堅穴状遺構と区分B盛土の関連性を窺わせる。

以上の点か考えて、区分Bの構築は、突出部の周縁に土手状盛土を巡らせて大凡の墳形を決め、その中を内から外へ順に土塊を積み重ねていく。約50cm(土塊3段)程度で明褐色の粘土を敷き均して整形し、また同様に土塊を積んでいき最後にまた明褐色粘土を敷き均して完了である。この時に頂部を周縁が高くなった皿状に仕上げる。このいわば土台の上にさらに盛土をして墳形を整形するのが区分Aの工程である。3トレンチでは区分Aの下部では土塊を多用している。この時に、土塊を正位に据えるものがみられるのも1トレンチ南と共通する。

**築造基盤と墳丘端部** 墳丘の築造基盤は88層である築造基盤層(88層)は墳裾の辺りまでは傾斜度30%のややきつ傾斜となっているが、墳丘端部から急に平坦になる。自然地形としては違和感があり、若干の整地を行っている可能性もある。この平坦部の縁に土塊の積み始めがくるので、おそらく

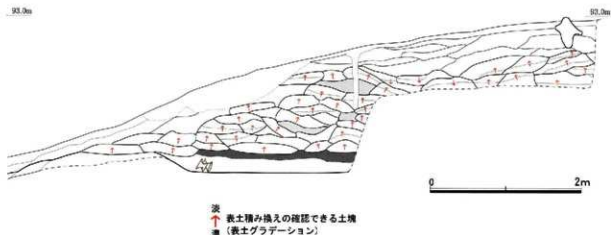


図46 達野1号墳 3トレンチ土塊の向き (1:50)

この変化点あたりが墳端と考えると問題ないだろう。

**黒色土ベルト** 区分Bの下部に黒褐色土の水平堆積(86層)が堆積している。いわゆる黒ボク土と呼ばれるものと類似する。遺跡堆積学の面からのご指導を賜った趙哲済氏に現地を見ていただき、少なくとも縄文時代頃からの長い年月に形成される黒ボク土との指摘を受けた(註3)。実際、当該黒ボク土からは縄文時代に特徴的な石器である「異形局部磨製石鏃」(図52-14)が出土している。しかし、この黒色土の下層にある堅穴状遺構からは廻間1式期前半の「器台」が出土している。自然堆積の層序としては理解できない。この点から、86層の黒褐色土は旧表土由来ではあるが、土としては移動いたもので旧表土ではないと考えられる。つまり下層の黒褐色土は盛土の一種と捉えておきたい。

**土塊について** 断面において土塊の長さを計測すると平均値で概ね50~60cmであった。厚さは平均で15cmほどである。下層はかなり潰れている。全体的にしまりは弱く、踏み固めたような様子ではない。そのためであろうか最下層の土塊はかなり潰れている。土塊の積み方は1トレンチ南と同じく端部を重ねながら交互に位置をずらしながら積んでいると想定される。

**土塊のグラデーション** 3トレンチの土塊にも黒色土から褐色土へのグラデーションが認められた。これら土塊の濃淡方向を図46に示した。

区分Bにおいては検出した土塊は全て逆位となっていた。つまり草の根が張った状態の旧表土部分を鋤状の農具で切り取るように掘削し、そのままブロック状で運搬して、表裏をひっくり返して利用したのだろう。区分Aでは正位の土塊も見られ、上層部分は土塊以外の土で盛土して墳形を整形している。

**下層の堅穴状遺構と器台の出土状況** 築造基盤層88・90層を掘削し堅穴状に掘り穿めた遺構である。底部は平坦で立ち上がりは非常に緩やかである。貼床と認められる堆積や甕溝・柱穴などの遺構も無かった。埴土はやや明るい黒色土系で、ほぼ単一の土である。ちなみに1トレンチ南との土層の対応関係であるが、86層→69層、87層→70層に対応すると考えられる。標高レベルもほぼ同じである。このうち87層からはほぼ完形の器台2基が出土した(図49)。

器台は、透かし孔3つのタイプで同サイズのものが2つ並んで出土した。堅穴状遺構の立ち上がり際で、やや壁側(西側)へ傾いた状態で出土している。器台の底の一端は堅穴状遺構の底面(地山面)に接

- 1. 赤土
- 2. 7.5V102.4 黒色粘質土
- 3. 7.5V103.4 黒色粘質土
- 4. 7.5V103.5 黒色粘質土
- 5. 7.5V103.6 黒色粘質土
- 6. 7.5V103.7 黒色粘質土
- 7. 7.5V103.8 黒色粘質土
- 8. 7.5V103.9 黒色粘質土
- 9. 7.5V103.4 黒色粘質土
- 10. 7.5V104.1 同色粘質土
- 11. 7.5V104.2 同色粘質土
- 12. 7.5V105.8 同色粘質土
- 13. 7.5V105.9 同色粘質土
- 14. 7.5V102.2 同色粘質土
- 15. 7.5V102.3 同色粘質土
- 16. 7.5V104.5 同色粘質土
- 17. 7.5V102.2 同色粘質土
- 18. 7.5V102.2 同色粘質土
- 19. 7.5V104.3 同色粘質土
- 20. 7.5V102.4 同色粘質土

- 21. 7.5V102.2 同色粘質土
- 22. 7.5V102.2 同色粘質土
- 23. 7.5V102.2 同色粘質土
- 24. 7.5V104.4 同色粘質土
- 25. 7.5V102.2 同色粘質土
- 26. 7.5V102.2 同色粘質土
- 27. 7.5V102.4 同色粘質土
- 28. 7.5V104.4 同色粘質土
- 29. 7.5V102.2 同色粘質土
- 30. 7.5V104.4 同色粘質土
- 31. 7.5V104.4 同色粘質土
- 32. 7.5V104.4 同色粘質土
- 33. 7.5V102.2 同色粘質土
- 34. 7.5V104.4 同色粘質土
- 35. 7.5V102.2 同色粘質土
- 36. 7.5V104.4 同色粘質土
- 37. 7.5V104.4 同色粘質土
- 38. 7.5V102.2 同色粘質土
- 39. 7.5V102.2 同色粘質土
- 40. 7.5V102.2 同色粘質土

- 41. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 42. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 43. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 44. 7.5V105.8 褐色粘質土(下部に黒色土層)
- 45. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 46. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 47. 7.5V102.4 黒色粘質土
- 48. 7.5V105.8 褐色粘質土
- 49. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 50. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 51. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 52. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 53. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 54. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 55. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 56. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 57. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 58. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 59. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 60. 7.5V102.2 黒色粘質土

- 61. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 62. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 63. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 64. 7.5V104.3 褐色粘質土
- 65. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 66. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 67. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 68. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 69. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 70. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 71. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 72. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 73. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 74. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 75. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 76. 7.5V104.4 黒色粘質土
- 77. 7.5V104.4 黒色粘質土(下部に赤土層)
- 78. 7.5V104.4 黒色粘質土(下部に赤土層)
- 79. 7.5V104.4 黒色粘質土(下部に赤土層)
- 80. 7.5V102.2 褐色粘質土

- 81. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 82. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 83. 7.5V104.4 褐色粘質土
- 84. 7.5V104.4 褐色粘質土
- 85. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 86. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 87. 7.5V102.2 黒色粘質土
- 88. 7.5V104.6 褐色粘質土(下部に赤土層)
- 89. 7.5V104.6 褐色粘質土(下部に赤土層)
- 90. 赤土

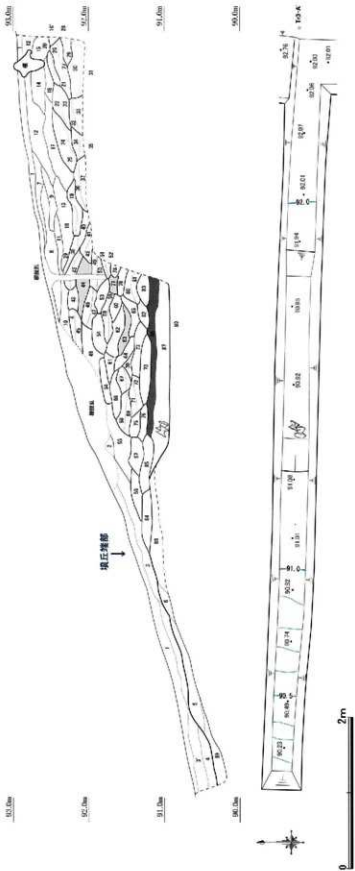


図47 遺野1号墳3トレンチ調査区(1:50)

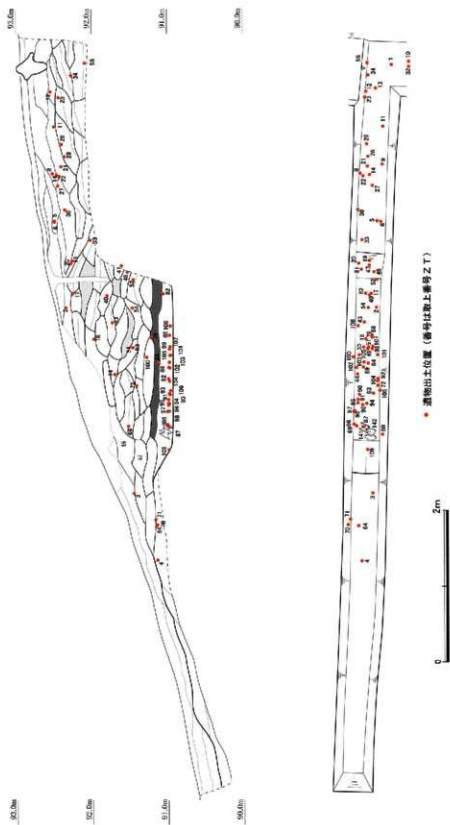
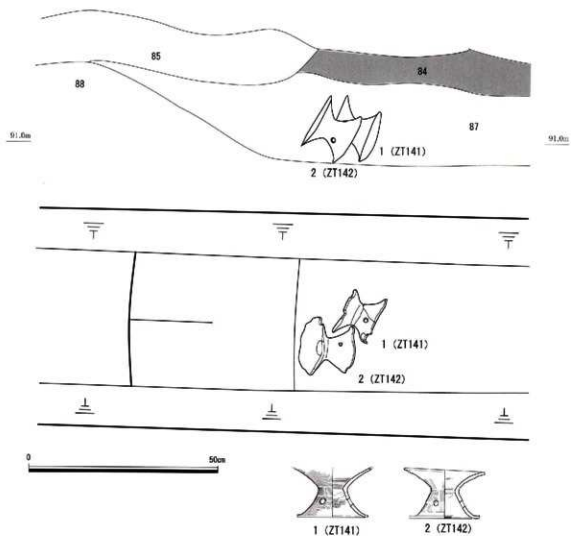


図 48 蓮野 1 号墳 3 トレンチ遺物出土状況図 (1:50)



器台出土状況オルソ図

図49 蓮野1号墳 3トレンチ器台出土状況図 (1:10)

しており、器台の内部や底部にも同様の埋土が入っていた。出土状況から推測すると、本来は直立で据え置かれたものが壁側へ倒れて傾いたようであった。器台の底部周辺からは焦土粒が多く散布しており、周辺で火焚きを行っているのかもしれない。

遺物の出土状況 3トレンチの出土遺物分布を図48に示した。出土遺物の半数以上が堅穴状遺構から出土しているが、土器碎片が多く接合はほとんど無い。次には墳頂部盛土上層からの土器の出土が多い。区分Bにおいては、1トレンチ南と同様に土塊の境から土器片が出土する傾向がある。下層黒色土からは異形局部磨製石鏃が出土している。

3トレンチで確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・突出部墳頂の高さ・・・標高 92.95m
- ・盛土区分Bの高さ・・・標高約 92.0～92.3m
- ・盛土区分Cの高さ・・・標高約 91.2m (下層黒色土の上層)
- ・堅穴状遺構の底部・・・標高約 90.9m

### ③ 3～7トレンチの調査 (図50・51)

蓮野1号墳の突出部からくびれ部にかけての墳丘端部を特定し、墳形を復元する材料を得ることを目的にトレンチを設定した。

1トレンチ及び3トレンチにておおよその墳丘端部を特定することができた。それは現況地形で推定される箇所とそれほど違わない位置で確認することができており、築造当時の盛土状況をよく残す部分であると考えられたため、現地地形から判断して4つトレンチを調査した。

いずれのトレンチからも下層から10cm程度の厚さのしまりの弱い黒褐色土が検出された。黒褐色土上面の標高を北から順に列記すると次の通りである。

5トレンチ (91.75m)、4トレンチ (91.7m)、7トレンチ (91.1m)、6トレンチ (91.55m) であった。ほぼ同レベルである。この黒色土の切れる部分を墳丘端部と推定した。

盛土はほぼ褐色系の盛土であり、1・3トレンチにおいて墳丘上層の盛土で使用される用土とほぼ同質である。一部は盛土の流出土の可能性もあるが、判別は困難であった。

4～7トレンチにおいて葺石や埴輪列などの外表施設の確認は無い。土塊の検出も無い。

4～7トレンチで確認された諸属性については以下のとおりである。

- ・旧地表の標高・・・標高 91.1～91.75m
- ・墳丘端部の標高・・・標高約 90.8～91.5m

### (3) 出土遺物について

1・2は中空器台である。ほぼ同じ法量及び器形で、調整方法も同様である。口径は16cm、底径は14cm、器高は約10cmで、腰部の径は約6cmである。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。腰部内面にはヨコナテが見られる。中空器台は山中式期に多く見られる器種であるが、1・2の透かし孔はやや底部寄りの低い位置に穿孔されており、型式学的には新しい要素といえる。透かし孔の位置も3方向であり、腰部に沈線も巡らない。この点も新しい要素と認められる。

中濃では砂行遺跡SBE04で同様の器台が出土しており(註4)、同遺跡は廻間1式前半までの住居跡



図50 遼野1号墳 4～7トレンチ平面図 (1:50)



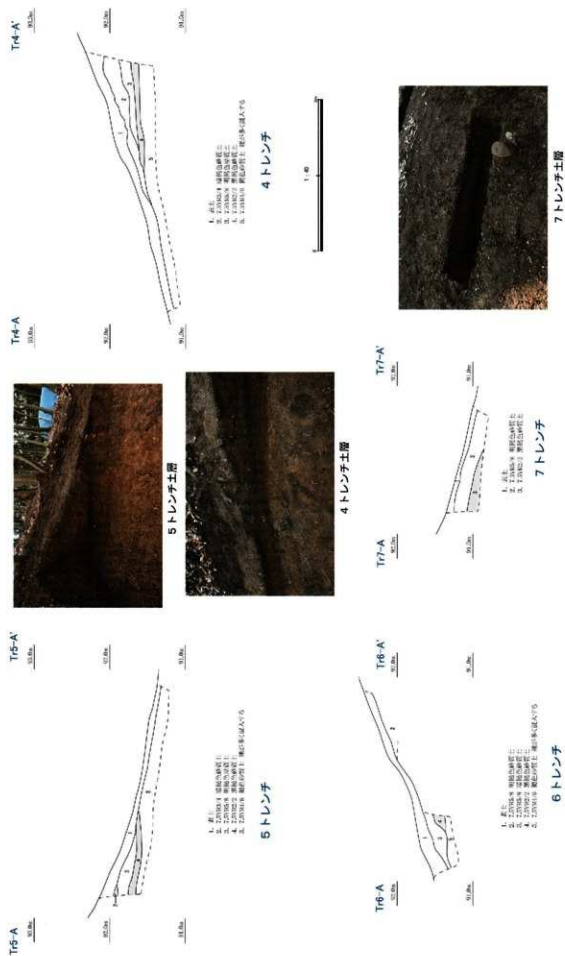


図 51 蓮野1号墳 4～7トレンチ土層図 (1:50)

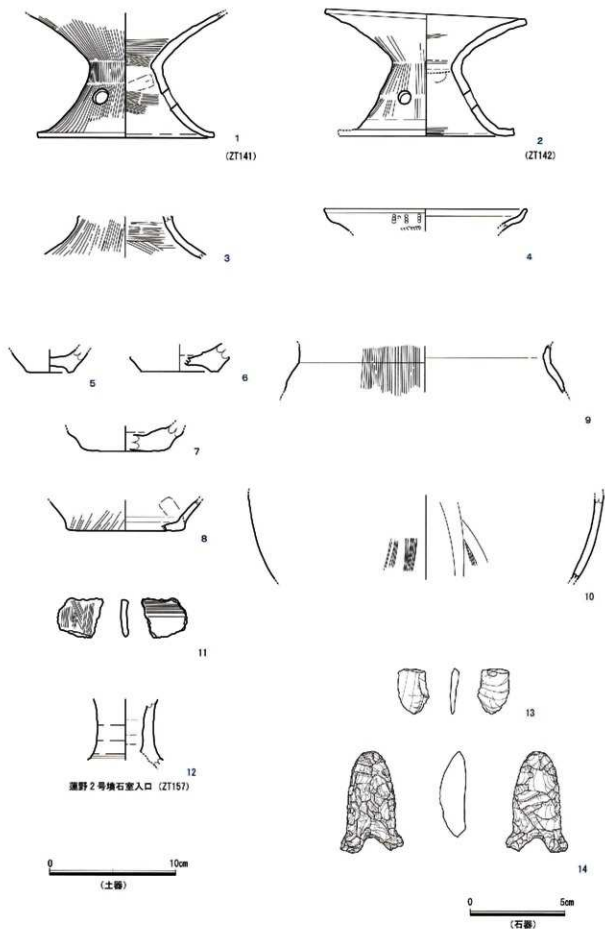
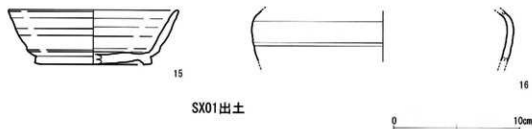


図52 蓮野1・2号墳出土遺物①(土器1:3、石器1:2)



SX01出土

図53 蓮野1・2号墳出土土器②



蓮野1号墳 土層剥き取りサンプル

が存続している。西濃においても養老町の日吉遺跡では寸詰まりで3方向透かし孔の器台は、廻間1式期初期まで残る(註5)。以上の点を勘案して、当該器台についてはやや新しい廻間1式期前半の時期を想定しておきたい。3も器台の脚部付近である。胎土や調整痕も1・2と似ている。

4は加飾壺の口縁部である三連の刺突文が後円端部に施文される。

5～7は壺の底部である。5・6は上げ底状、7は平底である。

8は甕の底部である。底部は小さく平底である。非常に薄手の底部で胎土は白く、在地甕ではないと思われる。近江甕の可能性を想定している。斜め上方向にハケメを施している。

9～11は外面にハケメを施す土器片であり、甕あるいは鉢と考えられる。

12は蓮野2号墳の石室入口の羨門付近で出土した平瓶の頸部である。胎土や焼成などから美濃須衛窯産の須恵器と考えられ事から、7世紀後半の時期が想定される。蓮野2号

墳築造時期は、この平瓶頸部の時期を当てておく。

13はチャート製の剥片である。打面や打点が残っている。チャート製の剥片は何点か出土している。

14は異形局部磨製石鏃である。先端部は丸く鏃としての機能性は低い。非常に厚手で重量感もある。石材はチャート製であり、青と赤の石理縞が斜めに入っている。鏃を作るための素材剥片は、この石理に逆らって剥離していると想定できる。素材としてはかなり大きな剥片を用意しなければいけないはずであり、石理に沿った方が合理的なはずである。おそらく最終的な仕上がりに石理の横縞を入れることが目的ではなかっただろうか。先端及び後縁が摩耗している。

15・16は1トレンチ中央の突出部墳頂にあるSX01の表土直下で出土した。15は高台杯である。底部が下がって高台端部とほぼ同じ位置となり、据えると底が下に当たる。口径も12.5cmと小さく、腰部はしっかりと屈曲する。産地は美濃須衛窯産と考えられる。これらの特徴から8世紀後葉の時期を想定しておく。蓮野1号墳の墳頂部は律令期に至っても墳頂部において人為的な利用があった事を示す資料である。壺と思われる破片もあり、峠の祭祀的な痕跡かもしれないが詳細は不明である。

1トレンチ南B-B'断面において土塊積み部分1.2m×0.6mの土層剥き取りを実施した。剥き取った土層は、富加町郷土資料館で保管・展示している。

報告書	器種	出土場所		層位・遺構	取上番号	取上年月日	標高値(m)
1	器台	Tr3	竪穴状遺構	地山直上	ZT-141	2017/12/27	90.916
2	器台	Tr3	竪穴状遺構	地山直上	ZT-142	2017/12/27	90.925
3	器台	Tr3	傾斜部	盛土	ZT-064	2017/12/6	91.149
4	壺口縁部	Tr1 南	突出部	中層	ZT-059	2017/12/5	91.352
5	壺底部	Tr3	竪穴状遺構	埋土	ZT-062	2017/12/5	91.276
6	壺底部	Tr1 南	突出部	上層	ZT-016	2017/11/24	92.486
7	壺底部	Tr1 北	主丘部傾斜面	上層黒色土	ZT-110	2017/12/15	92.198
8	壺底部	Tr1 南	突出部	中層	ZT-056	2017/12/4	91.574
9	壺	Tr1 北	主丘部傾斜面	上層黒色土	ZT-112	2017/12/18	92.022
10	壺	Tr2	-	盛土	ZT-156	2018/1/16	93.446
11	壺	Tr3	突出部	中層	ZT-043	2017/12/1	91.755
12	平瓶	Tr2	石室羨門付近	-	ZT-157	2018/1/16	93.187
13	剥片	Tr1 南	突出部	上層	ZT-045	2017/12/1	91.735
14	異形局部磨製石蒜	Tr3	竪穴状遺構上面	黒色土	ZT-087	2017/12/14	91.080
15	高台坏	Tr1 中央	-	上層	ZT-127 ~ 132・134・ 135	2017/12/25	93.019
16	壺	Tr1 中央	-	上層	ZT-133	2017/12/25	93.052
-	-	Tr1 南	南側	-	ZT-001	2017/11/16	90.761
-	-	Tr3	突出部	表土	ZT-002	2017/11/17	92.378
-	-	Tr3	突出部	表土	ZT-003	2017/11/20	91.474
-	-	Tr3	西側	表土	ZT-004	2017/11/20	91.129
-	-	P4	-	1層	ZT-005	2017/11/20	92.547
-	-	P4	-	1層	ZT-006	2017/11/20	92.568
-	-	Tr1 南	突出部	上層褐色土	ZT-007	2017/11/24	92.593
-	-	Tr3	突出部	上層褐色土	ZT-008	2017/11/24	92.625
-	-	Tr3	突出部	上層褐色土	ZT-009	2017/11/24	92.652
-	-	Tr1 南	突出部	5層 黒褐色土	ZT-010	2017/11/24	92.557
-	-	Tr3	突出部	上層褐色土	ZT-011	2017/11/24	92.582
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-012	2017/11/24	92.662
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-013	2017/11/24	92.585
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-014	2017/11/24	92.547
-	-	Tr1 南	突出部	上層	ZT-015	2017/11/24	92.496
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-017	2017/11/24	92.272
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-018	2017/11/24	92.076
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-019	2017/11/24	92.289
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-020	2017/11/24	92.305
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-021	2017/11/27	92.466
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-022	2017/11/27	92.427
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-023	2017/11/27	92.471
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-024	2017/11/27	92.358
-	-	Tr2	主丘部	上層	ZT-025	2017/11/27	92.249
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-026	2017/11/27	92.421
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-027	2017/11/27	92.367
-	-	Tr3	突出部	上層	ZT-028	2017/11/27	92.370

表4 蓮野1・2号墳出土遺物台帳①

報告書	器種	出土場所	層位・遺構	取上番号	取上年月日	標高値(m)
-	-	Tr1 南 突出部	上層	ZT-029	2017/11/27	92.337
-	-	Tr3 突出部	上層	ZT-030	2017/11/28	92.269
-	-	Tr1 南 突出部	上層	ZT-031	2017/11/28	92.301
-	-	Tr1 南 突出部	上層	ZT-032	2017/11/28	92.146
-	-	Tr3 突出部	上層	ZT-033	2017/11/28	92.113
-	-	Tr3 突出部	上層	ZT-034	2017/11/28	92.245
-	-	Tr1 南 突出部傾斜面	6層	ZT-035	2017/11/28	91.978
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-036	2017/11/28	92.133
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-037	2017/11/28	92.099
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-038	2017/11/29	92.213
-	-	Tr3 突出部	上層	ZT-039	2017/11/30	92.091
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-040	2017/11/30	91.854
-	-	Tr2 主丘部傾斜面	上層	ZT-041	2017/11/30	91.794
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-042	2017/11/30	91.909
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-044	2017/12/1	91.695
-	-	Tr1 南 竪穴状遺構付近	12層	ZT-046	2017/12/1	91.701
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-047	2017/12/1	91.678
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-048	2017/12/1	91.625
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-049	2017/12/1	91.544
-	-	Tr1 南 竪穴状遺構付近	13層	ZT-050	2017/12/4	91.522
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-051	2017/12/4	91.525
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-052	2017/12/4	91.481
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-053	2017/12/4	91.525
-	-	Tr3 突出部	中層	ZT-054	2017/12/4	91.554
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-055	2017/12/4	92.166
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-056	2017/12/4	91.574
-	-	Tr1 南 竪穴状遺構付近	14層	ZT-057	2017/12/4	91.491
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-058	2017/12/5	91.452
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-060	2017/12/5	91.394
-	-	Tr1 南 突出部	中層	ZT-061	2017/12/5	91.387
-	-	Tr1 北 主丘部傾斜面	上層	ZT-063	2017/12/6	91.267
-	-	Tr1 北 主丘部傾斜面	上層	ZT-065	2017/12/6	92.065
-	-	Tr1 北 主丘部傾斜面	上層	ZT-066	2017/12/6	92.656
-	-	Tr1 北 主丘部傾斜面	上層	ZT-067	2017/12/6	92.628
-	-	Tr1 北 主丘部傾斜面	上層	ZT-068	2017/12/6	92.069
-	-	Tr3 突出部傾斜面	下層	ZT-069	2017/12/6	91.631
-	-	Tr3 竪穴状遺構付近	下層	ZT-070	2017/12/6	91.152
-	-	Tr3 竪穴状遺構付近	中層	ZT-071	2017/12/6	91.162
-	-	Tr3 竪穴状遺構付近	中層	ZT-072	2017/12/7	91.411
-	-	Tr1 南 竪穴遺構	69層	ZT-073	2017/12/7	91.124
-	-	Tr1 南 竪穴遺構	69層	ZT-074	2017/12/7	90.964
-	-	Tr1 南 竪穴遺構	69層	ZT-075	2017/12/7	90.993
-	-	Tr1 南 竪穴遺構	70層	ZT-076	2017/12/7	91.007
-	-	Tr1 南 竪穴遺構	70層	ZT-077	2017/12/7	91.085
-	-	Tr1 南 竪穴状遺構サブトレンチ	下層	ZT-078	2017/12/13	91.329

表4 蓮野1・2号墳出土遺物台帳②

報告書	器種	出土場所	層位・遺構	取上番号	取上年月日	標高値(m)	
-	-	Tr3	突出部	下層黒色土	ZT-079	2017/12/13	91.266
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	中層	ZT-080	2017/12/13	91.312
-	-	Tr3	突出部	中層	ZT-081	2017/12/13	91.209
-	-	Tr3	突出部	下層黒色土	ZT-082	2017/12/13	91.165
-	石器(剥片)	Tr1南	竪穴状遺構サブトレレンチ	下層	ZT-083	2017/12/13	91.126
-	-	Tr3	突出部	下層黒色土	ZT-084	2017/12/13	91.117
-	石器(剥片)	Tr1南	竪穴状遺構サブトレレンチ	下層	ZT-085	2017/12/13	91.180
-	-	Tr3	竪穴状遺構	埋土	ZT-086	2017/12/14	91.078
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-088	2017/12/14	90.979
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-089	2017/12/14	91.000
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-090	2017/12/14	90.999
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-091	2017/12/14	91.039
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-092	2017/12/14	91.002
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-093	2017/12/14	91.024
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-094	2017/12/14	91.016
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-095	2017/12/14	91.038
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-096	2017/12/14	91.036
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-097	2017/12/14	91.051
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-098	2017/12/14	91.013
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-099	2017/12/14	90.975
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-100	2017/12/14	91.307
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-101	2017/12/14	90.973
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-102	2017/12/14	90.979
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-103	2017/12/14	90.964
-	-	Tr3	竪穴状遺構	埋土	ZT-104	2017/12/14	90.967
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-105	2017/12/14	90.945
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-106	2017/12/14	90.984
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-107	2017/12/14	90.959
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-108	2017/12/14	90.943
-	-	Tr3	竪穴状遺構付近	埋土	ZT-109	2017/12/14	91.027
-	-	Tr4	-	1層	ZT-111	2017/12/15	91.591
-	-	Tr1北	主丘部傾斜面	上層黒色土	ZT-112	2017/12/18	92.022
-	-	Tr1中央	-	表土	ZT-113	2017/12/18	93.663
-	-	Tr1中央	-	表土	ZT-114	2017/12/18	93.721
-	-	Tr1中央	-	表土	ZT-115	2017/12/18	93.708
-	-	Tr1中央	-	表土	ZT-116	2017/12/18	93.670
-	-	Tr1中央	-	上層	ZT-117	2017/12/19	93.668
-	-	Tr4	-	4層	ZT-118	2017/12/19	91.795
-	-	Tr4	-	4層	ZT-119	2017/12/19	91.726
-	-	Tr4	-	5層 上面	ZT-120	2017/12/19	91.781
-	-	Tr4	-	5層	ZT-121	2017/12/19	91.664
-	-	Tr4	-	黒色上	ZT-122	2017/12/19	91.653
-	-	Tr1中央	南側	1~2層	ZT-123	2017/12/19	92.915
-	-	Tr1中央	突出部北側	表土	ZT-124	2017/12/21	93.842
-	-	Tr2	主丘部化粧土	上層	ZT-125	2017/12/22	93.633

表4 蓬野1・2号墳出土遺物台帳③

報告書	器種	出土場所		層位・遺構	取上番号	取上年月日	標高値(m)
-	-	Tr1 中央	-	上層	ZT-126	2017/12/25	93.075
-	-	Tr5	-	黒色土	ZT-136	2017/12/26	91.702
-	-	Tr5	-	黒色土	ZT-137	2017/12/26	91.740
-	-	Tr5	-	黒色土	ZT-138	2017/12/26	91.641
-	-	Tr1 中央	主丘部	化粧土	ZT-139	2017/12/27	93.676
-	-	Tr1 中央	主丘部	化粧土	ZT-140	2017/12/27	93.633
-	-	Tr1 中央	主丘部	化粧土	ZT-143	2018/1/9	93.374
-	-	Tr1 中央	主丘部	化粧土	ZT-144	2018/1/9	93.271
-	-	Tr1 中央	突出部北側	上層	ZT-145	2018/1/9	93.863
-	-	Tr1 中央	突出部北側	上層	ZT-146	2018/1/9	93.764
-	-	Tr1 中央	主丘部	化粧土	ZT-147	2018/1/10	93.348
-	-	Tr1 中央	主丘部	上層	ZT-148	2018/1/10	93.362
-	-	Tr1 中央	主丘部	上層	ZT-149	2018/1/10	93.092
-	-	Tr1 中央	突出部	上層暗褐色土	ZT-150	2018/1/12	92.637
-	-	Tr1 中央	突出部	上層暗褐色土	ZT-151	2018/1/12	92.460
-	-	Tr7	-	2層	ZT-152	2018/1/15	91.459
-	-	Tr7	-	黒褐色土	ZT-153	2018/1/15	91.347
-	-	Tr6	-	1層	ZT-154	2018/1/15	91.480
-	-	Tr2	主丘部東延長部	上層	ZT-155	2018/1/16	93.621
-	炭	Tr5	-	下層	-	2017/12/26	-
-	-	Tr1 南	突出部北側	表土	-	2017/11/16	-
-	-	Tr1 南	竪穴状遺構付近	表土	-	2017/11/16	-
-	炭	Tr3	竪穴状遺構	埋土	-	2017/12/13	-
-	-	Tr1 南	竪穴状遺構	最下層 埴山瓦上敷土面	-	2017/12/13	-
-	炭	Tr3	竪穴状遺構	13層	-	2017/12/14	-
-	-	P1	底	1層	-	2017/11/16	-
-	-	P3	-	1層	-	2017/11/21	-
-	-	P4	-	1層	-	2017/11/21	-
-	-	P6	-	1層	-	2017/11/21	-

表4 遠野1・2号墳出土遺物台帳④



## 5 小結

**墳丘の築造方法** 1トレンチの縦断面図を図55に示した。これを基に、まずは旧地形を復元してみたい。主丘部の北側では、1トレンチ北において最下層の黒色土が築造基盤層と考え、標高は92.2mであった。1トレンチ南においては確実な地山と考えられる層の標高が約91.0mであったことから、築造前の旧地形は、北から南へ標高差1.2m程度の緩やかな傾斜地であったと推定できる。そして主丘部を丘陵上部のおそらく最も高いところに、突出部を斜面側の低い方に築造した。これは杉洞1号墳と同様の割り付け方である。

突出部の盛土はA・B・Cの3種類に区分でき、それぞれが工程の区切りとなっていると推定した。盛土区分Bとした土塊積み主体で構築する工程の最終的な標高は、91.1～92.35mであり、主丘部北で確認した築造基盤の標高92.2mと揃ってくる。このことから土塊積みを用いた盛土区分Bは、突出部の嵩上げを目的とした工程でもあると推測できる。このような工程の利点は杉洞1号墳において考察したのと同じで、谷側を盛土で嵩上げし主丘部の底と同レベルに揃えることにあり、これにより主丘部の墳丘下層分の盛土が省略できる点にある。なおかつ断面形が一連の形にできる。これが例えば平坦な場所で築造した場合、突出部の盛土高の分だけ主丘部下層にさらに盛土しなければならない。「傾斜」をうまく使った工法であり、杉洞1号墳と共通する重要な特徴である。

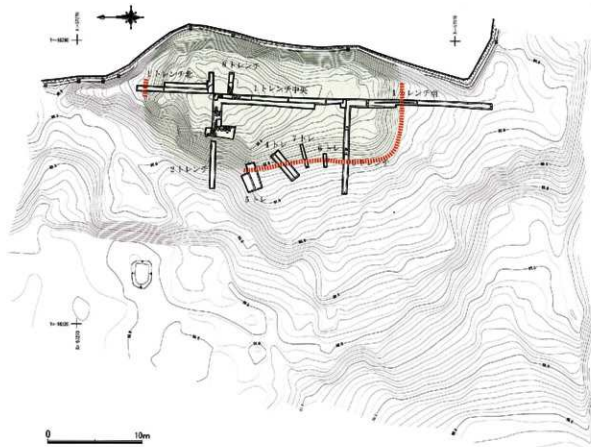
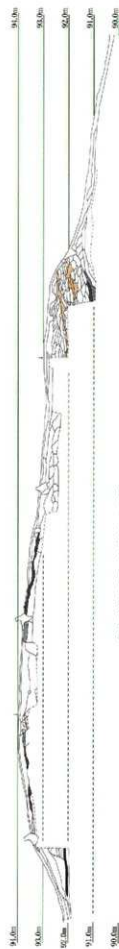


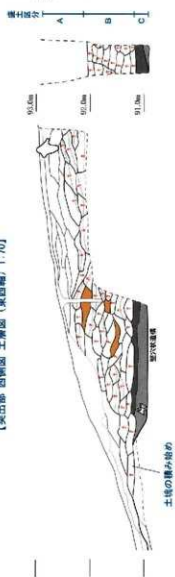
図54 遺野1号墳墳形想定図(1:400)



【埴丘陵断面図（南北軸）1:150】



【突出部 西側面 土層図（東西軸）1:70】



【突出部 前面 土層図（南北軸）1:70】

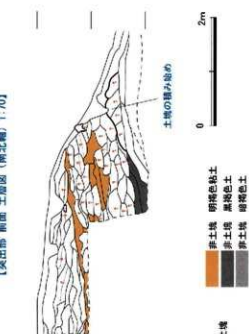


図 55 蓮野 1 号埴 埴丘陵断面図

区分Bの周縁部は20～30cm程高く盛土しており、完成時には真ん中が窪む「皿状」に仕上げられたと想定できる。これは次の工程である盛土区分Aの崩落防止を意図していると考えられる。目的としては土手状盛土と同様の意図があるだろう。

区分Aはまず主丘部を含めて全体にベース土を敷き、その後に主丘部から順に盛土をしていると考えられる。主丘部の盛土方法は今回の調査では確定できなかったが、墳丘端部には土手状盛土がみられず、水平互層に積み上げている。上部では周囲から土手状盛土している可能性もある。

土塊積みは進野1号墳の特徴であるが、突出部のベースを構築する際に多用されている。土塊は単位毎に黒色土と褐色土がグラデーショナルになっており、草の根が張った状態の旧表土部分を鋤状の農具で切り取るように掘削し、そのままブロック状で運搬して、表裏をひっくり返して利用したと推定した。それほど遠くない場所から運搬していると考えているが、古墳を築造する周辺の土を剥ぐのが最も手取り早いだろう。杉洞1号墳も進野1号墳も周辺で旧表土層が確認できないのは、剥ぎ取られてしまった可能性も考えられるかもしれない。その場合、周辺は地山の褐色土が露呈した茶色の丘陵となっていただろう。

土塊積みの表土積み換えの工法は、4世紀後半の津堂城山古墳外堤（藤井寺市）や五手治古墳（羽曳野市）が初現と考えられており、古市古墳群で採用された技術が5世紀に百舌鳥古墳群等へ広がるとされる。そして全国への波及は5世紀末からと考えられている（註7）。

**下層竅穴状遺構と器台の出土状況について** 完形の器台が下層の竅穴状遺構より出土した。同型式・同法量の器台が並んで据え置かれた状況が想定できる。器台の時期は廻間I式前半を想定した。ここで竅穴状遺構と墳墓盛土との関係について整理しておく。

竅穴状遺構の上面には黒色土が堆積し、縄文時代の異形局部磨製石鎌が当該層の下部で出土している。堆積学的にも縄文時代に遡る長い年月を経た黒ボク土の可能性が推察される（註6）。しかし、それより下層の竅穴状遺構からは弥生時代終末期（廻間I式前半）の器台が出土しており、それ以外にも埋土に同時期と思われる土器片が包含されていた。この状況から考えれば、竅穴状遺構上面の黒色土は旧表土とは考えがたい。二次的に運ばれた土と考える方が合理的ではないだろうか。

次に竅穴状遺構と盛土の関係であるが、今回の調査では確実な手懸かりを得ることはできなかった。しかし、竅穴状遺構の立ち上がり部分が墳丘端部とほぼ合致する位置関係であり、突出部と竅穴状遺構が位置的に重なる位置関係になっている。さらに、土塊の積み始め箇所をみると、突出部前面（1トレンチ南）と側面（3トレンチ）の両者において竅穴状遺構の「外縁に接する辺り」という位置の関係が観察される。

区分Bの工程において下層の竅穴状遺構の位置を意識している可能性は考慮に値するが、そう判断するならば、竅穴状遺構が盛土構築にどのような意味があるのかを提示せねばならない。この点については次のように考える。盛土区分Bの完成形は周辺部を盛り上げる「皿状の形」を意図しており、その構築には最下層の土手状盛土によって傾斜を付けている事が重要な要素になっている可能性を指摘した。特に突出部前面（1トレンチ南）では、竅穴状遺構の壁面傾斜があることで、区分Bの周縁上端を上げることが可能になったのではないだろうか。1トレンチ南の竅穴状遺構の外側の土(図39 71～74層)は土器片を包含しており地山では無いことが判明しており、この部分を基底部の土手状盛土と捉えれば、盛土区分CはBの準備工と捉えることも可能である。

堅穴状遺構が基底部であることや、区分Cの堆積状況と土の用法が区分ABと異なる点は、別の遺構と考える非常に重要な要素であるが、全体のプランや位置関係、構築法も考慮に入れ、上記の堅穴状遺構が盛土構築と一連のものとして捉える案を提示しておきたい。

もう一つ重要な点として、突出部の墳丘基底部に土器を据えるという共通の事例が杉洞1号墳と蓮野1号墳の両者において確認された点は留意しておく必要がある。両墳墓には立地や突出部の構築方法において共通性が高く築造母体が同じである可能性は高い。選地や築造工法に共通の習わしをもっており、「基底部土器埋納」もその習わしの1つであるとの捉え方も提示しておきたい。

**蓮野1号墳の墳形について** 各トレンチで検出した墳丘端部の推定点を結んだ墳形想定図を図54に示した。突出部側面の4～7トレンチでは下層に黒色土が堆積している事が判明した。この黒色土が途切れる点に盛土が収束する傾向があるため、それを墳丘端部とした。当該黒色土が旧表土であっても盛土であったとしても墳丘築造に関する情報と考えた。

突出部は隅丸の方形で、くびれ部はほとんど無いと推定される。墳丘の北東にある水路の屈曲はおそらく盛土がしっかり残存していた際の土地境界であり、墳形を反映しているはずである。この水路の屈曲から考えると主丘部は方形ではなく、円形を想定するのが妥当であろう。水路の屈曲を基に円形で想定すると5トレンチで検出した墳丘端部と合致してくる。

以上の点から、蓮野1号墳は全長約28m、直径15mの円形の主丘部に方形の突出部が付く墳形を想定しておく。全長と主丘部ともに杉洞1号墳よりもやや小さい。

盛土の高さは、主丘部で約1.6m、突出部で約1.8mであった。主丘部と突出部の高低差はそれほどなく、約1mほどであった。突出部前面の傾斜はしっかりと傾斜もややきつめである。しかし側面の傾斜は緩やかで、突出部墳頂の角は不明瞭である。傾斜も緩やかで、突出部の横断面はおそらく底辺の長い台形状を呈する。盛土を高く積んでいるが明確な区切りが無く、自然地形からだとしたら墳丘に至る印象があり、杉洞1号墳との共通点でもある。

**蓮野2号墳について** 蓮野1号墳の墳頂部において横穴式石室の側壁と奥壁及び外護列石を検出した。盗掘の掘方と石室の掘方（竊塚）を1トレンチにおいて確認し、石室掘方が墳頂部旧地表と考えられる黒色土層を切っている事から墳丘の二次利用と判断し蓮野2号墳と呼称した。玄室長約4mに1m程度の短い羨道がつく小規模の石室であり、羨道入口から美濃須衛麩産の平飯頭部が出土している事を勘案して7世紀後葉の小規模古墳が二次的に築造されたものと特定した。美濃においては、7世紀後半以降の前方後円墳の築造は認められない点（註8）も、墳丘の二次利用と考える要素である。

蓮野1号墳の墓壇は、2号墳の石室掘方によって損壊されている可能性が高く、今回の調査において2号墳石室が発見されたことにより、それより下部の調査ができなかった。

註

- 1 美濃須衛古窯跡の調査をご担当された渡辺博人氏よりご教授を受けた。
- 2 各務原市埋蔵文化財調査センター 1999『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第26号
- 3 趙氏は、下層の黒褐色土86層は自然堆積の旧表土との見解を示され、下層に器台があるのは、遺構として検出はできなかったが、部分的に掘り込んで掘えた可能性を指摘された。この場合、墳丘盛土と器台の同時性は非常に高くなるが、残念ながら掘り込みの痕跡を見つけることができなかった。また、堅穴状遺構からは器台の他に土器片が面的に出土しており、いずれも器台と同時期のものと考えられたため、86層は動いた土と判断した。
- 4 岐阜県文化財保護センター 2000『砂行遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第65号
- 5 中島和哉 2014『日吉遺跡にみる養老町域の土器様式とその画期』『日吉遺跡発掘調査報告書』養老町教育委員会
- 6 趙哲清氏（大阪文化財研究所）のご教示による。ただし土状洗浄でアカホヤ火山灰の探査をおこなったが検出はできなかった。
- 7 白澤 崇 2008『墳丘構築技法の変遷と系譜』『静岡県考古学研究』40号 青木 敬 2003『墳丘構築法の再検討』『古墳築造技術の研究』六一書房
- 8 現時点においては、大牧1号墳（各務原市）のTK209段階が最終期の前方後円墳と考えられる。

## 第6章 属性の整理と比較

両墳墓とも損壊が激しく、完全な墳形を復元するのは困難であった。特に杉洞1号墳については推定復元の域を出ないとの指摘はあるだろう。その点は今後の課題であるが、今回の調査で得られた所見を基に両墳墓の属性の整理と比較をしておく。

**墳形について** 墳形は、両墳墓とも円形の主丘部に突出部が付く形と推定し、外表施設は認められない。具体的平面形については、両墳墓とも主丘部は円形の可能性が高いと推定したが、蓮野1号墳では明確なくびれ部を形成していない可能性を指摘した。全長は、杉洞1号墳が約30m、蓮野1号墳が約28m、主丘部の直径は杉洞1号墳が約18m、蓮野1号墳が約15mと推定した。

蓮野1号墳の突出部の幅は3トレンチの調査から考えて推定14m程度と考えられ、主丘部の直径もこれとほぼ同じと想定されることから、非常に幅広い正方形に近い突出部が取り付く形態と想定される。一方、杉洞1号墳は3トレンチの調査から少し大きめに考えても幅11m程度と考えられ、長方形に近い突出部形であろう。主丘部は直径約18mを想定しているため、例えるなら柄杓型の墳形である可能性が高い。主丘部の大きさと突出部の取り付き方に相違が見出せる。

墳形は上記のように想定するが、いずれのトレンチにおいても墳丘端部の造作が不明瞭で、自然地形との境界を明確に区画する意図はあまり認められない。むしろ丘陵地形と一体化させることで、より高い視覚的効果を意図しているかのようである。この点は、夕田茶白山古墳においても特徴として挙げられる点である。

**構築方法について** 緩やかな丘陵斜面に築造場所を定め、主丘部を丘陵上部側に、突出部を傾斜面にレイアウトしている点が共通点として挙げられる。この斜面地へのレイアウトも夕田茶白山古墳との類似点といえる。

杉洞1号墳では突出部の上面が主丘部の底面とほぼ同じ高さになる。蓮野1号墳でも土塊積みで積み上げた盛土区分Bの上面が主丘部の基盤造成面と同じ高さであった。谷側を盛土で嵩上げし、主丘部の底に高さを揃える意図を読み取ることができる。このような傾斜面に築造した利点は、主丘部における墳丘下層分の盛土が省略できるという点にあり、なおかつ断面形は一連の形に成形ができる。仮に平坦な場所で築造した場合、突出部の盛土高の分だけ主丘部下層にさらに盛土しなければならないのである。傾斜をうまく使った工夫であり共通する重要な特徴である。

盛土の方法をみていくと、杉洞1号墳は主丘部側で、蓮野1号墳では突出部側で土手状盛土が認められる。突出部については、杉洞1号墳は粘性土を多用しており、蓮野1号墳は約40cm×55cm×15cmの扁平な土塊を切り出して、端部を少し重ねながら交差して積まれたと推定した。盛土の用土や構築方法においては相違点がみられる。ただ、土塊について言えば、杉洞1号墳においても、主丘部の土手状盛土や突出部の上層には土塊の可能性のある盛土（図16の10・11・22・23層）が認められる。

突出部の盛土高を比較すると、厚い箇所では杉洞1号墳は1m程度、蓮野1号墳は1.8m程度ある。蓮野1号墳突出部は2段階以上の盛土工程が認められるが、特に盛土区分Bとした工程では、周縁部を尻上がり盛土して「皿状」に仕上げ、次の盛土区分Aの傾斜面流出を防いでいる。蓮野1号墳の方が高く盛る意図は強い。

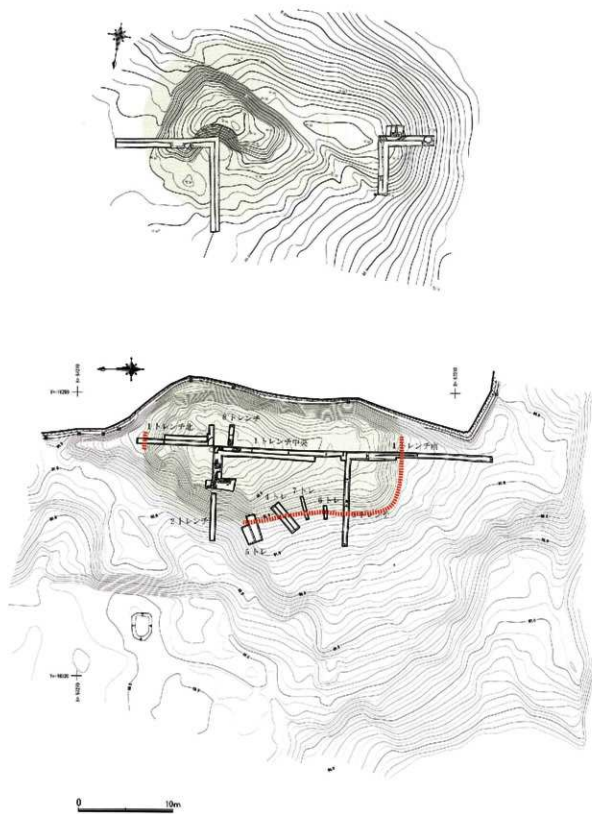
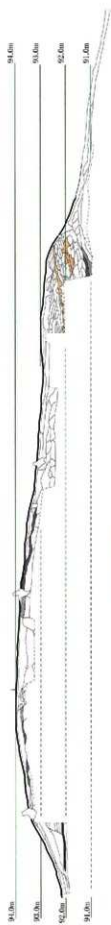
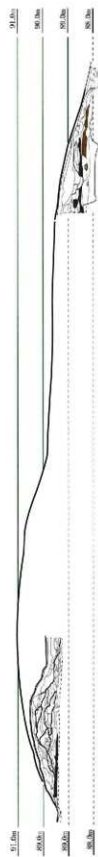


図 56 杉洞1号墳と蓮野1号墳の墳形比較 (1:400)





【蕨野 1号墳】



【杉洞 1号墳】



図 57 杉洞 1号墳と蕨野 1号墳の断面形比較 (1 : 150)

**突出部基底での土器の出土** 突出部の基底付近において杉洞1号墳では高坏が伏せた状態で出土し、蓮野1号墳では器台が並んで出土している。杉洞1号墳は、盛土を掘り込んで高坏を伏せていると考え、墳丘構築時に遺棄したものと推定した。蓮野1号墳基底部で出土した器台は、下層の堅穴状遺構に包含されており、堆積状況から確実に墳丘に伴うとは言い切れない状況である。しかし、次の4点において下層の堅穴状遺構と墳丘の関係については考慮が必要と考えている。

- ①下層堅穴状遺構の立ち上がり部分が墳丘端部とはほぼ合致する点
- ②土塊の積み始めが下層堅穴状遺構の立ち上がり部分と合致する点
- ③突出部と堅穴状遺構が位置的に重なる可能性がある点
- ④盛土区分Bの周縁部を尻上がりに傾斜させる工程に下層堅穴状遺構が関連する可能性がある点

杉洞1号墳においても突出部の下層に堅穴状遺構が確認されており、それらは突出部の下に収まって分布していた。この点においても両者に共通点がみられる。近隣の類例をみると、加佐美山墳丘墓（各務原市）において墳丘下に堅穴状遺構が確認されている（註1）。現場の所見としては、下層堅穴状遺構は墳丘の築造に際して何らかの関連性をもって築かれた遺構と考えている。今後は、類例の増加や収集による分析を行う必要がある。

**築造時期について** 杉洞1号墳については基底部から出土した高坏の所属時期である廻間Ⅰ式期後半をもって築造時期と推定した。蓮野1号墳については下層堅穴状遺構出土の器台が所属時期を考慮の上で争点となる。現場の所見から堅穴状遺構を墳丘築造に関連するものと考えれば、器台の所属時期である廻間Ⅰ式期前半が築造年代に近いと考えられる。この2つの出土土器を起点に考えると、蓮野1号墳から杉洞1号墳へと連続して築かれたと理解される。2つの墳墓には共通点が多く、特に築造立地と斜面側を嵩上げる工程の共通性は、築造主体が同様である可能性を示唆する。墳形もより不整形で独自性の強い蓮野1号墳から、突出部長方形の杉洞1号墳への変化は、前方後円形である夕田茶臼山古墳への過渡的变化として連続性を肯定する要素でもある。突出部（前方部）において築造時に盛土を掘削する行為が杉洞1号墳において認められたが、これは夕田茶臼山古墳でも確認されており（註2）、同様の習わしを共有している可能性があるとした。夕田の谷という区切られた領域内での社会的連続性の中で、夕田茶臼山古墳を含めた3墳墓が連続して築かれたと説明できる要素は多い。

**今後の課題** 次に課題について触れておきたい。1つは蓮野1号墳の突出部において認められた表土積み換えの土塊積み技術である。表土積み換えの工法は、4世紀後半の津堂城山古墳外堤（藤井寺市）や五手治古墳（羽曳野市）が初現と考えられており、古市古墳群で採用された技術が5世紀に百舌鳥古墳群等へ広がるとされる。そして全国への波及は5世紀末からと考えられており、研究史との齟齬は課題である。土塊を切り取るための農具の画期との整合性の問題もある。古墳時代中期におけるU字形鉄刃曲柄鋤の誕生が農具の大きな画期であり、古墳築造への影響も指摘されている（註3）。この画期が、土塊や土のうの使用の画期と関連する可能性も議論されている（註4）。

美濃における土塊利用をみてみると、それ程多くはない。その中で、気になる事例が2つある。大垣市の粉糠山古墳において、くびれ部を調査したトレンチの下層にて、30～50cmで端部が丸みを帯びる断面形状がレンズ状の堆積が確認されており、他の地点の盛土と様相が異なることから注意が必要と指摘されている（註5）。また、豆飯大塚古墳の針貫入試験において、下層の黒色土（黒はく）において鉛直方向に強度が連続する部分が確認され、「塊状～ブロック状に切り出され、その状態のまま運ばれて

配置されたため、元々の堆積構造を残したまま墳丘に取り込まれたものである可能性」が提示されている(註6)。大垣市におけるこれらの事例は、古墳築造予定地周辺の地表や地層の一部を塊で切り出し、そのまま墳丘盛土として積んだ「土塊積み」の可能性も指摘されている(註7)。盛土への土塊の利用自体は、遑って考える余地はあるのではないだろうか。塊のまま運搬し利用するのは非常に合理的であり、土に慣れ親しんだ者であれば意図する技術である。ただし、土塊を切り取るために使用した農工具の問題については検討する必要がある。これだけの盛土を削出して積み上げる技術には、それに相応した農工具の使用が想定される。弥生時代以来の農工具でそれが可能であるのか。それとも可能にする農工具の画期があるのかは検討する必要があるだろう。大きな課題である。

美濃地域においては近年、廻間Ⅰ式期から盛土で墳丘を構築した高塚系の墳墓の事例が増加し、円形墓の動向と関係している可能性が指摘される。列島規模で考えた場合に庄内式期の盛土事例がそれほど多くない中で、こうした高塚指向の契機は一体何であったのか。弥生時代後期後半～庄内式期における盛土を有する墳墓の事例を集成し検討する必要があるだろう。

こうした課題については、総括報告書2において検討していきたい。

#### 註

- 1 各務原市教育委員会 1990「加佐美山Ⅰ号墳発掘調査報告書」各務原市文化財調査報告書第7号
- 2 T1のSD01として報告されている。富加町教育委員会 2014「夕田茶臼山古墳範囲確認調査報告書」富加町文化財報告書第27号、15頁
- 3 樋上 昇 2019「東海地方における木製土具の変遷について-曲柄杵を中心に-」『東海における古墳時代の土木技術を考える』第32回考古学研究会東海例会資料集
- 4 第32回考古学研究会東海例会「東海における古墳時代の土木技術」シンポジウムにおいて
- 5 大垣市教育委員会 2011「粉嶺山古墳」大垣市文化財調査報告書第48号
- 6 三村 衛 2013「土塊の調査・分析・工法試験」『史跡 墨坂大塚古墳Ⅲ 保存整備事業報告書』大垣市教育委員会
- 7 島田 崇正 2019「美濃における古墳の築造技術について」『東海における古墳時代の土木技術を考える』第32回考古学研究会東海例会資料集



# 写真図版







1. 杉洞1号墳 墳丘東端付近土手状盛土（1トレンチ）



2. 杉洞1号墳 墳丘東端付近（1トレンチ）





3. 杉洞1号墳 墳丘中央付近（1トレンチ）



4. 杉洞1号墳 墳丘中央付近（1・2トレンチ）



5. 杉洞1号墳 墳丘中央付近(2トレンチ)東から



6. 杉洞1号墳 突出部側面(3トレンチ)北から



7. 杉洞1号墳 突出部土層（3トレンチ東壁）南西から



8. 杉洞1号墳 突出部中央付近堆積状況（3トレンチ東壁）西から



9. 杉洞1号墳 突出部墳裾付近堆積状況(3トレンチ)西から



10. 杉洞1号墳 突出部前面堆積状況(4トレンチ)北東から





11. 杉洞1号墳 突出部前面堆積状況(4トレンチ南壁)北から



12. 杉洞1号墳 突出部前面高環出土状況(4トレンチ南壁)北から



13. 杉洞1号墳 突出部前面填裾付近（4トレンチ南）北から



14. 杉洞1号墳 突出部前面堆積状況（4トレンチ北壁）南西から



15. 杉洞1号墳突出部 基部高環・壺出土状況(4トレンチ)北から



16. 杉洞1号墳突出部 基部高環・壺出土状況(4トレンチ)南から





17. 杉洞1号墳突出部 底部部高坏・壺出土状況（4トレンチ）北東から



18. 杉洞1号墳突出部 底部部高坏・壺出土状況（4トレンチ）西から



19. 杉洞1号墳突出部 底部部高坏・壺出土状況（4トレンチ）南東から



20. 杉洞1号墳突出部 SX02 完掘状況（4トレンチ）南西から



21. 蓮野1・2号墳主丘部墳裾(1トレンチ北)北から



22. 蓮野1・2号墳主丘部堆積状況(1トレンチ北)北東から



23. 蓮野1号墳主丘部墳裾堆積状況(1トレンチ北)東から



24. 蓮野1号墳主丘部地山検出状況(2トレンチ西)西から





25. 蓮野1号墳主丘部盛土基部堆積状況(2トレンチ北)西から



26. 蓮野1号墳主丘部堆積状況(2・5トレンチ)西から



27. 蓮野1号墳突出部土塊堆積状況(1トレンチ南)南から



28. 蓮野1号墳突出部土塊検出状況（1トレンチ南）北から



29. 蓮野1号墳突出部堆積状況（1トレンチ南）西から





30. 野1号墳突出部 地山上面炭化物・焦土検出状況①(1トレンチ南)南から



31. 野1号墳突出部 地山上面炭化物・焦土検出状況②(1トレンチ南)南から



32. 蓮野1号墳突出部側面填裾堆積状況(3トレンチ)南から



33. 蓮野1号墳突出部側面堆積状況(3トレンチ)南から



34. 蓮野1号墳突出部側面～墳頂部堆積状況（3トレンチ）南から



35. 蓮野1号墳突出部 墳裾堆積状況（3トレンチ）南から



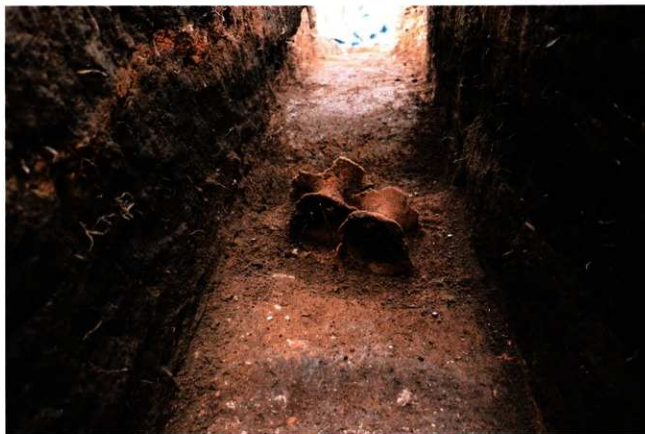
36. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況①(3トレンチ) 東から



37. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況②(3トレンチ) 西から



38. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況③(3トレンチ)



39. 蓮野1号墳突出部 器台出土状況④(3トレンチ) 東から





40. 蓮野2号墳石室側壁及び閉塞石（2トレンチ）北から



41. 蓮野2号墳 石室入口閉塞石（2トレンチ）南から

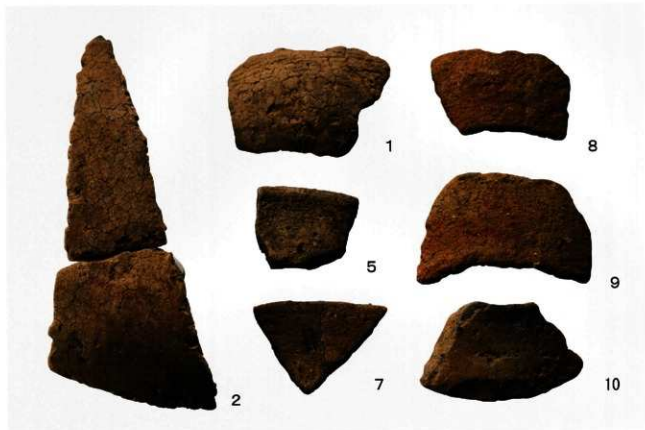


42. 杉洞1号墳出土高坏

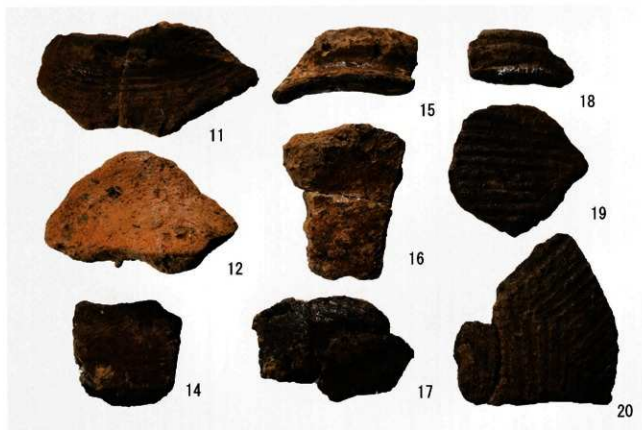


43. 杉洞1号墳出土高坏脚部

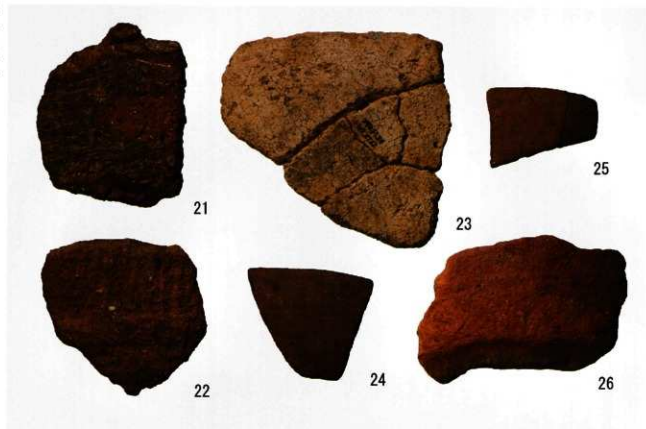




44. 杉洞1号墳出土土器①



45. 杉洞1号墳出土土器②



46. 杉洞1号墳出土土器③



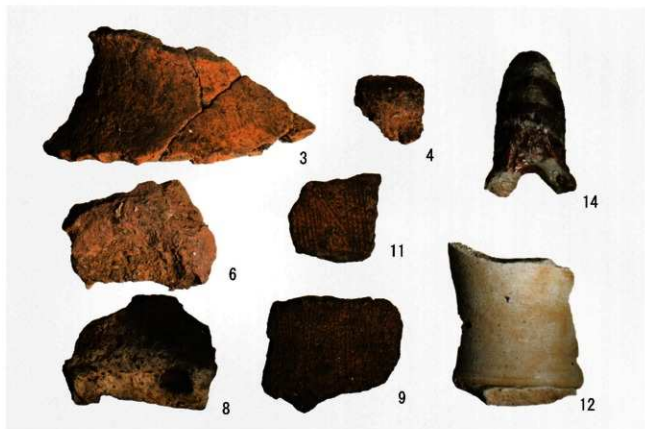
47. 杉洞1号墳出土土器④



48. 蓮野1号墳出土器台 1 (ZT141)



49. 蓮野1号墳出土器台 (ZT142)



50. 蓮野1・2号墳出土遺物 (ZT141)



51. SX01 出土須惠器坏身

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ゆうだふんばぐんそうかつほうこくしょ1 はくつちようさへん							
書名	夕田墳墓群総括報告書1 (発掘調査編)							
副書名	杉洞1号墳 蓮野1・2号墳							
巻次								
シリーズ名	富加町文化財報告書							
シリーズ番号	第29号							
編著者名	高田崇正							
編集機関	富加町教育委員会							
所在地	〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田1511 TEL 0574-54-2177							
発行年月日	西暦2019年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °			
杉洞1号墳	岐阜県加茂郡 富加町夕田 字杉洞地内	21502	4352	35度 48分 36秒	136度 98分 70秒	2016.12.5 ～ 2017.2.16	40.18㎡	保存目的の範囲 確認調査
蓮野1号墳	岐阜県加茂郡 富加町夕田 字蓮野地内	21502	4356	35度 48分 36秒	136度 98分 70秒	2017.11.9 ～	55.5㎡	
蓮野2号墳	岐阜県加茂郡 富加町夕田 字蓮野地内	21502	11841	35度 48分 36秒	136度 98分 70秒	2018.3.12		



富加町文化財報告書 第29号  
夕田墳墓群総括報告書1（発掘調査編）  
杉洞1号墳 蓮野1・2号墳

発行年 西暦2019年3月19日

発行者 岐阜県加茂郡富加町教育委員会

〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田1511

TEL 0574-54-2177 FAX 0574-54-2461

印刷 西濃印刷株式会社